

東京都国分寺市

恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅲ

1982.3

国分寺市教育委員会
恋ヶ窪遺跡調査会

序

国分寺市内には、武蔵国分寺跡とともに数多くの遺跡が存在していますが、中でも野川の源流に位置する恋ヶ窪遺跡は縄文時代の遺跡として古くからよく知られています。この遺跡については、過去幾度も調査が行われ、今日にあっては昭和51年12月に発足した恋ヶ窪遺跡調査会によって調査が進められ、多くの調査実績をあげてまいりました。しかしながら、時代とともに都市化の波はこの地域にも例にもれず押し寄せ、広範囲な調査が困難になってきている現状であります。こうした中で、このたびの調査、研究が実施され、本報告書が刊行できましたことは誠に喜ばしい限りであります。特に今回の調査地域は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」によって詳細に報告された地域に隣接しており、遺構等のつながりなどが明らかになったことは、今後の遺跡研究に大きく寄与するものと思われまます。

この調査実施にあたりましては、文化庁、東京都、国分寺市文化財保護審議会の関係者をはじめ、恋ヶ窪遺跡調査会の団長、役員他の方々にご指導でご援助をいただきながら進めてまいりました。また、この研究に対しまして地元住民、関係者の暖かいご協力とご理解がありましたことなど、本書をかりまして心からお申礼し上げるものであります。

終りに本報告書が恋ヶ窪の古代文化を伝える貴重な資料としてすでに刊行された恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ、Ⅱ、とあわせて広く活用されることを願ってやみません。

昭和57年3月31日

恋ヶ窪遺跡調査会

会長 興津 精二

例 言

1. 本書は、東京都国分寺市西恋ヶ窪に所在する恋ヶ窪遺跡の第10次調査報告である。調査地は国分寺市西恋ヶ窪1丁目20番地である。
2. 恋ヶ窪遺跡調査会は会長を興津精二国分寺市教育長、調査団長を永峯光一東京都文化財保護審議会委員が担当し、事務局を国分寺市教育委員会文化財課に置いた。調査会組織は文末に別掲する。
3. 本書は永峯光一団長を中心として、調査員広瀬昭弘、秋山道生、砂田佳弘、調査補助員山崎和巳、石川朗が文担執筆し、その文責を文末に明記した。なお、編集は広瀬が行った。
4. 発掘調査ならびに整理作業に参加していただいた方々は下記のとおりである。

発掘参加者

石川朗、入江涉二、大森聰、奥山和久、菊地健一、小松真名、鈴木陽一、滝沢、立石慎、中道雄二、西山和成、堀江義孝、山根三郎、山崎和巳、吉岡哲也

整理参加者

石川朗、入江涉二、小鷲薫、小松明美、中山真治、深瀬恵津子、山崎和巳

5. 発掘調査から報告書作成にいたる調程で、次の方々や機関から御協力、御助言を賜った。厚く御礼申し上げます。

安孫子昭二、有吉重蔵、伊藤富治夫、岡崎完樹、上村昌男、川崎義雄、佐藤敏也、高林均、館野孝、館野晶子、中島庄一、中西充、西脇俊郎、早川泉、福田信夫、本多義章、本多章吉、松井新一、宮崎博、米田明訓、東京都教育庁文化課、多摩市遺跡調査会、武蔵国分寺遺跡調査会

凡 例

1. 遺構番号は原則として確認順に連続番号を付した、整理工程の事由等により必ずしも調査次数順とはなっていない。
2. 遺構押図のレベルポイントは、特別の指示がない限り76.1mを表す。遺物出土状態の図中●は土器、○は石器・礫を示す。
3. 土器実測図で斜線は欠損を、点線は隆帯の剝落を表現する。
4. 押図の縮尺は次のとおりである。
住居址 1/50、竪・埋壘 1/20、集石 1/20、土墳 1/10、土器 1/6（一部 1/4）、石器 1/6（一部不統一である）、土製品 1/4
5. 土器写真は縮尺 1/4 を原則とするが、一部 1/6 もある。
6. 石器写真は縮尺 1/4、1/2、1/3 とがある。

目 次

序

第1章 調査経過	1
第1節 調査に至る経過	1
第2節 調査方法と経過	1
第2章 遺跡概観	3
第1節 恋ヶ窪遺跡の立地と環境	3
第2節 周辺の遺跡	5
第3節 層序	7
第3章 遺構	9
第1節 住居址・集石・土塙	9
第2節 住居址内遺物出土状態について	26
第3節 集石について	36
第4章 遺物	38
第1節 土器	38
第2節 石器	67
第3節 土製品	103
第5章 まとめ	109
第1節 恋ヶ窪遺跡の集落構造について	109
第2節 出土土器について	114
第3節 打製石斧について	120
引用参考文献	130
あ と が き	133
山下実文化財課長追悼録	135

挿 図 目 次

第1図	窓ヶ窪遺跡と周辺の湧水……………	2	第32図	6号住居址出土石器(第1次調査)(1/6)……	63
第2図	遺跡地形図(昭和14年)……………	4	第33図	4号住居址出土石器(第1次調査)(1/6)……	64
第3図	窓ヶ窪遺跡と周辺の主要遺跡……………	6	第34図	4号住居址出土石器(第1次調査)(1/6)……	65
第4図	層 序 (1/60)……………	7	第35図	1964年度調査出土石器(1/6)……………	66
第5図	調査区全体図(1/250)……………	8	第36図	5号住居址石器(1/3)……………	74
第6図	3号・4号・16号住居址(1/60)、3号 住居址埋壁(1/20)……………	10	第37図	5号住居址出土石器(1/3)……………	75
第7図	5号・15号住居址(1/60)、5号住居址 埋壁(1/20)……………	12	第38図	14号住居址出土石器(1/3)……………	77
第8図	5号・15号住居址方位(1/30)、5号・ 15号住居址断面図(1/60)……………	13	第39図	14号住居址出土石器(1/3)……………	78
第9図	6号・8号住居址(1/60)……………	15	第40図	15号住居址出土石器(1/3)……………	80
第10図	14号住居址(1/60)、炉址(1/30)……………	19	第41図	15号住居址出土石器(1/3)……………	81
第11図	13号・17号住居址(1/60)、2号・3号・ 4号集石(1/30)……………	21	第42図	遺構外出土石器(1/3)……………	84
第12図	土 城(1/40)……………	25	第43図	石 鏃(4/5)……………	85
第13図	5号住居址遺物出土状態(1/50)……………	29	第44図	石鏃分類模式図……………	86
第14図	5号住居址石器出土状態(1/50)……………	30	第45図	鏃 器(4/5)……………	88
第15図	14号住居址遺物出土状態(1/50)……………	31	第46図	鏃 器(4/5)……………	90
第16図	14号住居址遺物出土状態(1/50)……………	32	第47図	小形鏃製石斧・石槍(4/5)……………	92
第17図	14号住居址石器出土状態(1/50)……………	33	第48図	残 核(4/5)……………	94
第18図	15号住居址遺物出土状態(1/50)……………	34	第49図	残 核(4/5)……………	95
第19図	15号住居址石器出土状態(1/50)……………	35	第50図	ピンス=ヌスキュー(4/5)……………	96
第20図	3号集石埋合図……………	37	第51図	石器接合分布図……………	97
第21図	15号住居址出土石器(1/6)……………	40	第52図	石器接合図(2/3)……………	99
第22図	6号住居址出土石器(1/6)……………	42	第53図	磨石・石鏃接合図(1/3)……………	100
第23図	5号住居址出土石器(1/6)……………	44	第54図	磨製石斧接合図(4/5)……………	101
第24図	5号住居址出土石器(1/6)……………	45	第55図	炉石接合図……………	102
第25図	5号住居址出土石器(1/6)……………	50	第56図	土製品(1/2)……………	105
第26図	14号住居址出土石器(1/6)……………	52	第57図	土製円板(1/2)……………	106
第27図	14号住居址出土石器(1/6)……………	53	第58図	土製円板(1/2)……………	107
第28図	3号・13号住居址・2号・3号集石・ 22号土城出土石器(1/6)……………	56	第59図	窓ヶ窪遺跡遺構配置図(1/5000)……………	113
第29図	遺構外出土石器(1/6)……………	59	第60図	台付石器の形式(Form)……………	115
第30図	3号住居址出土石器(第1次調査)(1/6)……	60	第61図	文様模式図……………	119
第31図	3号住居址出土石器(第1次調査)(1/6)……	61	第62図	石器接合図(1/4)……………	123
			第63図	石器接合図(1/3)……………	124
			第64図	打製石斧計測グラフ……………	125
			第65図	打製石斧形態模式図……………	126
			第66図	打製石斧接合資料(1/3)……………	129

表 目 次

第1表 集石出土礎分析	23	第6表 その他の遺構出土石器一覽	82
第2表 出土石器一覽	36	第7表 遺構外出土石器一覽	83
第3表 5号住居址出土石器一覽	73	第8表 土鏝・土製円板計測表	108
第4表 14号住居址出土石器一覽	76	第9表 打製石斧の主要剥離面と石埋	121
第5表 15号住居址出土石器一覽	79	第10表 打製石斧の欠損面	126

図 版 目 次

図版1 遺 跡	図版22 14号住居址出土石器
図版2 3・13号住居址	図版23 その他の遺構出土石器
図版3 5・6・15号住居址	図版24 その他の遺構出土石器
図版4 15号住居址出土状態	図版25 遺構外出土石器
図版5 6号住居址出土状態	図版26 遺構外出土石器
図版6 5号住居址出土状態	図版27 5号住居址出土石器
図版7 5号住居址出土状態	図版28 5号住居址出土石器
図版8 5号住居址埋藏・炉	図版29 14号住居址出土石器
図版9 14号住居址	図版30 15号住居址出土石器
図版10 14号住居址出土状態	図版31 14・15号住居址、遺構外出土石器
図版11 16号住居址	図版32 遺構外出土石器
図版12 2号集石	図版33 遺構外出土石器、石鏝・鏝器
図版13 3号集石	図版34 各種石器
図版14 4号集石	図版35 石器接合資料
図版15 発掘風景	図版36 石器接合資料
図版16 15号住居址出土石器	図版37 石器接合資料
図版17 5号住居址出土石器	図版38 石器使用痕
図版18 5号住居址出土石器	図版39 石器使用痕、土製品
図版19 5号住居址出土石器	図版40 土製円板
図版20 5号住居址出土石器	図版41 土器匠痕
図版21 14号住居址出土石器	

第1章 調査経過

第1節 調査に至る経過

東京都の西郊に位置する国分寺市の埋蔵文化財で、最も著名なものは武蔵国分寺であろう。しかし、武蔵国分寺が建立される遡か以前より、人々はこの地に営々と生きついていた。武蔵野台地南縁に形成された恋ヶ窪遺跡も、こうした遺跡の一つであり、縄文時代中期の大集落址である。

恋ヶ窪遺跡はかなり以前より知られていたが、組織だった調査は行われてこなかった。昭和51年恋ヶ窪遺跡調査会が設立され、今日まで恋ヶ窪遺跡及び周辺の遺跡で、範囲確認調査または開発行為に伴う事前調査を行っている。恋ヶ窪遺跡調査会設立に至る経過及び調査会設立以前の調査については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」に詳しい。

昭和54年4月、恋ヶ窪遺跡の中央部で分譲住宅建設に伴う基礎工事が行われていることを知った。この地点は、住居址9軒等を検出した第1次調査地の東側にあたり、住居址の存在が予想される地点であった。そこで、工事の一時停止を申し入れ、施工主の承諾をえた。それと共に教育委員会では施工主と協議をかさね、緊急調査を実施することとなった。

第2節 調査方法と経過

調査は昭和54年5月28日より開始し、8月11日に終了した。調査面積は約210^mである。

調査区の設定は、本調査地が第1次調査地と隣接することから、第1次調査北側のグリッドと平行に、南西隅を基点とし2mグリッドを設定した。調査方法は期間が限られていること、出土遺物量が多大であることなどから全出土遺物の記録化までにはいたらなかった。

出土遺物の記録・取り上げは、概ね次のような手順を踏み行った。

1. 表土除去から遺構確認までは、特殊遺物、一括出土遺物を除いてグリッドごとに取り上げる。
2. 遺構確認後は、セクションベルトを設定し、他の部分を床面まで掘り下げる。この際、完形あるいは完形に近い大形土器片及び石器類は残し、遺構全体における遺物出土状態を観察・記録し取り上げる。それ以外の細片、礫等は遺構覆土として取り上げる。
3. セクションベルトで覆土の観察を行い、ベルト内出土遺物をすべて位置、レベルを記録しつつ床面まで掘り下げる。

(広瀬)



第1図 窓ヶ窪遺跡と周辺の湖水

第2章 遺跡概観

第1節 恋ヶ窪遺跡の立地と環境

恋ヶ窪遺跡は東京都国分寺市西恋ヶ窪1丁目に所在し、崖下に多摩川の支流である野川の源となる湧水を見下ろす武蔵野段丘面上に立地する(第1図)。武蔵野台地(段丘面)は、関東山地から流れ出る多摩川と秩父山系に源を発する荒川とにはさまれた洪積台地であり、その南縁は国分寺崖線を境としてより低位の立川段丘面と画されている。国分寺崖線は比高差12m程度の急崖で、通称「ハケ」とも呼ばれている。崖線下には、その源流の一つを恋ヶ窪遺跡の裾にもつ野川が、崖線から湧き出す湧水を集めつつ、小金井・三鷹・世田谷方面へと流れ多摩川に注いでいる。

この野川に面する武蔵野段丘面及び立川段丘面には先土器時代から縄文時代にかけての遺跡が細々と連なり野川流域遺跡群が形成されている。恋ヶ窪遺跡は、この野川流域遺跡群の最上流部に位置するのである。

遺跡をめぐる環境は、近年の宅地化の進捗等に伴い大きく変化しつつあるので、地形の人工的改変の少ない昭和14年「都市計画東京地方委員会」発行の地形図(第2図)を参考にして、恋ヶ窪遺跡の地理的環境をみてみたい。

恋ヶ窪遺跡は北側を除く三方向を開析谷に囲まれた舌状台地南西縁に位置する。台地は標高75m前後で、東西約600m、南北約400mの広さを有する。台地を囲む谷は、国分寺駅南西から北側に開析したものが二手に分かれたもので、南側から西側に伸びる谷を恋ヶ窪谷、東側から北側にかけて伸びる谷をサンヤ谷という。この谷には各地に湧泉が存在し(三多摩問題調査研究会 1976「野川流域の自然」)、第1図のスクリーン・トーン部は標高70m以下の谷部を示し、④は湧泉地を指す。この湧水が集まり野川となるのである。しかし、現在は各種工事等により幾つかの湧泉は枯れてしまっている。台地は西武国分寺線により東西に二分されており、西側を恋ヶ窪遺跡、東側を日立中央研究所構内遺跡(羽根沢遺跡)と呼称している。しかし、今日までの調査では恋ヶ窪遺跡が西武線西側で完結するとは考えられず、東側の日立中央研究所構内遺跡も恋ヶ窪遺跡と同一の遺跡として扱っておきたい。但し、台地全体に集落が営まれていたと考えるよりも、台地中央部にある小さな谷をはさんで東西に二つの集落が対峙していたと考えた方が良さそうである。この点に関しては後述する。

なお、恋ヶ窪遺跡の崖下に存在した湧泉は姿見の池と呼ばれているが、鎌倉時代の武將畠山重忠と夙太夫という遊女との悲恋の物語「一葉松の伝説」で、夙太夫が入水自殺した池といわれている。



第2図 遺跡地形図(昭和14年)

第2節 周辺の遺跡

恋ヶ窪遺跡をはじめとする野川流域遺跡群については「小金井市貫井南遺跡調査報告」に先土器時代・縄文時代に分けられ一覧表で表わされている。また、国分寺市から小金井市にかけての遺跡については「恋ヶ窪遺跡調査報告1」にも詳細に記載されている。ここでは前出のものと同様の重複するが、最近の調査成果を中心に周辺の遺跡を瞥見する（第3図）。

1. 恋ヶ窪遺跡。本報告の縄文中期の集落址である。最近、先土器時代の石器群、縄文後期土器等も検出されている。

4. 武蔵国分寺関連遺跡。国分寺崖線上の武蔵野段丘面には先土器時代から縄文時代にかけての遺跡も複合する。国重要文化財に指定されている勝版式土器を出土した多喜窪遺跡は、崖線上の西元町二丁目に所在する。近年、下水道工事に伴う事前調査で勝版式期の住居址等も検出されている。恋ヶ窪遺跡との関係で重要な意味をもつ遺跡である。また、立川段丘面で、武蔵国分寺僧寺の南方約400mに位置する都市計画道路調査地でも縄文土器片、石器類が出土している（高林・岡崎 1981）。

6. 花沢東遺跡。国分寺駅南口に広がる遺跡で、都営住宅建築に伴う事前調査が行われている。縄文中期中葉の住居址の他、先土器時代の文化層も数枚確認されている。

7. 1894年から5年にかけて、鳥居龍藏博士が『東京人類学会雑誌』に報告した国分寺村石器時代遺跡である。ビル建築に伴う調査で縄文中期後葉の住居址が6軒検出されている。

12. 貫井南遺跡。1972年、都道建設にかかる調査で、縄文中期初頭から末葉にかけての住居址16軒が検出されている。また、1979年にも小規模な調査が実施され、縄文中期後葉の住居址1軒が検出されている（伊藤富治夫 1980）。

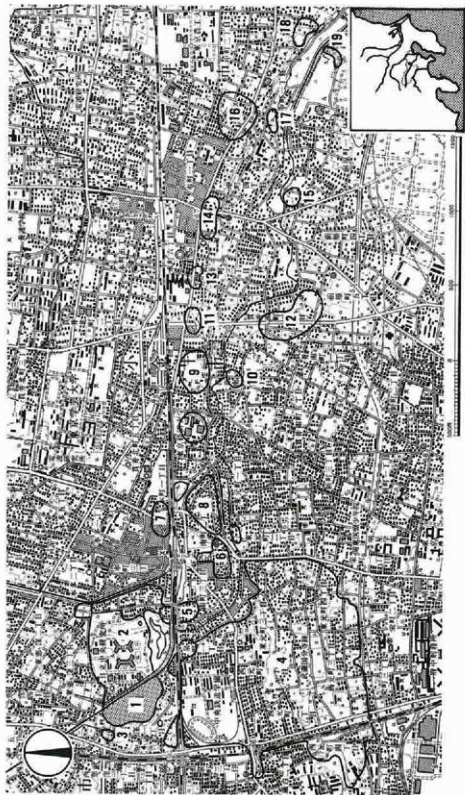
16. 中山谷遺跡。縄文中期の大集落址である。過去数度の調査が実施され、縄文中期中葉から後葉にかけての住居址が多数検出されている。最近も調査が行われ、該期の住居址等が重複して検出されている。^{*1}

17. 新橋遺跡。立川段丘面で野川に沿った微高地に所在する縄文後期を主とした遺跡である。野川改修工事に伴う調査で、後期Ⅱ内式から加曾利B式にかけての遺物が検出されている。住居址と想定される遺構も検出されている。

18. 栗山遺跡。中山谷遺跡の東方に所在する縄文中期中葉を中心とした集落址である。

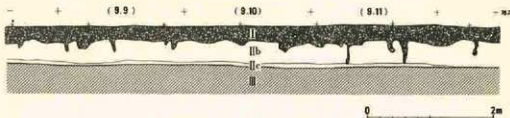
注

* 1 伊藤富治夫氏御教示による。



1. 恋ヶ窪 2. 日立中央研究所構内 3. 熊の郷 4. 武藏国分寺・武藏国分寺尼寺・多喜窪 5. 花沢西 6. 花沢東 7. [国分寺村石器時代遺跡]
 8. 殿ヶ谷戸 9. 真井 10. 荒牧 11. はけうえ 12. 真井南 13. 平代坂 14. 西之台 15. 前原 16. 中山谷 17. 新橋 18. 栗山 19. 武藏野公園

第3図 恋ヶ窪遺跡と周辺の主要遺跡



第4図 層序 (1/60)

第3節 層序

恋ヶ窪遺跡の基本層序は、既に「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」に記したとおりであるが、今回調査地での所見等も加えて再び述べておく。

Ⅰ層 黒色の表土層。畑耕作土で30～40cmの厚さを測る。本層下部より遺物が出土しはじめる。

Ⅱa層 黒色土層。粒子が粗く、粘性も弱いややゴソゴソした土層である。今回調査地点ではⅠ層の擾乱のため観察できなかったが、他の調査地等では10～15cmの層厚をもつ。

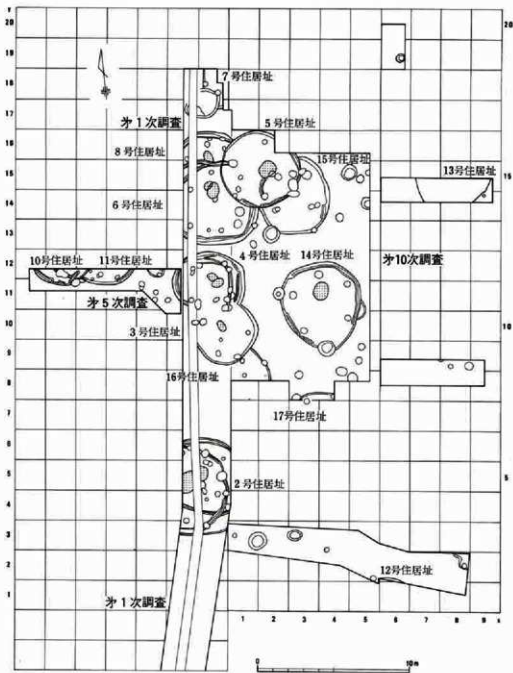
Ⅱb層 暗茶褐色土層。堅く締り、赤色スコリア粒、炭化物等を含む。層厚は20～40cmである。縄文時代の遺物包含層である。このⅡb層は下部にいたる程赤色スコリア粒が増し、色調もやや明るくなる。遺物の出土状況は、Ⅱb層中程までは比較的満遍なく出土するが、それ以下では遺構が伴わないと遺物は極めて少なくなる。当時の生活面は大体Ⅱb層中位あたりにあったものと推測される。

Ⅲa層 褐色土層。ローム漸移層である。Ⅱb層、Ⅲb層とは漸移的に変化する。遺物はほとんど包含されない。

Ⅲb層 黄褐色軟質ローム層。立川ローム最上部である。今回はローム層中の調査は行っていない。

恋ヶ窪遺跡は、前述したように武蔵野段丘面にあり、武蔵野礫層の上部に武蔵野ローム層・立川ローム層が厚く堆積している。本遺跡では第1次調査の際、立川ローム第2黒色帯下部まで層序の観察を行った。それについては「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」を参照されたい。

(広瀬)



第5図 調査区全体図 (1/250)

第3章 遺構(第5図)

第1節 住居址・集石・土壇

第10次調査で検出された遺構は住居址10軒、集石(土壇)、3基、土壇7基である。一部時期不詳の土壇を除き、いずれも縄文中期中葉から後葉にかけて構築されたものである。

1. 住居址

検出された10軒の住居址を時期別^{*)}にみると、勝板Ⅱ式期1軒(3号住居址)、加曾利E式第Ⅱ段階2軒(13号・15号住居址)、加曾利E式第Ⅲ段階1軒(6号住居址)、加曾利E式第Ⅳ段階4軒(4号・5号・14号・16号住居址)、時期不詳2軒(12号・17号住居址)である。なお、10軒のうち、3号・4号・5号・6号住居址は、隣接地の第1次調査にかかり、部分的に調査を実施したもの^{**)}であるが、今回第1次調査分も含めて再度報告するものである。また、12号・13号住居址は確認調査のみで、遺構内の精査は行っていない。

3号住居址(第6図、図版2)

<位置> (1,9~11)区に位置する。炉を含む住居址主要部は第1次調査にかかるもので、今回は東側1/3程度の調査である。北側に4号住居址、南側に16号住居址が重複する。

<形状> 直径4~4.2mの不整形を呈する。壁高20~35cm、床面はほぼ平坦である。周溝はめぐっていない。

<炉> 中央部やや北側に位置し、70×50cmの楕円形を呈する。炉内より2個の石が検出され、炉の掘り方からみて石囲炉であったものが抜き去られたものと思われる。

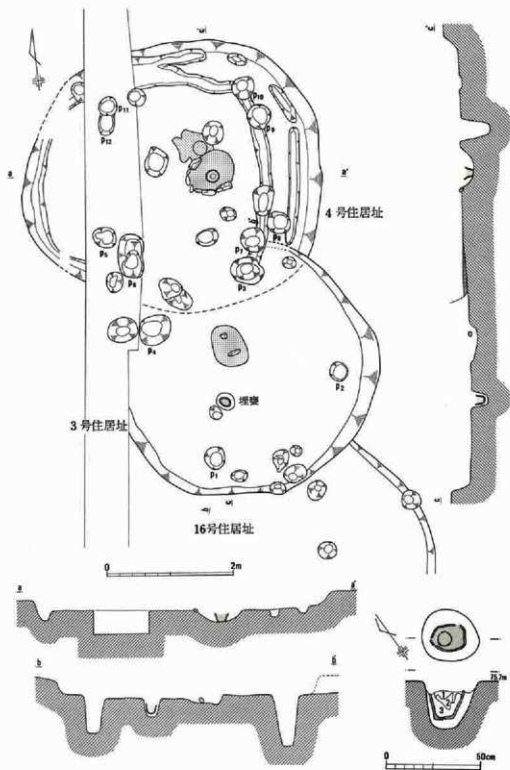
<柱穴> 11本のビットが検出されたが、P₁~P₄の4本が主柱穴である。各柱穴の深度^{**)}は、P₁ 59cm, P₂ 52cm, P₃ 82cm, P₄ 69cmである。南壁寄りの小ビットは入口構造に関係するものかもしれない。

<埋塞> 住居址中央やや南側にある。直径30cmのビット内に刷上半部を欠失する深鉢形土器が埋設されていた。埋塞内は住居址覆土と異なり、ロームブロック及びローム粒を多く含む土層等で覆われており、人為的に埋め戻したものであろう。埋塞の北40cmに炉が位置する。

<時期> 勝板Ⅱ式

<出土状態> 遺物出土状態に関しては、「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」に詳しいので、ここではその概略を述べることにする。

3号住居址の遺物出土状態の特徴は、住居址中央部の炉周辺より一括圧潰された5個体の土器が検出されたことである。これらの土器は床面より12~20cm程浮いており、床面との間層が



第6图 3号·4号·16号住居址 (1/60)·3号住居址埋藏 (1/20)

らは遺物がほとんど出土していない。この一括土器は、4個体の完形あるいは完形に近い勝坂式土器が圧潰された状態で出土し、それに隣接して同一レベルより胴部以下を欠損する阿玉台式深鉢形土器が検出されたものである。土器のすぐ脇床面直上より石製垂飾りが出土している。また、一括土器の真上20cm程の覆土中からも1個体の完形土器が押し潰された状態で出土した。

以上が第1次調査の出土状態であるが、今回の調査でも前述覆土上部出土土器とほぼ同一レベルより1個体の土器が押し潰された状態で出土している。

13号住居址（第11図、図版2）

〈位置〉（7～9, 14～15）区に位置する。この住居址は確認調査のみで、遺構内の精査は行っていない。

〈形状〉住居址の一部分を確認したに止まり、各種の属性については不明な点が多い。形状は、おおむね直径5m前後の円形に近いものと思われる。遺構確認面より床面までの深さは約25cmである。住居址東壁にピットが重複する。

〈覆土〉遺構確認面までの覆土は、基本層序のⅡb層に類似するが、覆土の方がやや暗く赤色スコリア粒・炭化物の含有が比較的多い。しかし、その差は僅かであり明瞭には区別できない。

〈時期〉加曾利E式第Ⅱ段階

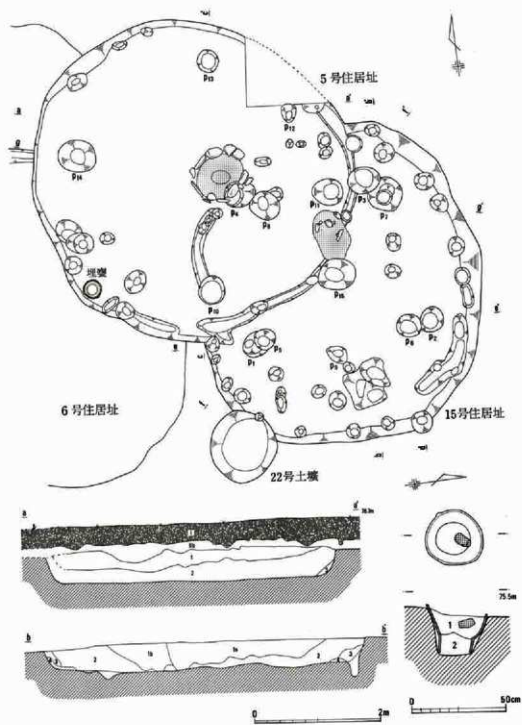
〈出土状態〉住居址内東側のⅠ層下部から覆土中程にかけて土器小破片・礫等がややまとまって出土した程度である。遺構確認面のレベルで加曾利E式第Ⅱ段階の底部が出土し、該期の住居址と推定した。

15号住居址（第7・8図、図版3・4）

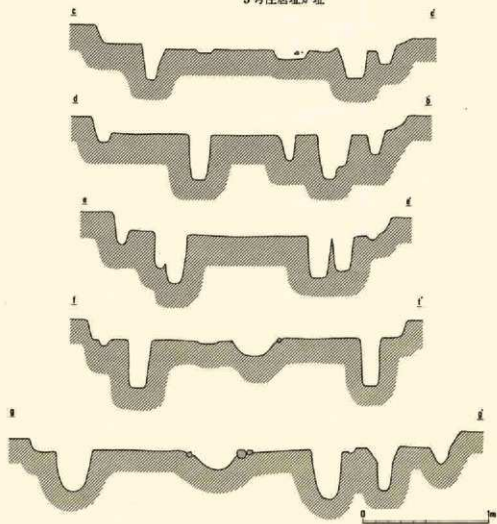
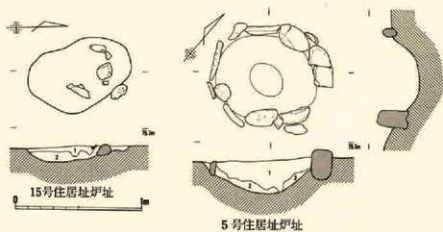
〈位置〉（2～4, 13～16）区に位置する。北西側1/4程度は5号住居址と重複し、また、南西壁には22号土壇が重なっている。15号住居址、5号住居址、22号土壇の順に構築されたものである。

〈形状〉長径5.1m、短径4.6mの隅丸方形に近い楕円形を呈する。壁高は30～35cmである。床面は堅く踏み固められており、特に東壁下及び炉の南側の一部は極めて堅硬である。周溝は、5号住居址と重複する西側部分と南東壁下に僅かに認められるのみである。周溝がめぐらない部分には直径20～30cm、深さ10～30cm程の壁柱穴がうがたれている。

〈覆土〉覆土は大きく4層に分けられ、中央部の1層は暗茶褐色土層で、赤色スコリア粒、ローム粒及び多量の炭化物を含む土層で、色調によりⅠa層・Ⅰb層に分けられる。2層は茶褐色土層で含有物はⅠ層と同様であるが、ローム粒子が極めて多い。3層・4層は壁際に認められローム粒子を含む土層である。



第7图 5号-15号住居址 (1/60), 5号住居址埋壘 (1/20)



第8图 5号·15号住居址炉址 (1/30), 5号·15号住居址断面图 (1/60)

〈炉〉 中央部やや北側に位置し、80×50cmの楕円形を呈する。床面からの掘り込みは15cm程である。炉縁及び炉内より7個の炉石と思われる石が出土しており、本来石囲炉であったものが、住居址廃絶時または5号住居址構築時に壊されたものと考えられる。炉床は良く焼けている。

〈柱穴〉 住居址内には40本以上のピットが検出され、そのうち主柱穴はP₁~P₄・P₅~P₈の8本である。これにより15号住居址は建て替えが行われたことが推測される。古い時期の柱穴がP₁~P₄で、その後各柱穴に隣接してP₅~P₈の柱穴を掘り、建て替えを行ったものであろう。いずれも4本柱である。古い時期の柱穴P₁~P₄はローム混じりの土層で埋め戻されているが、明瞭な貼床は行われていない。各柱穴の深度は、P₁ 54cm, P₂ 53cm, P₃ 50cm, P₄ 51cm, P₅ 81cm, P₆ 70cm, P₇ 73cm, P₈ 72cmである。なお、P₅とP₈の中間にあたるP₉も66cmの深度をもち、柱穴と関係するものかもしれない。

〈時期〉 加曾利E式第Ⅱ段階。

〈出土状態〉 遺物量の割には完形土器は少ない。詳細については後述する。

6号住居址（第9区、図版3・5）

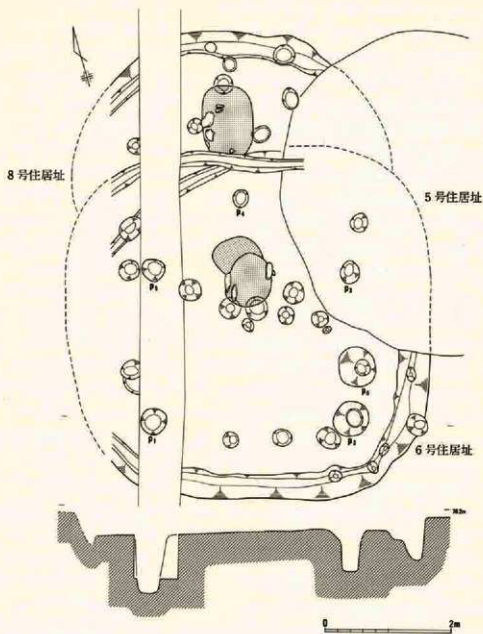
〈位置〉 (1~2, 13~15) 区で、3号住居址同様大半は第1次調査にかかるものである。第10次調査は東側1/4程である。北側に8号住居址、東側に5号住居址が重複する。3軒の住居址の新旧関係は8号住居址が最も古く、次いで6号住居址、最後の構築が5号住居址である。

〈形状〉 一辺5.4mの隅丸方形を呈する。壁高は25cm前後を測る。床面は全体的に堅く踏み固めてあり、ほぼ平坦である。周溝は調査部分では全周し、北側では2本の周溝が検出された。このうち、内側の周溝はローム質の土層で充填されており、住居の拡張あるいは建て替えが行われたものであろう。外側の周溝は幅20~25cm、深さ20cm前後でしっかりした周溝であり、20cmも床面の低い5号住居址床面でも一部確認された。

〈炉〉 中央やや北側で石囲炉と地床炉が重複して検出された。地床炉が古い時期のもので、直径50~70cmの不整形円形を呈していたと考えられる。石囲炉は地床炉を壊して構築しており、85×70cmの楕円形を呈する。炉石は数個が残存するのみで、他は炉石抜き取り痕が確認された。炉床は良く焼けている。また、焼土は炉内外に広く検出された。

〈柱穴〉 主柱穴はP₁~P₅の5本と思われる。各々の深度は、P₁ 94cm, P₂ 66cm, P₃ 78cm, P₄ 63cm, P₅ 80cm以上である。また、P₂の北側に深さ89cmを測る大形のピット(P₆)があり、柱穴と関係するものかもしれない。P₁とP₂の中間にある2本のピットは入口部に属するものであろうか。なお、6号住居址には炉の周辺にピットが多数検出されているが、これは8号住居址に属するピットである。

〈時期〉 加曾利E式第Ⅲ段階



第9图 6号·8号住居址 (1/60)

＜出土状態＞ 遺物は住居址内から満遍なく出土したが、特に南側に完形ないしは完形に近い土器を含む多くの遺物が出土している。しかし、土器は小破片が多く復原個体数は少ない。第10次調査では、P₆の北側で床面より若干浮いて胴下半部を欠損する深鉢形土器が出土している（第22図1、図版5上）。また第22図2はP₆覆土中の出土にかかる（図版5下）。第1次調査の出土状態については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」を参照されたい。

4号住居址（第6図）

＜位置＞ （1, 11～12）区に位置し、3号・6号住居址同様中央部分は第1次調査にかかるものである。第1次、第5次、第10次の3回の調査で発掘した。第10次調査は東壁部分のみの検出である。南側に3号住居址が重複する。

＜形状＞ 長径4.8m、短径4.4mの不整形円形を呈する。壁高は35cm前後である。床面は中央部がやや低く、さほど堅緻ではない。3号住居址と重複する部分には厚さ4～5cmの黄褐色土による貼床が行なわれているが、貼床も堅緻でなくその範囲もやや不明確である。尻溝は南側を除きめぐっており、東壁部では2本検出された。内側の周溝はローム質の土層で充填されている。住居が東側に拡張されたことによるものであろう。

＜炉＞ 炉は中央やや東寄りに2基重複して検出された。住居拡張に伴い位置を若干ずらし構築しなおしたものである。新しい炉は80×60cmの卵形をした石囲炉である。東側の炉石は抜き取られている。炉内中央部に胴下半を欠失させた土器（第34図6）がすえられていた。また、古い炉も石囲炉と考えられ、炉石抜き取り痕と思われる痕跡が確認された、規模は60×60cm程度であろう。

＜柱穴＞ 20本のピットが検出されたがP₅～P₁₃が主柱穴と思われる。住居の拡張によるもので、各時期とも4本柱であろう。しかし、いずれの柱穴が対応するのかわからない。深度はP₅ 65cm、P₆ 63cm、P₇ 53cm、P₈ 49cm、P₉ 45cm、P₁₀ 62cm、P₁₁ 70cm、P₁₂ 58cmである。

＜時期＞ 加曽利E式第Ⅳ段階。ただし、4号住居址炉体土器の胴下半部が14号住居址覆土中より出土しており、同じ第Ⅳ段階でも4号住居址の方が14号住居址より新しいものである。

＜出土状態＞ 「連弧文土器」がまとまって出土している。遺物の垂直分布は床面上20cm～50cmの間が多く、復原された土器は1個体を除き床面より15～25cm浮いた状態で出土した。出土状態についての詳細は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」を参照されたい。

5号住居址(第7・8図, 図版3・6~8)

<位置> (1~3, 14~16)区に位置する。第1次調査の際、西壁の一部を検出していたもので、6号・8号・15号住居址を切って構築されている。

<形状> 直径5.1mの円形を呈する。壁高は30~38cmを測り、壁面も明瞭である。床面は全体に堅く踏み固められている。6号住居址との床面差20cm, 15号住居址との床面差約5cmで5号住居址の方が掘り込みが深い。周溝は東壁から南壁にかけて幅15~20cm, 深さ7~8cmでめぐっている。

<覆土> 覆土は3層に分けられ、1層は黒褐色土層で炭化物を多量に含む。遺物はこの層の下層より多く出土した。2層は1層より明るく、ローム粒を多く含む土層である。3層は壁際で観察されたローム質の土層である。

<炉> 中央部やや東寄りで石皿炉が検出された。100×80cmの楕円形を呈し、床面からの掘り込みは約30cmである。石皿は、石皿の転用を含む大小14個の石で築かれており、一部を除き炉縁をめぐっている。炉壁及び炉床は良く焼けている。炉下より15号住居址柱穴が検出された。

<柱穴> 16本のピットが検出されたが、そのうちP₁₀~P₁₄の5本が主柱穴である。深度はP₁₀ 72cm, P₁₁ 70cm, P₁₂ 63cm, P₁₃ 75cm, P₁₄ 65cmとほぼ同程度である。P₁₀とP₁₄間の南西壁下とそのやや内側に位置する2対の小ピットは、中間部に埋塞があることからみて入口部に関係するものであろう。また、東壁にかかるP₁₅は深度56cmを測り、15号住居址炉を壊して掘り込まれていることから5号住居址に属するものである。

<埋塞> 南西壁下の小ピット間で検出された。径30cm, 高さ25cmの土器がびったり埋設できるピットを掘り込み、胴下半部を欠失する深鉢形土器を埋設している。土器上面は、床面のレベルとほぼ同一である。埋塞内覆土は上下2層に分けられ、上層は暗茶褐色土層でローム粒子をほとんど含まず、住居址覆土とは明らかに異なる。下層は細いローム粒を多く含む褐色土層である。覆土上層より罫が1個検出された。

<時期> 加曽利E式第Ⅳ段階

<出土状態> 「連弧文土器」・曾利式など多くの完形ないしは完形に近い土器が出土しているが、詳細は後述する。

14号住居址（第10図、図版9・10）

〈位置〉（2～5, 9～12）区に位置する。21号・23号・24号土壌が壁に重なる。

〈形状〉長径6m, 短径5.2mの卵形を呈する。壁高は15～25cmで掘り込みは浅く、壁面もやや判然としない。床面は、東側から北側にかけての一部に貼床がなされていて僅かに高くなっている。貼床は壁より20～50cm内側で柱穴を結ぶように50cm前後の幅で認められ、厚さは2～6cm程である。周溝は東壁から北壁にかけてめぐり、南西壁にも部分的に認められる。幅20cm, 深さ5cm前後である。

〈覆土〉住居址の覆土はスコリア粒、炭化物等を含む黒褐色、暗茶褐色土層であるが、含有物の量、色調などにより8層に分けられた。概して覆土上部の方が色調が暗いようである。

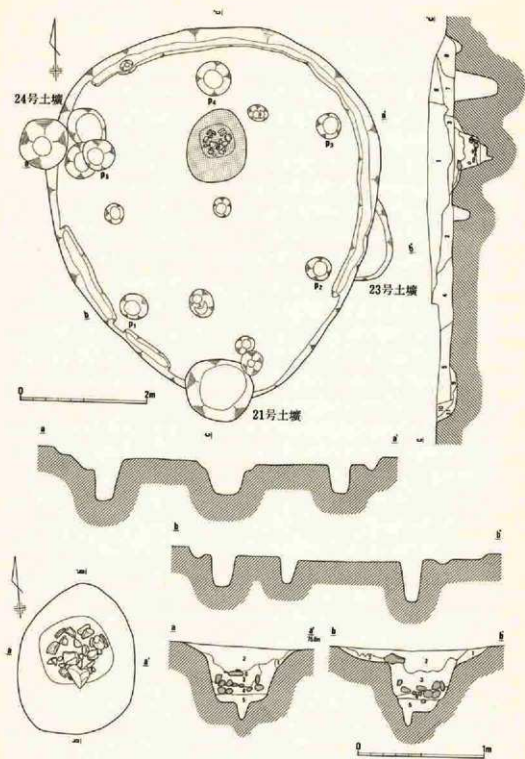
〈炉〉中央やや北寄りに位置し、2段構造をしている。すなわち、120×90cmで12～15cmの掘り込みをもつ楕円形の炉中央部に、直径55cm, 深さ40cm程の円形の穴が掘り込まれているのである。この中央部掘り込み内には、若干の土器、石器と共に拳大の礫が60個つまっている。礫はいずれも被熱により赤化し、タールの付着が看取される。また、中央部掘り込みの上縁より炉石と思われる大形礫が検出されており、浅い掘り込みは石囲炉の炉石が抜き去られたものであろう。炉覆土は5層に分けられる。1層は浅い掘り込み部のみ認められるローム粒を含む暗茶褐色土層、2層は中央部掘り込みの上部で、ローム粒、焼土粒を全面に含む層である。3層は中央部掘り込みの上部で、ローム粒、ロームブロックを多量に含む明茶褐色土層で粘性が強い。4層は3層に類似するが、炭化物が多くブロック状に認められる。3, 4層中に礫は認められている。5層は粘性に富み炭化物を全面に多量に含む黒色土層で、中央部掘り込み最下部に10cm前後の層厚をもっている。

このような構造をもつ炉が住居構築当初より存在したのか、住居廃絶時に炉中央部に掘り込みをつくり礫を投げ入れ、火をかけたものかは断定できない。なお、このような構造を有する炉は日野市平山橋遺跡3号・4号住居址³⁴で検出されている。

〈柱穴〉12本のピットが検出されているが、P₁～P₅の5本が主柱穴である。各々の深度はP₁ 48cm, P₂ 65cm, P₃ 44cm, P₄ 69cm, P₅ 65cmである。

〈時期〉加曾利E式第Ⅳ段階。4号住居址でふれたが、4号住居址が土器の胴下半部が14号住居址覆土中より出土していることからみて、同一段階でも4号住居址より古いものである。

〈出土状態〉完形土器は少ないが、覆土上部より多くの土器片・礫・石器が出土した。詳細は後述する。



第10图 14号住居址 (1/60), 炉址 (1/30)

16号住居址（第6図，図版11上）

〈位置〉 （1～2，8～9）区に位置する。1964年度調査のC号住居址である¹。第1次調査の際には明らかにできなかったが，第10次調査で1/4程度を再検出した。

〈形状〉 直径4～4.5mの円形を呈すると思われる。壁高は15cm弱と浅い。北側は3号住居址と重複しており，3号住居址より床面が20cm程高いので貼床等が行われていたと思われるが判然としなかった。

〈炉〉 1965年の報告によれば，68×60cmの楕円形をした炉体土器をもつ石囲炉と記載されているが，第10次調査では再検出されなかった。

〈柱穴〉 3本のピットが検出されたが，いずれも深度20cm未満で主柱穴とは思われない。なお，1964年の調査においても明らかでなかったとのことである。

〈時期〉 加曾利E式第Ⅳ段階。1964年度調査の炉体土器及び出土遺物より認定した。

16号住居址については，1964年度調査の報告を「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」に再録してあるので参照されたい。

17号住居址（第11図）

〈位置〉 （3～4，8）区に位置する。

〈形状〉 住居址北壁部の一部を調査したのみで規模・平面形等は不明である。壁高は15cm前後を測る。炉は検出されていない。ピットは深度36cmと66cmの2本があり，66cmの方は主柱穴かもしれない。

〈時期〉 縄文中期，時期不詳。勝坂式と加曾利E式の小破片が同数程度出土しているが断定はできない。

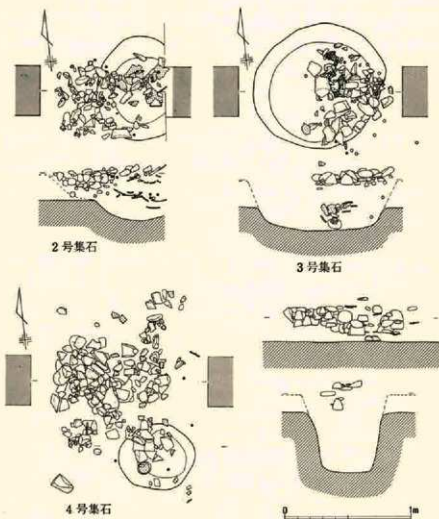
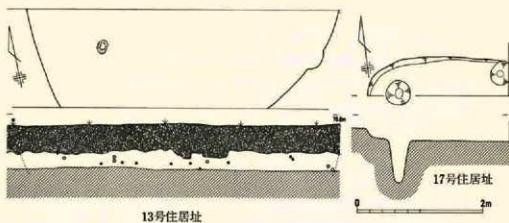
12号住居址

〈位置〉 （6，2）区に位置する。

〈形状〉 北壁部の極く僅かを確認したに止まり，詳細は不明である。時期不詳。

注

- 1 加曾利E式の細分は，安孫子・秋山・中西 1980「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」神奈川考古10号 に準拠している。
- 2 恋ヶ窪遺跡調査会 1979「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」
- 3 床面からの深度を指す。床面が切り合い等で変わっている場合は，柱穴の属する住居址の床面からの深度を表す。
- 4 小田・高林・岡崎他 1974「平山遺跡」
- 5 松井新一・藤間恭助両氏を中心に行われた調査で，1965年に報告されている。なお，報告の再録及び発掘資料の再整理の成果は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」に記載してある。



第11图 13号·17号住居址 (1/60), 2号·3号·4号集石 (1/30)

2. 集石 (第11図)

2号集石 (図版12)

(5, 14) 区に位置し、東側は未調査地にのびる。遺構確認面である ローム漸移層より 25cm 程上部の II b 層中で検出された。集石構築面上部が当時の生活面に近いものと思われる。集石は南北 60cm、東西 90cm 以上の広がりをもち、下部に土壌を伴う。85個の礫と若干の石器、土器より構成される。これら遺物のうち礫は覆土上層部に集中し、しかも、土壌の西側部分に偏在する。これに対し土器は土壌中央部に多く、覆土下層部に同一個体を含む比較的大形の破片が多い。石器は礫中に混在して検出された。

集石下部の土壌は南北 85cm、東西約 70cm の楕円形を呈し、遺構確認面からの深さは 15cm 程度を測る。壁はなだらかな傾斜を示し、断面は丸い鍋底状を呈する。

集石を構成する 85個の礫の属性は第 1 表のとおりである。大半が残存率 1/3 以下の礫 D で、重量 100g 以下の小礫である。全礫の平均重量は 91.5g である。ほとんどの礫が弱いが被熱しており、生礫は極く微量である。石質は 6 割強が砂岩、3 割弱がチャートで、他の石質は少数である。石質の比率は礫の供給地における比率と関係が深いと思われ、他の集石における比率も類似する。本集石は土壌出土土器 (第 28 図 3・4) からして勝坂式期の所産である。

3号集石 (図版13)

(4~5, 15) 区に位置する。検出面・規模・遺物出土状態など 2号集石との類似性が認められる。検出面は II b 層中で、80×60cm の広がりをもつ集石である。下部には土壌を伴う。集石を構成する遺物は 83個の礫と 2 個体分を含む 30 点余りの土器及び若干の石器である。集石は 2号集石同様に覆土上層部 15cm 程に重なり合って検出され、しかも、土壌中央部から東側にかけてまとまりをもつ。集石下部は全く遺物を含まない 15cm 程度の間層があり、更にその下部の覆土下層部より僅かな礫と共に小形台付土器 (第 28 図 5)、深鉢形土器 (同図 6) が検出された。覆土は 4 層に分けられ、集石下部から土壌確認面までの 1 層・2 層は暗茶褐色土層で炭化物・スコリア粒を含む。遺物を含まない間層は 1 層である。土壌中央部に堆積する 3 層は、上部の 2 層より明るい色調の暗褐色土層で細いローム粒子を含みスコリア粒の混入が目立つ。土器は 2・3 層中より出土している。4 層は土壌壁際及び土壌下部に認められ、ローム粒子やロームブロックを含む明褐色土層である。

集石下部の土壌は直径 1m の円形を呈し、遺構確認面からの深さ 20cm、集石上面からの深さ 50cm を測る。床面はほぼ平坦で、断面は鍋底状を呈する。

集石中の礫の属性は第 1 表のとおりである。全礫の平均重量は 159.4g である。出土土器からして構築は勝坂式期である。

4号集石 (図版14)

(6,19)区に位置し、他の集石同様Ⅱb層中で検出された。部分的な調査のため集石全体の規模は明らかでないが、1.5×1m以上の広がりをもつ。245個の礫と若干の石器・土器より構成される。礫の平面的分布をみると、密の部分とまばらな部分とがある。礫集中部の断面を観察すると、集中部のやや東側において比較的下部まで礫が検出されており、ここに浅い土塊状の掘り込みが存在した蓋然性が高いものと思われる。集石中央部のやや南側で検出された土塊は、55×60cmの円形で遺構確認面からの深度は約50cmと他の集石下部の土塊と比べ深い。土塊内覆土は、炭化物・焼土粒等を含む茶褐色土層であり、土塊内からは数点の礫が出土したのみである。土塊壁は垂直に近い立ち上がりを呈する。土塊上部の集石の状況は異なるが、土塊の形状は第4次調査検出の5号集石に類似する〔窓ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ〕1980。

礫の属性は第1表のとおりであるが、2・3号集石に比べ大形の礫が多く全礫の平均重量は203gである。集石の構築時期は出土土器が細片で判然としないが、加曾利E式期と思われる。

2号集石

分類 石質	A	B	C	D	計	%
砂岩	1	4	5	44	54	63.5
チャート	0	0	1	24	25	29.4
その他	0	1	1	4	6	7.1
計	1	5	7	72	85	100
%	1.2	5.9	8.2	84.7	100	

重量 石質	0~100	~200	~300	~400	~500	501~
砂岩	38	8	4	0	3	1
チャート	22	2	0	1	0	0
その他	4	1	1	0	0	0
計	64	11	5	1	3	1
%	75.3	12.9	5.9	1.2	3.5	1.2

3号集石

分類 石質	A	B	C	D	計	%
砂岩	3	7	6	40	56	67.5
チャート	1	1	1	24	27	32.5
その他	0	0	0	0	0	0
計	4	8	7	64	83	100
%	4.8	9.7	8.4	77.1	100	

重量 石質	0~100	~200	~300	~400	~500	501~
砂岩	32	5	4	6	1	8
チャート	22	3	0	0	1	1
その他	0	0	0	0	0	0
計	54	8	4	6	2	9
%	65.1	9.6	4.8	7.2	2.4	10.8

4号集石

分類 石質	A	B	C	D	計	%
砂岩	11	23	14	155	203	82.9
チャート	3	2	0	33	38	15.5
その他	0	0	1	3	4	1.6
計	14	25	15	191	245	100
%	5.7	10.2	6.1	78	100	

重量 石質	0~100	~200	~300	~400	~500	501~
砂岩	109	31	22	10	11	20
チャート	14	13	4	4	1	2
その他	0	0	0	0	1	3
計	123	44	26	14	13	25
%	50.2	18	10.6	5.7	5.3	10.2

凡例 A:完形 B:残存率75%以上 C:残存率75%以下 D:残存率75%以下

第1表 集石出土礫分析

3. 土 墳 (第12図)

18号土墳

(8, 2) 区に位置し、形状は不明。15cm前後の掘り込みである。南壁下に20cmの深さのピットが存在する。土器小片が若干出土したのみで時期不詳。

19号土墳

(1~2, 3) 区に位置する。直径1.2mの円形を呈する。28cmの深さを測り、断面は鍋底状で、床面は平坦である。遺物は微量の土器片が出土したのみである。

20号土墳

(3, 3) 区に位置する。長径1m、短径75cmの楕円形を呈する。遺構確認面より18cmの深さで、床面は平坦で断面は浅い鍋底状を呈する。土器細片が1点出土したのみである。

21号土墳

(4, 9) 区で、14号住居址と重複する。直径1~1.1mの円形を呈する。35cm前後の深さで断面は鍋底状を示す。床面は平坦である。21号土墳は14号住居址に切られており、覆土中より微量の磨板式土器片が出土しているため該期の土墳であろう。

22号土墳

(2, 13) 区に位置し、15号住居址を切って構築している。直径1.1mの円形を呈する。遺構確認面からの深さは40~45cmで、やや急傾斜で立ち上がる。覆土上層部より加曾利E式第V段階の上器が2個体(第28図7・8)出土しており、該期の土墳である。また、打製石斧、石皿片各2点も出土している(第19図)。

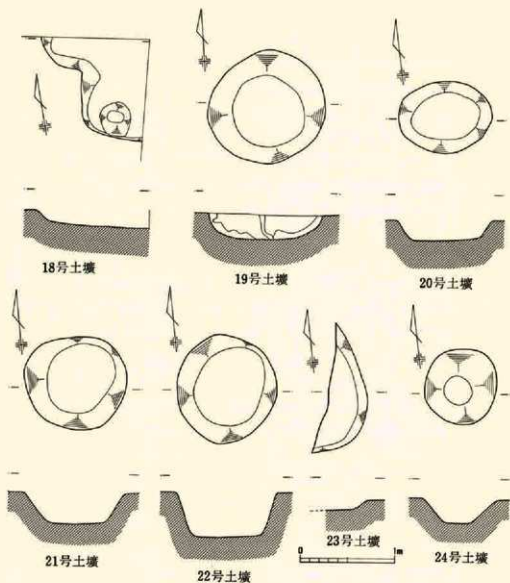
23号土墳

(5, 10~11) 区にあり、14号住居址に切られている。楕円形を呈するが規模は定かでない。遺構確認面からの深さは2~3cmと非常に浅い。立ち上がりも緩やかである。覆土は基本層序Ⅱa層に類似する黒色であり、時期が下る土墳かもしれない。遺物は出土していない。

24号土墳

(2, 11) 区に位置し、14号住居址と重複する。直径70~80cmの円形を呈する。遺構確認面からの深さは25cm程で緩傾斜の立ち上がりを示す。遺物は検出されていない。

(広瀬)



第12图 土坑 (1/40)

第2節 住居址内遺物出土状態について

今回の調査にかかる遺物は、土器約45,000点、石器約3,500点、硃約14,000点を数える。これら遺物の大半は第2表及び第3～6表に示されているように住居址等の遺構に伴ったものである。遺構の中には3号・4号・6号住居址のように第1次調査と今回の第10次調査との2次にわたって調査されたものもあり一概に比較できないが、4号・5号・6号・14号・15号住居址より多量の遺物が出土している。このうち4号・6号住居址は第1次調査で多くの遺物が出土しており、その出土状態については前節の遺構の項で概略を述べてある。ここでは5号・14号・15号住居址における遺物出土状態について若干の検討を加えてみたい。

5号住居址（第13・14図、図版6～8）

加曾利E式第IV段階の住居址で、6号・8号・15号住居址を切って構築されている。出土遺物は14号・15号住居址程多くはないが、出土土器には完形あるいは完形に近い大形破片が多く、23個体が図示された（第23～25図）。これら23個体の土器は住居址覆土出土土器・床面直上出土土器・住居址内埋設土器に分かれ、住居址覆土出土のものが圧倒的に多く20個体を数える。また接合しなかった大多数の土器片も覆土出土である。

住居址覆土中の遺物は炉を中心とした住居址中央部から南側にかけて集中して出土し、外縁部は小破片が散在する程度で個体となる土器は認められない。覆土出土の土器は、いずれも床面より15～20cm浮いた状態で検出され、しかも大形破片のものが多く（図版6）。床面との間層中は、土器・石器等の遺物は極めて少ない。この間層は住居址覆土2層の下部にあたるものである。覆土出土遺物は住居址が廃絶され、覆土2層がある程度堆積した状態の凹地に廃棄されたものといえよう。1～15・19～23が住居址覆土出土土器であるが、その出土状態は一様でなく若干の差異が認められる。1は、住居址南西部で圧潰された状態で出土した。7は、炉の脇で倒立した状態で出土し、同一個体の破片が周辺に若干散在していた。13は、胴下半部を欠損する土器であるが、炉上部で圧潰された状態で出土した。22・23の浅鉢形土器も同様な状態で検出された。以上の土器は概して圧潰された状態で出土したものであり、同一破片も近接して出土している。その他の住居址覆土土器は、比較的小破片で散在して出土したものであり、復原後も欠損する部分が目立つ。なお、22の浅鉢形土器は5号住居址に伴う柱穴（P₁₁）上面より出土したものである。

床面直上より出土した土器は16・17の2個体である。両者とも頸部以下を欠失している。16は、第一次調査にかかるもので、口縁部が床面とほぼ密着した状態で出土したものである（図版7下）。17は、16の北側1m程の位置で検出され、床面との間に僅かの間層を有しているが、ほぼ床面に密着して出土したものである（図版7上）。この2個体の土器は口縁部文様帯等に

類似点が多く認められる。

18は、南西壁下に入口部埋塞として埋設されていた土器である。住居址の居住時と直接結びつく遺物である（図版8上）。

石器の出土状態も土器と同様で、住居址中央部から南側にかけて集中する傾向がうかがえる。打製石斧の出土点数が多く、また、炉石は石皿・凹石等の転用が目立つ。ある特定器種が偏存するということは認められない。

以上が5号住居址の遺物出土状態である。その特徴は、覆土中より完形あるいはそれに類する大形破片が、床面との間に若干の間層をもって多数検出されたことであり、「吹上パターン」と呼ばれる出土状態を呈している。しかし、覆土中の土器には圧潰された状態で検出されたもの、比較的小破片となり散在していたもの等の差異が認められる。このような差異は土器廃棄過程における如何なる要因によるものであろうか。

第1次調査において主要部を検出した3号住居址も、完形土器が圧潰された状態で、床面との間に間層をもって検出されており、本住居址の出土状態と類似する。

14号住居址（第15～17図、図版9～10）

5号住居址同様加曾利E式第Ⅳ段階の住居址である。他の住居址との重複は認められない。14号住居址の遺物出土状態の特徴は、土器・石器・礫といった遺物が覆土中より多量に検出されたことにある。その遺物量は土器約9,600点、石器約900点を数える。しかし、土器は細片が多く、図示できた土器は13個体と少なく欠損部が目立つ（第26・27図）。遺物の平面的分布は炉を中心とした住居址中央部に密集が認められ、住居址外縁部に向う程遺物量が減少する傾向がうかがえる。住居址南半部ではこの傾向が特に顕著であり、遺物は散漫となっている（第15図、図版9下）。一方遺物の垂直分布は、炉南側を最底部としてレンズ状に認められ、床面より15～20cm上部にその集中がある。これは住居址が廃絶され埋没しはじめた凹地に、周囲より遺物を投げ捨てたことによるものであろう。床面より15～20cm上部に遺物が多数検出されるといふ点は5号住居址と類似するが、完形あるいは大形破片がほとんど存在しない点が異なる。

図示した土器はすべて覆土出土である。7は、胴下半部を欠損する大形深鉢で、14号住居址で唯一大形破片で検出された土器である。遺物の少ない住居址南側の壁寄り出土し、床面より10～20cm浮いた状態であった。同一個体の大形破片が近接して存在したが、依存状態は全体の1/2程度である。

他の土器はすべて炉の周辺より出土した小破片が接合したものである。いずれも欠損部が目立つ。5の胴上半部は第1次調査にかかる4号住居址の炉体土器として用いられていたもので、14号住居址からは胴下半部のみ出土である。これは4号住居址炉体土器として設置するために打ち割いた胴下半部を14号住居址に廃棄したことによるものであろう。以上のことか

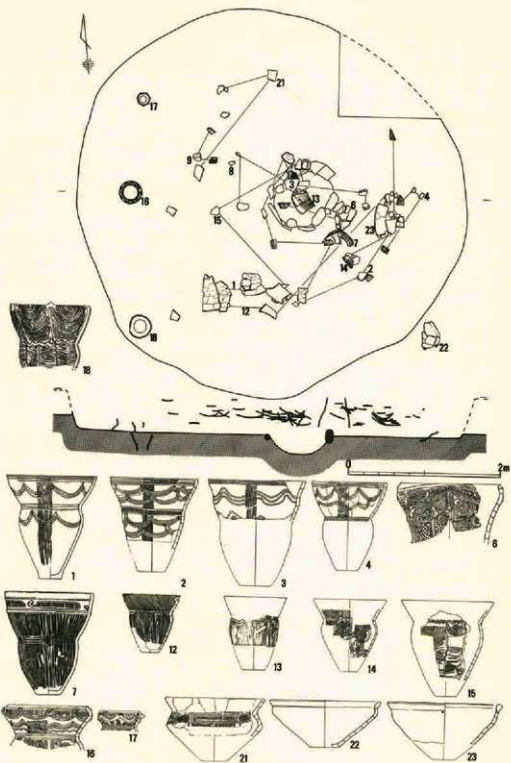
ら、4号住居址と14号住居址の関係は14→4号住居址へと変遷したと考えられる。なお、4号住居址も本住居址同様「連弧文土器」が主体を占める加曾利E式第Ⅱ段階の住居址である。ただし、14号住居址出土の加曾利E式には若干の時間幅が認められ問題がのこる。

15号住居址（第18・19図、図版4）

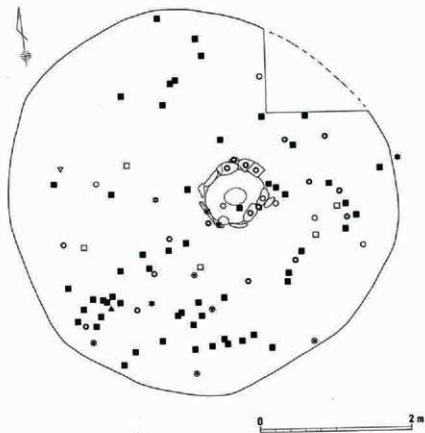
加曾利E式第Ⅱ段階の住居址で、西北部1/4程度を5号住居址に切られている。遺物出土状態は14号住居址と類似するが、密集するということはなく、中央部にやや多い程度で全体に散漫な状態である。遺物の垂直分布は他の住居址と同様に床面より10cm程度上部までは少なく、そこより上層部に多く認められるが、さほど顕著でなく平面分布と同様にやや散漫である。

遺物量の割には接合資料が極めて少なく、図示できた土器は7個体のみである。しかも、図示した土器も破片のものが多く、全体をうかがい得るのは1と6の2個体のみである。1は、がの東側よりまとまって検出された土器で、床面より15～25cm浮いた状態であった（図版4上）。15号住居址の中で唯一大形破片で出土したものである。6は、底部を欠く小形深鉢であるが、床面との間に若干の間層をもち、倒立した状態で出土した（図版4下）。これ以外の土器はいずれも小破片であり、覆土中に他の遺物と混存した状態で出土したものである。

（広 瀬）



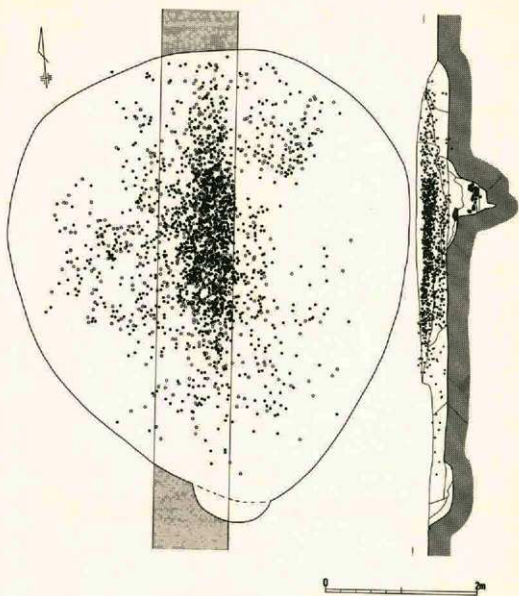
第13图 5号住居址遺物出土狀態 (1/50)



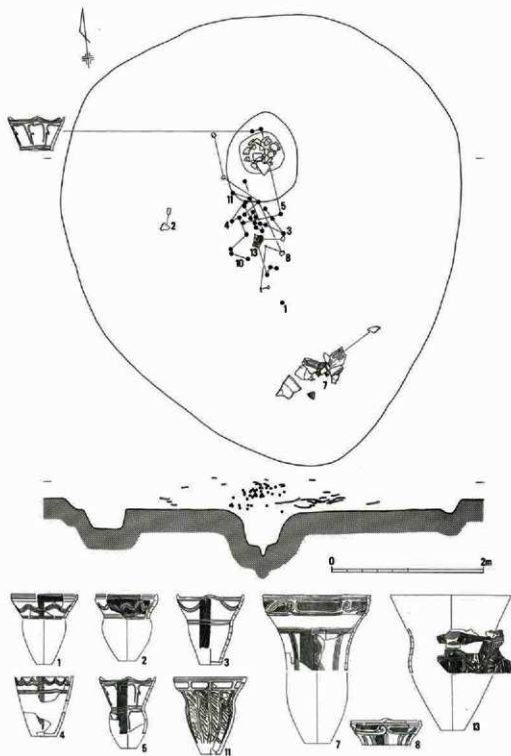
第14图 5号住居址石器出土状态 (1/50)

凡例

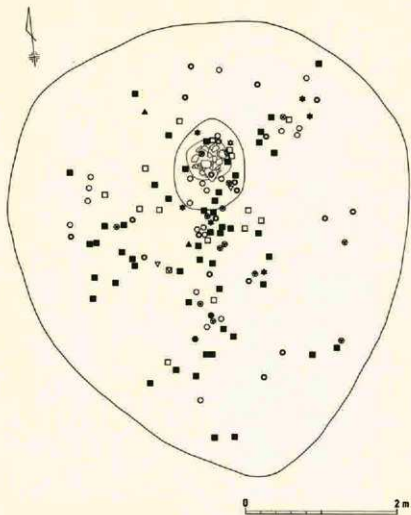
- | | | | |
|---|-----|---|----|
| ■ | 打製石 | 斧 | 石器 |
| □ | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ○ | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ○ | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ● | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ● | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ● | 打製石 | 斧 | 石器 |
| ● | 打製石 | 斧 | 石器 |



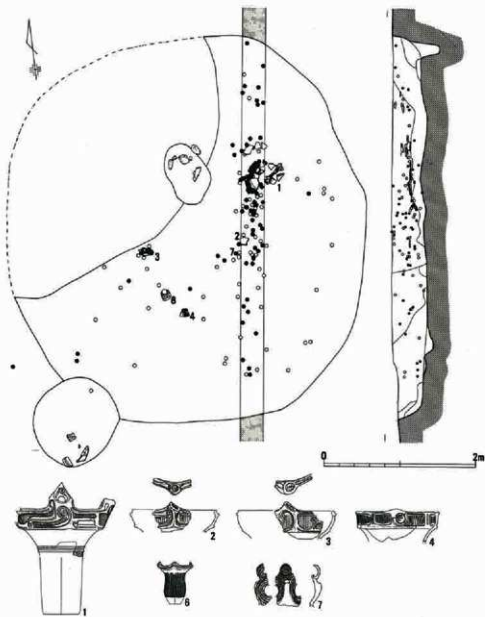
第15图 14号住居址遺物出土状態 (1/50)



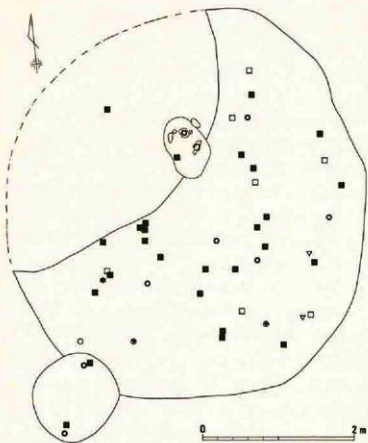
第16图 14号住居址遺物出土狀態 (1/50)



第17图 14号住居址石器出土状态 (1/50)



第18图 15号住居址遺物出土狀態 (1/50)



第19图 15号住居址石器出土状态 (1/50)

第3節 集石について

今回の調査では3基の集石が検出され、その概要は第1節で述べたとおりである。3基の集石のうち2号・3号集石はその規模・遺物の出土状態・集石下部の土壌の在り方といった点で多くの共通点が認められる。そこで全体が調査され依存状態が良好であった3号集石について若干の検討を加えてみたい。

まず集石を構成する礫の接合関係についてみてみたい。3号集石を構成する83個の礫の接合を試みたところ8母岩33個の礫が接合し、他接合はしないが同一母岩の礫も判別された(第20図)。全礫に対する接合率は約40%である。礫以外では石皿・残核が各1母岩ずつ接合した。各母岩について概説すると、1は、最も多くの礫が接合した資料で、11個の礫が接合し礫B(残存率約以上)となったものである。2~5は、4個程の礫が接合し礫Bに復原された母岩である。6~8は2・3個の礫の接合資料であるが、接合後も残存率約以下の礫Dである。接合し合う礫は平面的に近接して出土したもの(1・3・6)と、やや距離をもって出土したものの(2・5・8)とがある。レベル的には礫がほぼ同一面での出土のため上下の差は認められない。9は、石皿の接合資料である。2号集石・15号住居址出土との3点の接合である。10は、黒曜石の残核と剥片の接合資料である。残核に2点の剥片が接合したものである。

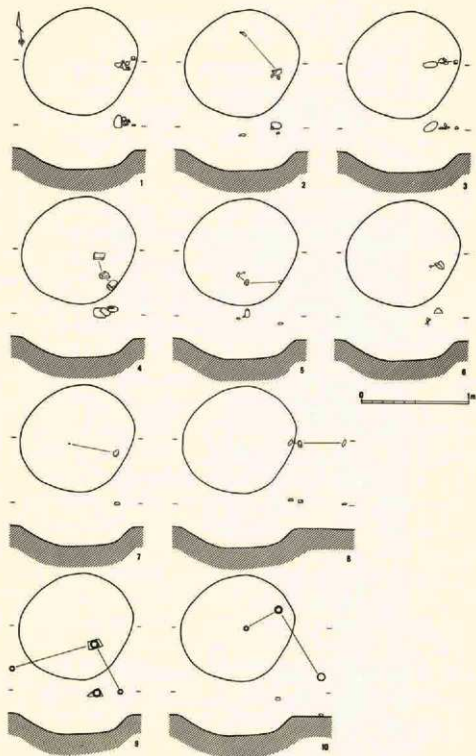
以上が3号集石の接合資料であるが、2号・4号集石も同程度の接合結果が得られた。

集石の礫は殆どが弱ながらも被熱しており、生礫は極く微量である。被熱の度合は個々の礫で異なり、タールが付着したもの、赤化したもの、灰色を呈しもろくなったものなどバラエティー認められる。また接合資料でも個々の礫で被熱の度合が異なるものもある。

次いで遺物の出土状態及び集石の機能といった点について考えてみたい。3号集石は当時の生活面に近い覆土上層部に集石が存在し、集石下部に間層をはさみ、更に下部の覆土下層部に2個体の土器がまとまって検出されている。こうした遺物の出土状態は一般的な集石とはやや異なり、従来石焼調理施設といった機能が推測されている集石とはその機能が異なるのではないだろうか。土壌内出土土器のうち小形台付土器は非日常的な土器と考えられ、土壌基に伴う副葬品的なものかもしれない。そして土壌上部の集石は土壌を理め戻した後に、何らかの行為を行った結果によるもの、あるいは、土壌の所在を示す指標的な意味をもつものと考えられないであろうか。なお、2号集石も3号集石と同様な出土状態を示しており、似たような機能が考えられるかもしれない。

今回行った礫の接合作業、出土状態の分析では不十分な点が多く、集石の機能といった問題について触れるには無理があるかもしれないが、集石の機能に対する一つの推論としてあえて述べてみたものである。今後更に検討を加えていかなければならないと考えている。

(広瀬)



第20图 3号集石碑接合图

第4章 遺 物

第1節 土 器

今回の調査では約45,000点の土器が出土した。そして、それらは殆どが縄文時代中期の土器である(第2表)。しかし、小片等の事由により型式判定不能な土器も多く全体の約62%を占める。一方、型式判定可能な土器のうち勝坂式期は27.4%、加曾利E式期は72.6%を占める。さらに、加曾利E式期のうち加曾利E式は64.4%、連弧文土器8.1%、曾利式27.5%という値を示す。

以下、遺構別に出土土器の説明を加えていく。なお、勝坂式の細分は(安孫子 1974)に、加曾利E式の細分は(安孫子・秋山・中西 1980)に準拠した。

出土区	深 針 形 土 器								浅針形 土 器	合 計
	勝 坂	阿玉台	加 曾 利 E			連弧文	曾 利	不 明		
			I	II	III					
3号住居址	140	18	43	27		9	81	507		825
4号住居址	56		31	17	2	4	29	334	3	476
5号住居址	191	74	285	310	483	291	717	2758	431	5540
6号住居址	70	9	342	52	4	17	11	1128	172	1805
13号住居址	171	37	300	146		59	161	2528	4	3406
14号住居址	680	95	870	324		304	788	5884	660	9605
15号住居址	376	31	1065	419	48	85	546	4678	360	7608
16号住居址	14		8	7			8	60		97
17号住居址	64	17	81	19				329		510
18号土壌	1		1	2		1		11		16
19号土壌	1							7		8
20号土壌								1		1
21号土壌	4							4	2	10
22号土壌				1					1	2
2号集石	1	1						19	1	22
3号集石	2			1		1		28		32
4号集石						3		54		57
遺 構 外	1933	159	1039	710	445	117	676	10122	177	15378
合 計	3704	441	4065	2035	982	891	3017	28452	1811	45398

第2表 出土土器一覧

3号住居址（第28・30・31図，図版24）

今次調査で全容の明らかになった住居址であり，今回実測可能個体は1個体のみである。

1. 口径28.5cm，底径16cm。上半部と下半部は接合しない。実測図では現存部を同一面に図示したが，上半部は背面であり，本来下半部の反対側に位置するものであろう。器形は口縁部が内彎するチャリパー形を呈し，底部は弱い屈折底を呈す。口縁に把手を1個と貼付け隆帯による渦巻文を表出し，土器の正面を規定している（図版24）。把手正面には平行沈線文を施し，裏面には円形及び三角形の削り取りが認められる。文様帯は胴部に存し，いわゆる縦帯区画文を表出している。そして，貼付け隆帯による円形文とそれを結ぶ隆帯により文様を分割しており，全周では2単位である。

この土器は第1次調査出土土器（第30・31図）とセットをなすと考えられる。併せて「恋ヶ窪遺跡調査報告I」を参照されたい。

13号住居址（第28図，図版24）

遺構プラン確認のみに止めたため，実測個体は1個体のみである。

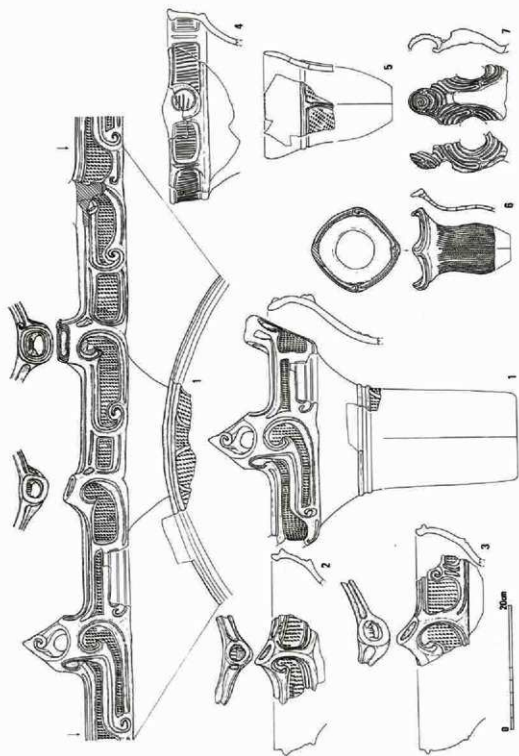
2. 底径11cm，現高10cm。底部破片で，RLの縄文地上に貼付けの隆帯による蛇行懸垂文が認められる。

15号住居址（第21図，図版16）

遺物の割には実測可能個体は少ないが，加曾利E式第Ⅱ段階の良好な資料が出土した。

1. 口径29cm，現高27.5cmを測り，胴中半部以下を欠失している。器形は緩く内彎するチャリパー形を呈し，口縁部に三角形を呈する大把手を配し正面を規定している。他に，台形状で上部が透孔となっている中把手が3個配されていたと思われるが，側面の一つは欠失している。また，背面に位置する中把手は，透孔の頂部に沈線が廻るとともに，沈線による渦巻文が表出されており，側面の中把手とは異なる。口縁部文様帯は隆帯による区画文と，隆帯上に沈線にて表出された渦巻文からなる。区画内はL₁の熱系文が施されているが，条の潰れた箇所（大把手左側部分）を一部文様施文後に沈線により重ねなぞっている。頸部は無文帯で，胴部はL₁の熱系文地上に，隆帯による懸垂文を表出している。色調は黒褐色を呈し，胎土は堅緻で，光沢をもつ程丁寧に整形されている。

2. 口径31.2cm，現高8cmを測る把手部破片である。1の側面に位置する中把手と類似する。区画内にはL₁の熱系文を施しているが，やはり1同様文様施文後，条が潰れた箇所を沈線で重ねなぞっている。色調，胎土，焼成共に1と非常に類似した土器である。



第21图 15号住居址出土土器 (1/6)

3. 口径34.8cm, 現高10.6cm。2と同様、逆c字状の中把手を有する破片である。口縁部文様帯は陸帯により区画文を表出し、区画内には節の粗いL₁の襷糸文を施している。胎土は密であるが、器表面に砂粒が目立ち、1、2に比して整形がやや粗い。

4. 口径30cm, 現高11cm。口縁部の約1/3が現存する。器形はキャリパー形で、口縁は部分的に緩い波状が認められる。口縁部文様は貼付けの陸帯による区画文が表出され、区画内には竹管状工具による平行沈線文が施されている。

5. 口径16.5cm, 現高11cm。口縁部がやや膨らむ小形の深鉢形土器である。口縁部は無文で胴部との境に1本の陸帯が廻り、そこから陸帯による懸垂文が垂下している。胴部地文は、RLの縄文である。

6. 口径11.3cm, 現高13.2cmを測る小形の土器で、底部を欠失している。口縁部が大きく外傾し、胴上半部で一度括れ、胴下半部で再び膨らむ特徴ある形式(form)を呈する。口縁は4単位の波状口縁である。口縁部文様は小突起間に沈線にて渦巻文を表出している。頸部は無文であり、胴部はL₁の襷糸文が地文として施されている。胎土は緻密で器厚も薄く(平均5mm)器内面は非常に丁寧に整形されている。なお色調は器表面が茶褐色であるのに対し、内面は黒色を呈している。

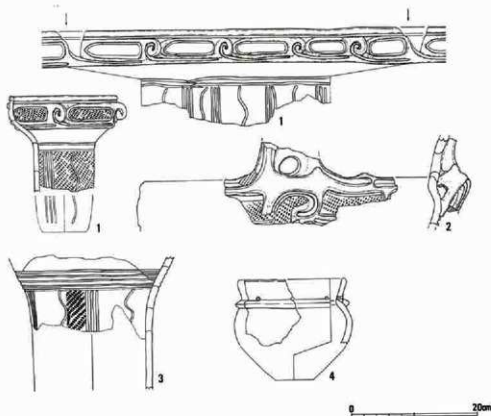
7. 現存高15.5cm。竹管状工具による沈線にて渦巻文を表出している。胎土に白砂粒を多量に含み、色調は明茶褐色を呈している。他の土器と同つきを具にし、搬入器と思われる。いわゆる曾利Ⅰ式の1型式(type)に表出される大把手の一部である。

6号住居址(第22・32図, 図版23)

本住居址も1次調査で検出されていたが、今回の調査では東壁側が確認され全容が明らかになった。狭い範囲にしては遺物量は多いが、欠失部の目立つものが多い。

1. 口径17.4cm, 現高15.2cm。胴下半部を欠失する小形の深鉢形土器である。口縁部文様は貼付けの陸帯と沈線により、突出した渦巻状文と楕円区画文を5単位表出しているが、渦巻状文の1個は欠失している。頸部は無文帯で2本の沈線にて胴部とを画している。胴部は沈線表出の3本単位の懸垂文と、1本の蛇行懸垂文を交互に表出し、3本単位の懸垂文間を1単位とすると全周では4単位である。口縁部の区画内と胴部に施されている縄文はRLである。なお、本土器も、15号住居址6の土器同様内面は黒色を呈している。

2. 口径44cm, 現高12.5cm。大形の深鉢形土器の把手部破片で、15号住居址出土の1に表出される大把手に類似する。なお、口縁部区画内にはRLの縄文が施文されている。



第22図 6号住居址出土土器 (1/6)

3. 最大径26cm, 現高13cm。現存部は胴上半部のみであるが、ほぼ全周する。横走る5本の沈線で頸部と胴部の文様帯を分境している。胴部はRLの縄文地上に、沈線にて3本単位の懸垂文と、1本の蛇行懸垂文を交互に表出している。

4. 口径16cm, 現高8.4cmを測る有孔鋳付土器である。器内外面共に非常に丁寧に研磨されており、内面には一部赤色塗彩の痕跡が認められる。

以上が今次調査にて出土した。なお、第1次調査出土土器は第32図に再録したが、詳細については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」を参照されたい。

4号住居址 (第33・34図)

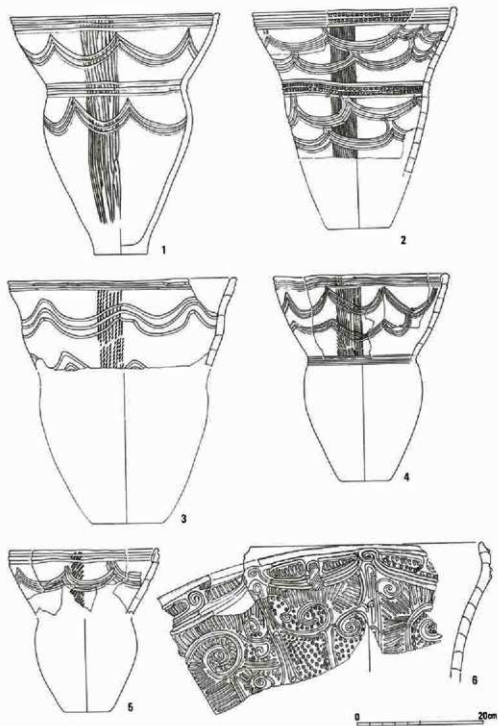
今回の調査は東壁部のみを検出であり、図示できるような遺物は出土していない。第1次調査出土土器は第33・34図に示したが、詳細は「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」を参照されたい。

(山崎)

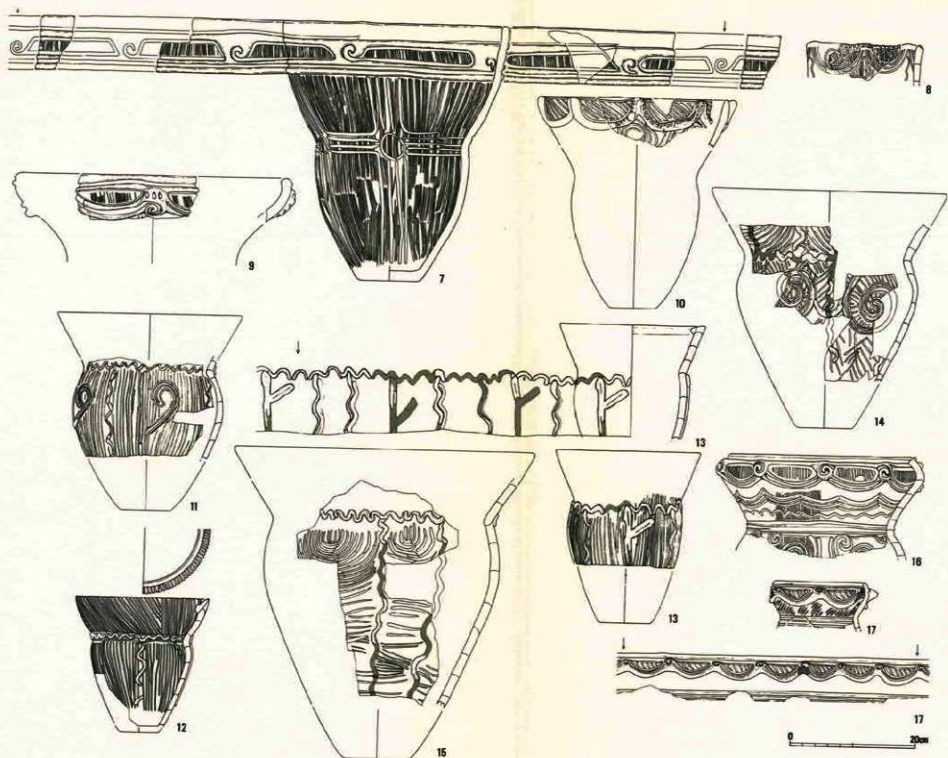
5号住居址(第23~25図)

本住居址も1次調査においてコーナーの一部が確認されていたが、今回の調査で全容が明らかになった。出土土器は殆ど加曾利E式第Ⅳ段階で、それらの多くが“吹上パターン”を呈し出土した。

1. 口径33.2cm, 器高38.2cm, 底径8.4cmを測るほぼ完形の土器である。器形は口縁部が開き、胴中半で一度窄まり、胴下半でやや膨みを見た後徐々に底部へ移行する。文様は半截竹管状工具にて条線地文を表出した後、3本の沈線を口縁部と胴部括れ部に廻らし、さらに3本の沈線にて胴上半部と胴下半部に弧線文を表出している。弧線文の単位は胴上半部が8単位、胴下半部が7単位である。胎土に小石、金雲母片を少量含む。焼成は良好。
2. 口径32cm, 現高26cm。底部は欠失しているが、他の部分は全周の約1/2程現存する。器形は1とほぼ同様であるが、胴下半で膨みを見ずに底部へ移行する。文様は節の細かいL₁の熱系地文上に、口縁部に3本、胴部括れ部に4本の沈線を廻らし、さらに胴上半部と胴下半部に3本の沈線による弧線文を2段表出している。なおこれら3本の弧線のうち一番上位の弧線は両端が内彎している。また、口縁部と胴部括れ部に廻る沈線のうち、2本に竹管状工具による円形刺突文が認められる。胎土はやや砂質に富むが、焼成は良好である。
3. 口径36cm, 現高14cmを測り、胴上半部以上で全周の約60%程が現存する。器形は、口縁部から胴部にかけて緩やかに褶曲しながら徐々に窄まり、胴下半は図示したように括れの目立たない器形を呈すると思われる。文様は、節の太いL₁の熱系地文上に、口縁部に2本の沈線を廻らせ、その下位に3本の沈線による波状文を現存部に二段表出している。欠失部には恐らく横走する沈線を描かず、現存部に見られるのと同様な波状文を一段ないし二段表出していたと思われる。胎土に小石、白細砂を少量含む。焼成は良好である。
4. 口径28cm, 現高13.5cm。口縁部から胴部括れ部にかけて、全周の約1/3が現存する。文様は擗状工具による条線地文上に、口縁部と胴部に沈線を廻らし、その間には3本の沈線による弧線文が二段、やや粗雑に表出されている。胎土に小石と白細砂を含む。焼成良好。
5. 口径24cm, 現高10.5cm。口縁部から胴部括れ部にかけて、全周の約1/4が現存する。文様はRLの縄文地上に、口縁部に2本の沈線が廻り、その下位に3本の沈線によって弧線文が一段表出されている。焼成良好。
6. 口径36.8cm, 現高26cm。キャリバー形を呈す大形の土器であり、現存部は全周の約1/3強である。口縁部文様帯は隆帯により区画され、区画間は隆起し、そこに上向きの渦巻文が表出されている。区画内はそのほぼ中央で沈線による渦巻文にてさらに二分され、楕円状区画が表出されている。楕円状区画内は縦位の沈線及び円形刺突文が施文されている。胴部文様帯は、口縁部を区画する上向きの渦巻文の下位に胴部文様帯を区画する沈線が蕨手状のモチーフを表出しながら垂下し、区画間には竹管状工具による沈線にて唐草文モチーフを表出し、そ



第23图 5号住居址出土土器



第24图 5号住居址出土土器 (1/6)

の間を同工具による沈線及び円形刺突によって充填している。胴部文様帯はこの単位が二つ組み合わされて大単位、記号化すれば $(a+b)+(a'+b')=A+A'$ を構成すると思われる。器厚が厚く(胴部は平均1.5cm)、胎土は縦帯で金雲母片と多量の白細砂を含み砂質に富むが、焼成は良好である。割れ口は風化が進んでおり、図示した以外に同一破片は出土していない。

7. 口径36cm、器高41cm、底径9.6cmを測る比較的大形の土器である。口縁部文様帯には基本的に左方向に渦巻文を内包する楕円状区画を表出しているが、渦巻文と楕円区画が連続せず各々独立する箇所も存在する。胴部文様帯には、口縁部文様帯下より垂下する4本の沈線と胴部括れ部に廻る4本の沈線が見られ、その交叉部分には円形モチーフが表出されている。口縁部区画内と胴部地文は櫛状工具による条線文である。文様の単位は口縁部が6単位、胴部は、口縁部から垂下する沈線間を1単位とすると5単位であり、胎土に小石と白細砂を多量に含む。

8. 口径18.5cm、現高6.7cm。竹管状工具による3本の沈線で弧線文を表出し、その内側には「の」字状文を描き、弧線文の接続部から沈線による蛇行懸垂文が垂下している。また、口唇部には竹管状工具による押捺が施されており、地文は櫛状工具による条線である。胎土は砂質に富むが、焼成は良好である。

9. 口径42cm、現高7cm。キャリア形を呈す土器の口縁部破片である。文様は隆帯により楕円状に区画し、その間に、上位に3個の刺突が付される立体感のあるやや下向きの渦巻文が表出されている。口縁部区画内と胴部には櫛状工具による条線文が表出され、楕円状区画の隆帯の一部に赤色顔料の付着が見られる。器厚は厚手で、胎土に小石の混入が目立つ。

10. 口径28.8cm、現高7.6cm。口縁部が殆ど彎曲しないキャリア形を呈する。口縁部文様帯は隆帯にて逆歯鋒状に区画し、区画内は竹管状工具による沈線が斜位に深く施文されている。隆帯には竹管状工具による刺突が施されており、胴部も同工具による沈線にてモチーフを表出している。胎土に細砂の混入が目立つ。焼成良好。

11. 現高15.6cm。現存部は全周の約40%である。口縁部と底部を欠失するが、図示したような口縁部が開く曾利式の特徴的な一形式(form)を呈するであろう。口縁部は無文で、頭部には蛇行隆帯が廻り、そこから隆帯による蛇行懸垂文と、逆U字状懸垂文と裏手状文の組合わされたモチーフとが交互に垂下しており、地文は半載竹管状工具による条線文である。なお、蛇行懸垂文間を1単位とすると、全周では4単位と思われる。胎土は砂質に富み、風化が著しい。

12. 口径21cm、推定高21.4cmを測るほぼ完形の土器である。器形は11とほぼ共通するが、11ほど胴は張らない。口縁部に半載竹管状工具による斜行沈線(一部は縦方向)が施文され、頭部には3本の沈線を廻らした後に蛇行隆帯文を貼付け、そこから半載竹管状工具により表出された条線地上の胴部へ、2本単位の隆帯と1本単位の蛇行隆帯が交互に垂下している。2本単

位の懸垂文間を1単位とすると、全周では4単位であるが、そのうちの1単位には蛇行懸垂文が見られない。口唇部の折返し部分には内から外側へ向かって沈線が表出されており、器表面の沈線と連接させており、さらにその内側には沈線が1本廻っている。胎土に小石と多量の白細砂を含む、焼成は良好である。

13. 口径23cm, 現高18.4cm, 推定高27cm。11, 12と同様な器形を呈すが、12よりさらに胴部の張りが弱い。口縁部は無文で、頸部には蛇行隆帯が廻り、そこから、櫛状工具によって施文された条線地の胴部へ逆U字状隆帯と右方向に枝状にのびる隆帯の連接したモチーフと蛇行隆帯が垂下している。逆U字状の懸垂文間を1単位とすると、全周では3単位であり、そのうち2単位には蛇行懸垂文が2本垂下するが、残り1単位は蛇行懸垂文が1本のみである。胎土は11と極めて類似し、砂質に富み、器表面の風化が著しい。

14. 現高24.2cm。12と同形式(form)を呈す。破片が多いが接合面の少ない個体である。口縁部は竹管状工具による沈線により重弧状文が描かれ、口唇部から頸部にかけて垂下する隆帯の一部が覆われる。頸部には蛇行隆帯が廻り、胴部には隆帯による「∞」形モチーフと、頸部を「∞」形モチーフから垂下する蛇行隆帯が認められる。胴部地文は竹管状工具による矢羽状文を基調とするが、「∞」形モチーフ内はそれに直交するように沈線を充塞している。胎土に小石と多量の白細砂を含む、焼成は良いが、内面の風化が顕著である。

15. 現高36cm。12, 14と同形式(form)であるが、大形の土器である。口縁部は無文で、胴部に蛇行隆帯が廻る。胴部は、頸部から垂下する蛇行懸垂文間に竹管状工具により上半は重弧状文が、下半は横走線が表出されている。胎土に金雲母片を含み、やや砂質に富むが、焼成は良い。色調は黄白色を呈する。

16. 口径29.6cm, 現高16.2cm。本土器は1次調査時に出土した土器である。詳細は「惹ヶ窪遺防調査報告Ⅰ」(p.35)を参照されたい。

17. 口径14.4cm, 現高7.4cm。胴下半を欠失するが、口縁部が緩く彎曲し、胴部上半で一度窄まり、胴中半がやや膨らみ、再び底部に向かい窄まるキャリバー形を呈すると思われる。口縁部文様帯は隆帯により蒲葺状に区画し、左方向に渦巻文モチーフを表出している。この渦巻文表出部分は隆起して上向きの渦巻文になっており、区画内には竹管状工具による斜行沈線が表出されている。文様の単位は全周で7単位である。胴部の括れ部には3本の沈線が廻っており、口縁部文様帯との間にはRLの縄文が施文されている。胎土に小石と細砂の混入が目立つ。16とは形式(form)のみならず、随所に類似点の見られる土器である。

18. 口径29.6cm, 現高23.4cm(突起頂まで24.4cm)。胴下半部を欠失しており、埋壘に転用された土器である。器形は13と類似し、口唇部に本来6箇所表出されていたと思われる小突起が1箇所現存している。口縁部から頸部を廻る蛇行隆帯に向かって垂下する隆帯にて口縁部文様帯を区画し、その間を半截竹管状工具により重弧状文を表出している。胴部文様帯には頸部

より垂下する蛇行隆帯と、沈線による懸垂文とが交互に表出されており（1箇所のみは蛇行隆帯の代わりに2本の隆帯による懸垂文が表出されている）、その間は半截竹管状工具による沈線が沈線懸垂文を挟んで矢羽状に施文されている。文様の単位は口縁部、胴部とも全周で6単位である。胎土に小石、白細砂を多量に含む。焼成良好。

19. 底径10.8cmを測る有孔銅付土器である。図示した以外にも数点破片は存在するが、何れも縦方向に接合せず、本来の器形は窺いづらい。胴下半部に隆帯によるモチーフが窺われ、その間はすべて竹管状工具による円形刺突文が充填されるらしい。器表表面に赤色顔料の塗彩が認められる。胎土に白細砂、細砂を多量に含む。焼成良好。

20. 最大径31cm。浅鉢形か壙形土器であろう。LRの縄文地上に2本の沈線による波状文が三段認められ、この2本の沈線間は波状文表出時に地文が大部なぞられている。胎土に白細砂を少量含む。器厚は薄く（平均約6mm）、焼成は良好であり、内面は丁寧に整形している。この器形復元は貫井南遺跡13号住居址の土器を参考にしたが（佐藤 1974, p.100）、赤松遺跡の例のように（川井 1980, p.312）無文の外反する口縁を呈するのかも知れない。

21. 口径36.8cm, 現高14cm, 推定高24cm。口縁部が外傾し、肩が張る浅鉢形土器である。口縁部は無文で、その下位から肩の張る部位にかけて文様帯が存在し、文様はすべて竹管状工具による沈線表出である。器裏面は黒色を呈し、非常に良く研磨されている。胎土に細砂を多く含む。

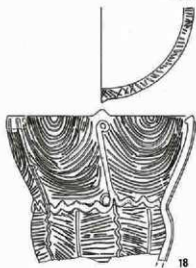
22. 口径40.8cm, 現高15cm, 推定高21cm。口縁部はほぼ全周するが、底部は欠失する無文の浅鉢形土器である。器表表面はともに丁寧に研磨されている。色調は明茶褐色を呈し（所々黒色の部分有り）、赤色顔料が口唇部と器裏面の一部に残存している。胎土に白細砂を多く含む。焼成良好。口縁部下に補修孔が認められる。

23. 口径40cm, 器高17.4cm, 底径10cmを測る無文の浅鉢形土器である。全周の約1/2が現存する。胎土に小石を多く含むが、整形は丁寧に（横方向に整形）、色調は赤褐色を呈す（一部黒色の部分有り）。器表表面とも赤色顔料が部分的に残存している。

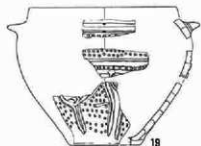
（秋山）



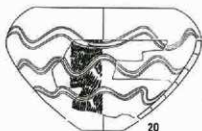
18



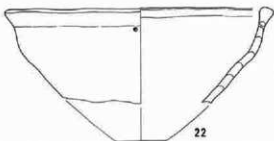
18



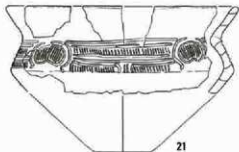
19



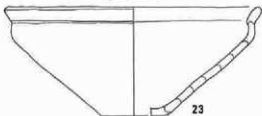
20



22



21



23

0 20mm

第25图 5号住居址出土土器(1/6)

14号住居址 (第26・27図, 図版21・22)

遺物の出土状態は第3章2節に詳しいが、住居址覆土から加曾利E式第Ⅲ段階～第Ⅳ段階の土器が多量に出土した。しかし、出土数に反して復元個体数が少なく、欠失部の目立つものが多い。なお、図示した個体以外は皆細片である。

1. 口径25cm, 現高9cm。口縁部から胴括れ部まで全周の約1/5が現存する。文様は口縁部に貼付けの隆帯により波状文を二段表出し、その隆帯に沿って円形交互刺突文を施している。胴括れ部には2本の沈線が廻っており、口縁部と胴括れ部との間には沈線による3本単位の波状文が描かれている。地文はL₁の縹糸文である。

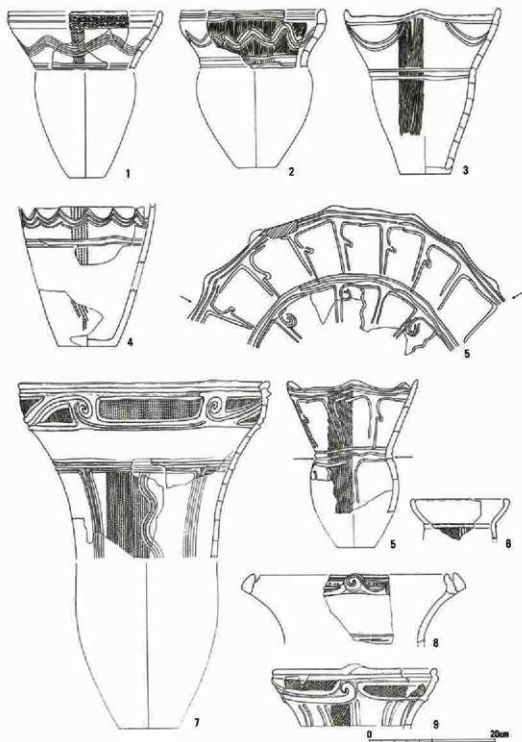
2. 口径22cm, 現高9cm。胴括れ部以下を欠失し、全周の約1/4が現存する。文様は口縁部と胴括れ部に2本の沈線が廻り、その間に2本単位の波状文が表出されている。地文は柳状工具による条線文である。

3. 口径24.8cm, 底径8cm, 器高26cm。器形は口縁部から徐々に窄まり、胴前半で一度括れ胴下半部は膨らみを見ずに底部へ移行する。口縁は4単位の波状口縁である。文様は口縁部に1本、胴括れ部に2本の沈線が廻り、その間に2本単位の弧線文が描かれている。弧線文は各々独立し、連接はしていない。胴下半部には文様は表出されておらず、地文は柳状工具による細い条線文である。

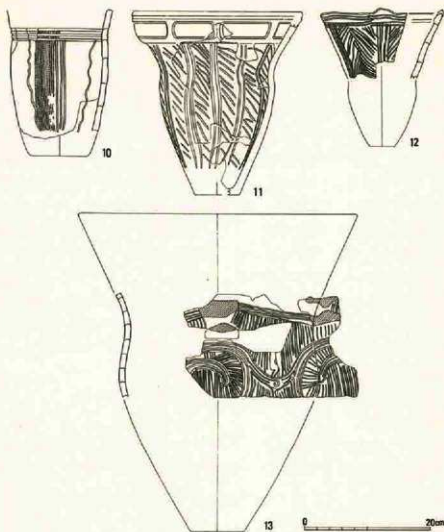
4. 底径8.6cm, 現高22cm。口縁部及び胴前半部を欠失している。文様は沈線により、3本単位の弧線文を14単位表出しており、その下に2本の沈線を廻らしている。地文はL₁の縹糸文であり、胎土はやや砂質に富み、器面が若干風化している。なお、現存部最上端は単に粘土帯接合部で剥落したのみでなく、口縁部として再生された可能性もある。

5. 口径21cm, 現高19.2cm。この土器の上半部(矢印より上方)は1次調査の際に、4号住居址の埋燧炉として出土した土器であり、胴下半部(矢印より下方)が今回の調査で本住居址覆土から出土し、接合した。また、底部を欠失しているが、この接合により文様モチーフの全容が明らかになった。文様は縹糸地文上に胴上半部は竹管状工具により「 Γ 」状のモチーフが表出されている。胴下半部も胴上半部類似の「 Γ 」状文を基調とし、渦巻文、蛇行懸垂文も見られる。文様の単位は胴上半部は7単位、胴下半部は4単位である。

6. 口径30cm, 現高6.5cmを測り、口縁部から胴上半部にかけて、全周の約1/4が現存する。口縁部は無文帯で、頸部に貼付けの隆帯を廻らし胴部とを画している。胴部には3本単位の貼付けの隆帯による懸垂文が認められる。胴部の地文はLRの縄文である。なお、口縁部無文帯及び内面は研磨され、胎土も緻密である。



第26图 14号住居址出土土器 (1/6)



第27図 14号住居址出土土器

7. 口径56cm, 現高39cm。キャリバー形を呈する大形の土器で、胴前半部以下を欠失している。口縁部文様帯は、隆帯による楕円区画文と、三角形区画間に表示された沈線によるの字状文を交互に配している。頸部は無文帯で、胴部との境には貼付けの隆帯を2本廻らし、その下位の隆帯からは2本単位の懸垂文と、1本単位の蛇行懸垂文が交互に垂下している。なお口縁部区画内と胴部には節の粗いL₁の燃糸文が施文されている。

8. 口径29.6cm, 現高11cm。口縁部文様帯は、突出した隆帯上に沈線により渦巻文を表出している。頸部は無文で、破片下部には胴部とを分境する沈線が認められる。

9. 口径25.2cm, 現高9.2cm。器形は緩く開くキャリバー形を呈する。口縁部文様帯は沈線にて描き出した栴円区画から延びる渦巻文が見られる。胴部は沈線間を無文化した2本単位の懸垂文を表出している。口縁部区画内と胴部には、共にRLの縄文が施文されている。

10. 現高22cmを測る, 大形の連弧文土器の胴下半部破片であろう。括れ部には4本の沈線が廻っており, 胴部文様は沈線による3本単位の懸垂文と, 1本単位の蛇行懸垂文を交互に表出している。蛇行懸垂文を間にはさむ3本単位の懸垂文間を1単位とすると, 全周では5単位である。地文は節の細かいL字の熱糸文である。

11. 口径26.4cm, 底径7.2cm, 現高19cm。口縁部以下, 全周の約1/2が現存する。口縁部文様帯は貼付けの隆帯により杵状区画が施されている。胴部文様帯は, 2本の沈線懸垂文で作出した無文帯を垂下し, その無文帯間に斜行沈線を施文している。

12. 口径17cm, 現高12cm。胴前半部以下を欠失し, 現存部は全周の約1/4である。口縁は波状を呈し, 口縁部には4本の沈線が廻っている。胴部は5本ないし6本単位の沈線により懸垂文を表出し, 懸垂文間には沈線を綾杉状に施文している。

13. 現高22cmを測り, 頸部から胴前半部にかけて, 全周の約1/4が現存する。頸部にはエ字状把手を配していたと思われるが欠失している。胴部文様は, ㄥ字形モチーフの反転を基礎とした文様を横方向に展開していたと思われる。地文は半截竹管状工具による条線文で, 胎土はやや砂質に富み, 色調は灰白色を呈する。

16号住居址 (第35図)

今回の調査では, 土器の細片が僅かに出土したのみである。加曾利E式第Ⅳ段階の住居址であり, その出土遺物は第35図に再録してある。詳細については「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」を参照されたい。

2号集石（第28図，図版24）

3. 口径16.8cm，現高10cmを測る口縁部破片で，全周の約1/2が現存する。器形は直線的に窄まる円筒形を呈し，口縁部は肥厚し，口唇部が平坦に整形されている。胴上半部には連続指頭瓦痕文が2～3段認められる。胎土に細砂粒を多く含み，器面は粗放である。なお，胎土に雲母は含まれていない。

4. 口径55cm，現高16cmを測る大形の浅鉢形土器の破片である。口縁部は4単位の波状を呈し波頂部が凹み，裏面に段を有する。器面はやや粗く，胎土に全雲母，砂粒細礫を多量に含む。阿玉台式特有の浅鉢形土器である。

3号集石（第28図，図版24）

5. 上端部径10.2cm，脚台部径7.6cm，現高15.2cm。口縁部を欠失する小形台付土器である。文様は，胴上半部は波状沈線文，連続爪形文，三角押文を順に施文し，胴中半部には，弧状に隆帯を貼付けさらに渦巻状小突起が4個表出されており，その隆帯上及び褶には竹管状工具による連続刺突文が施されている。文様の単位は4単位である。胎土は堅緻で，整形も非常に丁寧になされている。

6. 口径27.2cm，現高16cm。口縁部から胴中半部の全周の約1/3が現存する。器形は口縁部が緩く彎曲するキャリバー形を呈する。口唇部には隆帯を貼付し，その上に竹管状工具による連続刺突文を2段表出している。口縁部文様は隆帯を波状に貼付け，隆帯部や波状沈線に沿って連続刺突文を施している。胴部文様は全容を窺い得ないが，波状沈線文間に連続刺突文が認められる。胎土に金雲母，細砂粒をやや多く含む。

22号土壙（第28図，図版24）

7. 口径27cm，現高9.5cm。口縁部が外傾し，肩が張る浅鉢形土器である。文様は貼付けの隆帯と沈線にて描き出した渦巻文と楕円区画文を交互に表出している。区画内は竹管状工具による沈線文を充填している。整形は丁寧で，器表表面は共に横方向に成されている。

8. 口径30cm，現高11.3cm。胴中半部以下を欠失している。口縁部文様帯は，貼付けの隆帯に沈線にて描き出した渦巻文と楕円区画文を表出している。胴部は沈線にて「冂」状に区画し，その区画内には沈線による蛇行懸垂文が認められる。地文は竹管状工具による条線文である。なお，胎土は砂質に富み，器表面は粗く，接合部の少ない土器である。

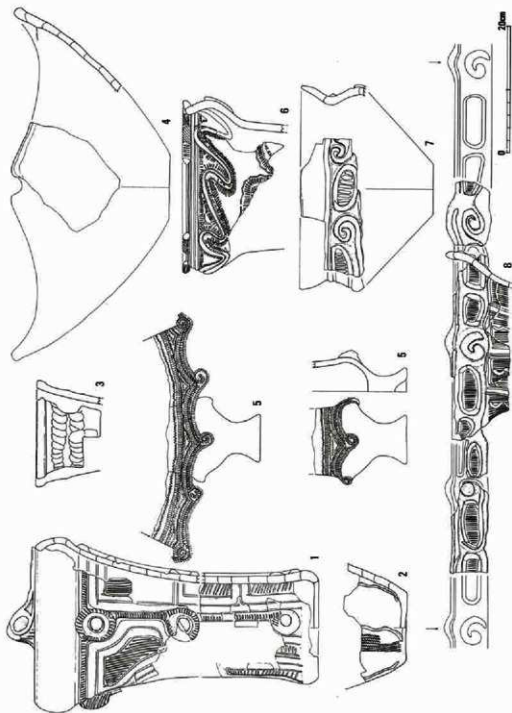


图28 3号·13号住居址·2号聚石·3号聚石·22号土质出土器

遺構外出土土器（第29図、図版25・26）

(5, 2), (5・6, 3)の両区において、Ⅱb層下部で2箇所遺物集中箇所が認められ勝飯式土器、阿玉台式土器の破片が比較的まとまって出土した。しかし、接合部が少なく欠失部の目立つものが多いため、実測図をとれない土器も多い。

1. (5, 3)区出土。口径14.8cm, 現高10.6cm。口縁部は無文帯で、胴上半部には貼付けの隆帯による渦巻状突起と、そこから垂下する隆帯が認められる。胴土に砂粒の混入が目立ち脆い土器である。

2. (5・6, 3)区出土。口径36cm, 現高13cmを測る口縁部破片で、扇状把手の半分が現存する。口縁部は隆帯により区画状文が表出され、隆帯裾や区画内には竹管状工具による連続刺突文が施されている。胎土に金雲母を多く含み、焼成も良好である。

3. (5, 2)区出土。口径12cm, 口縁部から頸部までの全周の約1/2と、胴中半部の一部が現存するが、互いに接合はしない。口縁は波状を呈し、把手を表出していたと思われるが欠失している。口縁部文様隆帯により棒状の区画文を表出し、隆帯に沿って複列の角押文を施している。さらに、縦の隆帯上には連続指頭圧痕文が見られる。頸部には波状沈線文が施され、胴部との境に隆帯が看取される。胴部は口縁部同様の連続指頭圧痕文を表出した隆帯が2本単位で垂下し、隆帯間に角押文を施文している。胎土に金雲母の混入が目立つ。

4. (5, 2)区出土。口径50cm, 現高8cm。口縁部が内折する浅鉢形土器である。文様は竹管状工具により複列の角押文を表出している。なお、本土器は土器集中部下位のピット内より出土している（図版14）。

5. (5, 2)区出土。口径48cm, 現高8.3cm。4と同型式の浅鉢形土器である。文様は爪形文・連続三角押文・波状沈線文により表出している。

6. (5, 2)区出土。口径32cm, 現高11.2cmを測る。肩のやや張る浅鉢形土器である。口縁部に貼付けの隆帯により区画文を表出し、区画内を半截竹管状工具による連続刺突文を表出している。

7. (5, 2)区出土。口径40cm, 現高10.4cmを測る無文の浅鉢形土器である。金雲母を多量に含んだ、胎土のやや粗粒な土器である。

8. (1, 3)区出土。口径35cm, 現高12cm。現存部は胴部上半までで、破片数は多いが互いに接合はしない。器形は単純な円筒形を呈すると思われる。文様は貼付けの隆帯による楕円区画を数段廻らすのを基本としており、隆帯の裾と波状文は、何れも三角押文にて表出している。また、隆帯の途切れる部分に連続指頭圧痕文が認められる。

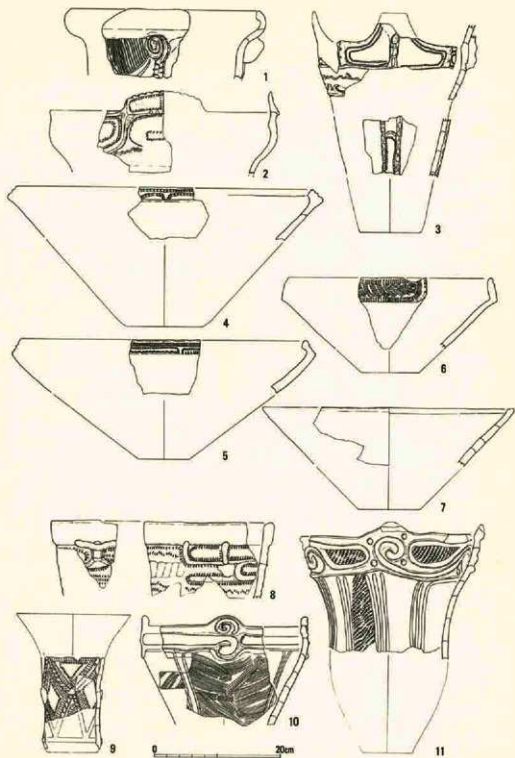
9. (3・4, 8)区出土。現高14cmを測り、口縁部と底部が欠失している。器形は胴部が円筒形を呈し、口縁部は図示したように大きく外反する朝顔状を呈すると思われる。文様は貼付けの隆帯をエ字状に連続させることによって三角形区画文表出し、隆帯の裾には連続爪形文、

さらに内側には半截竹管状工具による連続刺突文を表出している。また、陸帯上には竹管状工具による刻目が認められる。

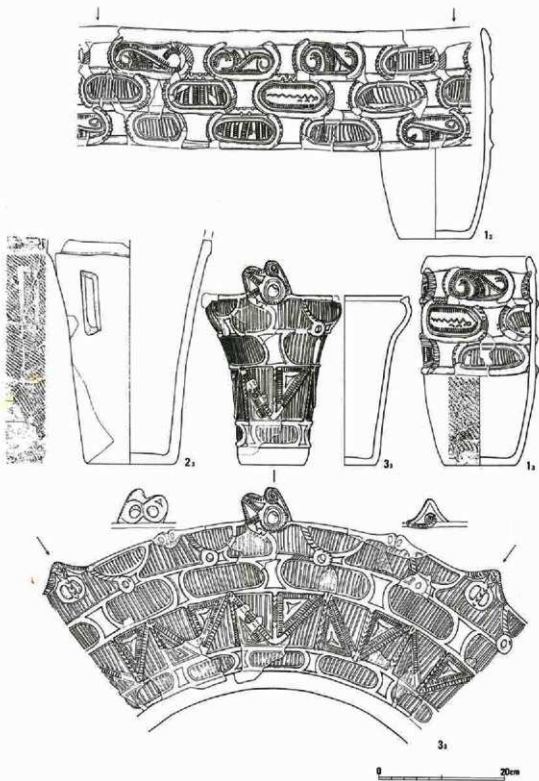
10. (6, 8・9)区出土。口径26cm, 現高17.5cm。胴前半部以下を欠失している。口縁部には小突起を配し、緩い波状を呈する。口縁部文様は小突起下位に沈線にて描き出した渦巻文と、楕円区画から延びる渦巻文を表出している。胴部は沈線間を無文帯とした2本単位の懸垂文が垂下し、懸垂文間には、櫛状工具による細沈線文を矢羽状に表出している。

11. (1・2, 12・13)区出土。口径29cm, 現高21cm。3単位の状状口縁を呈し、口縁部文様帯には楕円区画から延びる沈線にて描き出した渦巻文が表出され、円形刺突文も見られる。胴部には沈線間を無文化した2ないし3本単位の懸垂文を表出している。なお、口縁部区画内と胴部の縄文は共にRLであり、口縁部は3単位、胴部は12単位の文様構成をなす。

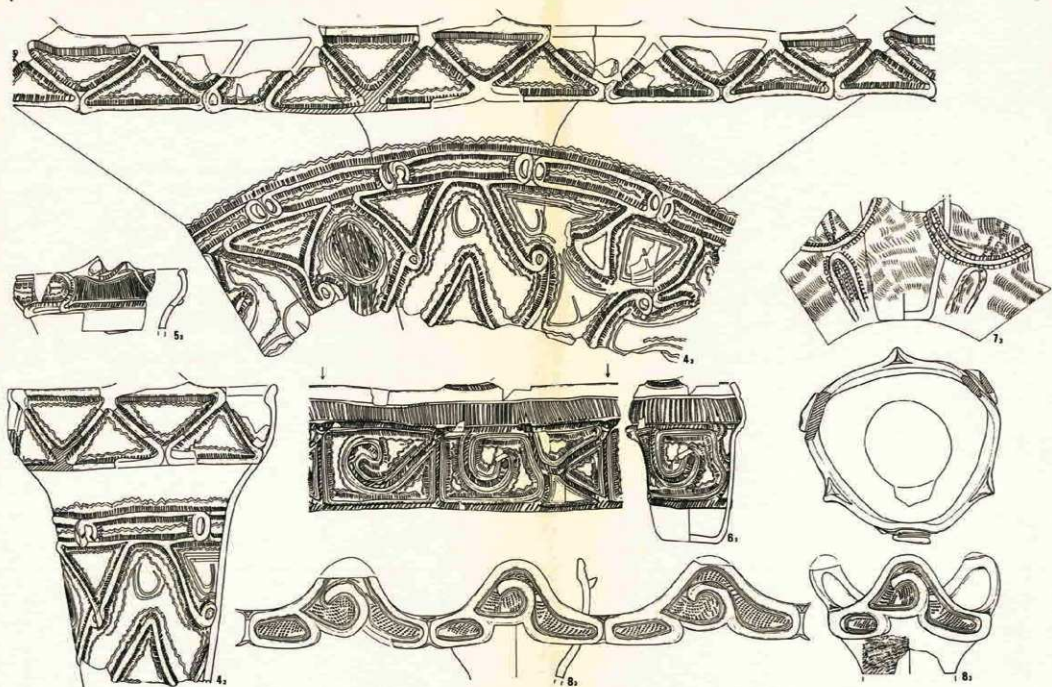
(山崎)



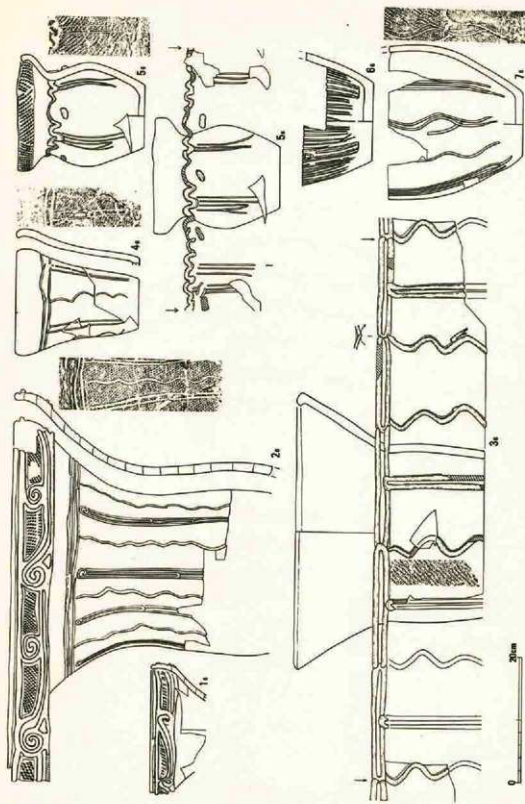
第29圖 遺構外出土器



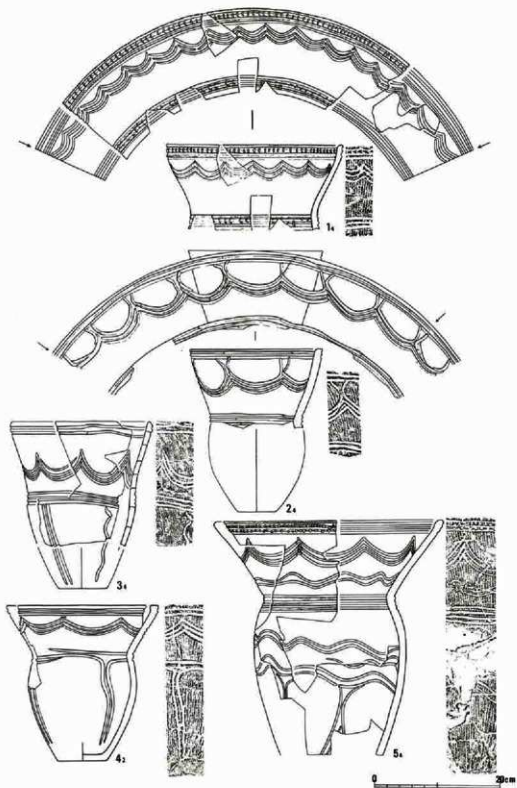
第30图 3号住居址出土土器(第1次調査)(1/6)



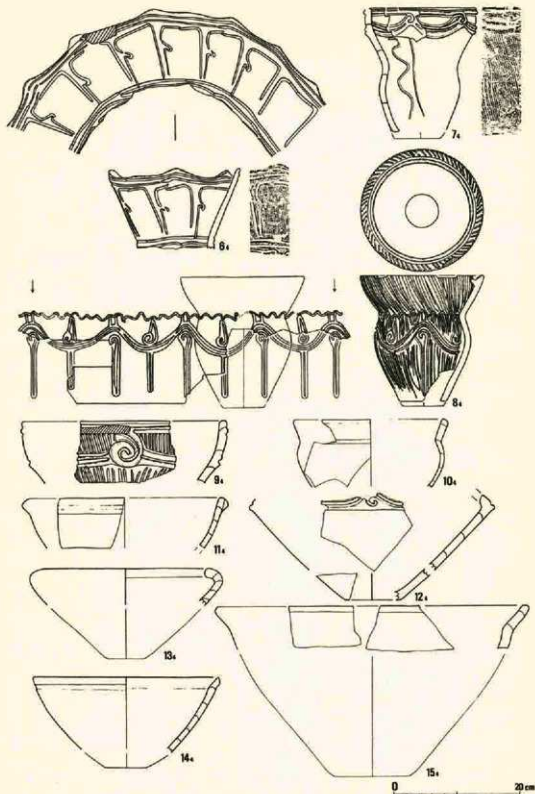
第31图 3号住居址出土土器(第1次調査) (1/6)



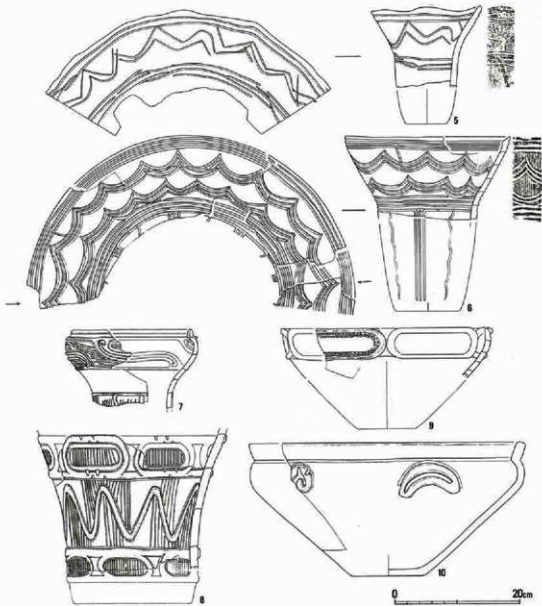
第32图 6号柱后土器(第一次調査)(1/6)



第33图 4号住居址出土土器(第1次調査)(1/6)



第34图 4号住居址出土土器(第1次調査)(1/6)



第35図 1964年度調査C号住居址(16号住)出土土器(1/6)(但し3は1/12)

第2節 石器

第10次調査において出土した全石器点数は3,553点を数え、その総重量は370kgを量る。その器種の内訳は、打製石斧、石皿を中心とする縄文時代中期の石器組成を特徴づけるものをはじめ、石鏃、石槍の狩猟生産具、鎌器、掻器、彫器、凹み石、磨り石、砥石、叩石、凡字形石器、磨製石斧の加工調整具、さらに以上の器種を生産した素材剝片そして、残滓としての残核や砕片等である。石質は砂岩が主体を占め、粘板岩に近い頁岩、花崗岩、黒曜石等であり、各々の器種と密接な関係を示している。

5号住居址出土石器（第36・37図、図版27・28）

5号住居址より出土した石器総数は533点で総重量約110kgを量る。器種、石質の内訳は第3表のとおりである。

打製石斧（第36図1～8）

素材は6を除きすべて横長剝片である。

1. 原稜面のみが被熱亦化し、原材の時点で熱を受け、その後整形加工が施されたものである。両側縁の敲打による整形痕が顕著である。砂岩で重さ340gを量る。

2. 整形加工後に被熱している。基縁、刃縁に素材となった横長剝片の両側縁を残している。砂岩で、重さ299gを量る。

3. 基縁に素材剝片の段階の側縁を残すものの、刃縁は整形加工を施している。1, 3, 4等の刃縁の整形加工が加工当初からのものか、使用破損後の整形加工かは定かではない。砂岩で、重さ296gを量る。

4. 他の打製石斧と比較し、長さ、幅に対して厚みが非常にあり、整形方法や素材の用い方など共通点をもつものの性質を異にする打製石斧である。「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」の6図10にも同様の打製石斧が見え、この時期に散見する。全体に被熱し、石質は砂岩で、重さ429gを量る。

5～7は、1～4までの打製石斧と比較し、小振りに見えるが、5号住居址においては、平均的な大きさである。

5. 7は刃縁に原稜面を残し、原材から剝ぎとった最初の剝片と想定される。6の場合は、素材となった剝片と同様の剝片を剝離していることが背面の剝離面より観察できる。7の背面中央の稜上には敲打痕が著しく、その厚みを減じようとする意図が汲みとれる。5は砂岩で、60g。6, 7は頁岩で、それぞれ67g, 116gを量る。

8. 厚みとしては、恋ヶ窪遺跡出土中最大に属し、その全形も非常に大形となろう。横断面は卵形を呈し、大形磨製石斧製作途中で折損とも考えられよう。石質は砂岩で、204gを量る。

叩き石 (第36図9)

欠損品で、下端、右側縁に敲打痕が著しい。石質は砂岩で124gを量る。

打製石斧素材礫 (第37図10)

正面左側縁に打製石斧整形加工と同様の調整痕が被熱後に施されたことが観察できる。打製石斧の未製品とも言えようが何らかの理由で放棄された打製石斧製作工程の一端を知る好例である。砂岩で、241gを量る。

打製石斧素材剥片 (第37図11, 12)

11. 縦長剥片であるが、以前に横長剥片が剥離されている。打面は線上を呈し、この手の剥片の特徴である。炉石のひとつであり、砂岩で74gを量る。

12. 寸詰まりの横長剥片である。打面が線上を呈し、その正面観は打点において抉れる場合が、素材剥片において観察されることが多いがここでも例外でない。剥片末端に擦痕が精査される。砂岩で141gを量る。

残核 (第37図13)

打製石斧素材剥片を剥離した残核である。90度打面転位残核となろうが、背面に原礫面を持つ剥片を得ようとするために縦横に転位したものであろう。したがって剥離した剥片の枚数は多くても5枚前後となろう。砂岩で、1,047gを量る。

石皿 (第37図14, 15)

14. 表裏面とも窪みがあり、石皿としての磨り面は表一面のみである。こうした、磨り面と凹み穴との共存は堅果類の外殻の叩き割りや塗り潰しという一連の加工過程を含むものである。5号住居址の炉石でもある。花崗岩で、1,880gを量る。

15. 表面にのみ窪みを持ち、その周辺が石皿面となる。石質は緑泥片岩で、723gを量る。

14号住居址出土石器 (第38・39図, 図版29・30)

14号住居址より出土した石器総数は905点で総重量約112kgを量る。器種、石質の内訳は第4表の通りである。

打製石斧 (第38図1-8)

1. 表裏面ともに原礫面を残し、完成した打製石斧とそれほど形状差のない扁平な礫を素材としている。原材を選択した時点で既に打製石斧としての形をイメージしていたものであろう。そうした原材の形状は、時として叩き石の形でもあり、この場合も整形加工が施される以前の敲打痕(図版38-4)が認められる。P₁内の出土で、打製石斧の用途を知るひとつの手懸りともなろう。頁岩で213gを測る。

2. 横長剥片を素材とし、基縁、刃縁に素材両側縁を残している。全体に被熱し、砂岩で、124gを量る。

3. 一見すると石槍と見紛う形態であるが、素材の用い方、整形加工の施し方等から、やや細身の打製石斧とした。片岩で、60gを量る。

4. 原礫面を残さず、縦長剥片を素材とする。背面の剝離面から同形の剥片を得ていることがわかる。砂岩で、116gを量る。

5. 打製石斧の石質としては、数少ない珪質頁岩を石材としている。重さ121gを量る。

6. 3と同様、平面形が石槍に似るが、打製石斧としての整形加工痕、さらに、打製石斧特有の線状痕(図版38-1)が側刃縁に観察され、尚且つ磨耗痕が著しく稜が取れて丸味を帯びている。頁岩で、49gを量る。

7. 14号住居址出土の打製石斧の中では、最も小形なもののひとつであり、平均値のほぼ半分ほどの大きさである。しかしながら、整形加工等打製石斧の形態を備えている。頁岩で、重さ21gを量る。

8. 1と同様表裏面ともに原礫面を残し、原材である扁平な長楕円礫を素材に用いていることがわかる。全面被熱が認められ、砂岩で、125gを量る。

磨製石斧(第38図10)

基部欠損品である。全面丁寧に研磨され、側縁に稜を僅かに認めることができる。刃縁の正面観はほぼ直線を呈し、左側縁の消耗が顕著であり、その使用状況を欠損面の加力方向と考え合わせると縦斧と想定される。花崗岩で、571gを量る。

凡字形石器(第38図9, 11)

やや厚みのある扁平な礫の一端を短軸方向への加力によって分割あるいは断ち折り、その素材の長軸方向の両側縁に整形加工を施し、平面形を三角形ないし台形に仕上げる。使用面は、磨痕の観察される断ち折り面と推察され、磨り石と同種の加工調整具であろう。

9. 典型的な凡字形石器とは言えぬが、素材の用い方、整形部位等の共通性から、同器種とした。上部端と背面の敲打痕は叩き石としての使用痕であろう。砂岩で、322gを量る。

11. 平面形が台形を呈し、使用面としての断ち折り面を平坦に仕上げようとする意図が使用面両側面の整形加工に反映している。砂岩で、466gを量る。

打製石斧素材剥片(第39図12~16)

14を除き他はすべて横長剥片である。打面は16が原礫面打面で剝離角63度を測る他はすべて線状を呈し、12, 13は打面正面観において抉れが著しい。13~16は剥片末端、打面側の整形加工が認められるが、整形中途の欠損や、16に見られる打面部の異状な厚味を持つが故に完成の隅の目を見なかつたものであろう。12~15は砂岩で、順に117g, 153g, 194g, 265gを測り、16は頁岩で、109gを量る。

打製石斧素材礫(第39図17)

平面形からは、平均的かつ典型的な打製石斧の形状を整えている。叩き石とも考えられよう

が、右側縁の剝離度は、受動的な整形加工度であり、上下両端部に敲打痕の無いことも手伝って、素材礫とした。砂岩で、124gを量る。

叩き石 (第39図18)

長幅比5対1の小形の角礫を素材としている。上下両端部に敲打痕が認められ、下端になるにしたがい先細りとなる。上端が他の打撃具、下端が石核打面に対したのであろうか。そうすると間接打撃具となりうる。砂岩で、35gを量る。

砥石 (第39図19)

器種を砥石としたものの、表面の原礫面には、調整具としての長さ5mm前後の線状痕が全面にわたって観察され、裏面のドット部分の擦り面と合わせて、二種の機能を所有する調整具といえよう。頁岩で、重さ19gを量る。

石皿 (第39図20)

欠損品で、ドットで示した磨り面が僅かに窪み、石皿の機能面を形成している。全体に被熱で赤化し、右側縁の欠損面は火ハネによる。砂岩で、1,525gを量る。

15号住居址出土石器 (第40・41図, 図版30・31)

15号居址より出土した石器総数は491点で、総重量約55kgを量る。器種、石質の内訳は第5表の通りである。

打製石斧 (第40図1~10)

1. 長幅比3対1の横長割片を素材としている。片岩で、200gを量る。
2. 第63図4の接合資料と同一母岩 (図版36下) で、接合はしないものの原材からはば最初に剝離した横長割片を素材としている。頁岩で、174gを量る。
3. 図版38—3を見るように擦痕並びに線状痕が刃部に顕著に認められる。その使用痕は身中央にまで及ぶ。頁岩で、87gを量る。
4. 素材が横長割片であろうことは想定されようが、打面を基部に設定し、両側縁を折るように整形加工を施している。その結果長幅比1対1の寸詰まりの小形に仕上がったものである。頁岩で、40gを量る。
5. 原材の被熱後直接、整形加工を施し、仕上げたことが表裏面の原礫面から理解される。刃部は裏面からの加力によって折損している。支柱穴P₇出土でその用途を示唆させるが、遺存部分が刃部欠損であることを考えると、図は上下逆になる可能性もあろう。砂岩で、124gを量る。
6. 横長割片を縦位に用いて、身部中央がややくびれる形状を示す。片岩で、104gを量る。
7. 基縁、刃縁に原礫面を残し、やや分厚く仕上げている。砂岩で、96gを量る。
8. 上下逆でもよさそうであるが、身部中央より下半に磨耗痕が著しく観察され、打製石斧

の使用痕であり、図のようになる。頁岩で、82gを量る。

9. 素材剥片にほとんど整形加工を施さず、剥片の両側縁がそのまま基刃両縁に置かれている。P₉の主柱穴内出土である。砂岩で、36gを量る。

10. 細身で基刃両縁が先細る形状をとり、石槍にも見えようが、打製石斧の特徴を具備していることは14住出土の同種の打製石斧（第38図3、6）と共通する。砂岩で、48gを量る。

磨製石斧（第40図11）

全面が非常に入念に研磨された石斧である。基部が裏面からの加力によって折損している。刃縁は14住出土の磨製石斧と同様、偏っており、その正面観が直線状であり、縦斧を想定できる。各住層とも一点だけというのも意味深長である。石質は、この手の器種に多用される凝灰角礫岩で、361gを量る。

磨り石（第40図12, 13）

原材はほぼ器種別の形状に近からう。ドットは黒汁様の付着物で、アグと考えた。磨り石の凹み穴が石皿における凹み穴と同様の機能を果たしたことは、石皿・磨り石のセット関係からも首肯できよう。12は砂岩で791g、13は花崗岩で558gを量る。

打製石斧素材剥片（第41図14, 15）

一側縁ないし二側縁に整形加工痕を残す、横長剥片である。14の場合、基部欠損の打製石斧と考えても差し支えあるまい。何れも左側縁を欠損している。打面は線状を呈し、剝離角の計測は不可能である。14は花崗岩で83gを、15は砂岩で、425gを量る。

打製石斧素材礫（第41図16, 17）

16. 偏平な長楕円礫の一側縁に整形加工を施している。欠損面が丁度整形加工の部位からの加力によることから製作中途の欠損であろう。砂岩で、93gを量る。

17. 砲弾形の原材を半割し、その縁辺に整形加工を施したものである。その肥厚のために放棄されたものだろう。砂岩で、200gを量る。

残核（第41図18, 19）

18. 90度打面転位の残核である。単剝離打面で、接合する割削り剥片（図版31）に残る原礫面から、剝離したほとんどの剥片が原礫面を背負ったものであろう。打製石斧素材剥片を剝離した残核となる。砂岩で、1,197gを量る。

19. 18と同様、90度打面転位の残核であるが、原礫面をよく留めている。原礫面を背面にもつ縦長剥片を得ている。砂岩で、1,400gを量る。

石皿（第41図20）

接合資料（第53図4）のうちのひとつである。欠損面以外の被熱が著しい。花崗岩で、重さ1,800gを量る。

砥石 (第41図21)

偏平礫の中央やや下半に集中して、直線状の溝痕が多数重複して観察される (図版38-7)。石材以外の材質を整形したものと考える。さらに下端には、長さの短いや深みのある線状痕が観察されるが、こちらは刃部加工、整形加工の際の調整器の役割りを果たしたであろう。石質は、風化が弱く見られるが流紋岩で、207gを量る。

遺構外出土石器 (第42図, 図版31・32)

住居址外に出土した石器総数は838点で、総重量約52kgを量る。

打製石斧 (第42図1, 2)

1. 細身の打製石斧で、長幅比3対1強である。14住 (第38図3, 6), 15住 (第40図10) 出土と類似する。片岩で、39gを量る。

2. 石皿として使用されていたであろうものが、折損後に整形加工を施し打製石斧として再加工したものである。背面には石皿時の窪み穴が認められる。石質は打製石斧には稀有な緑泥片岩で他に4点出土するにとどまる。重さ196gを量る。

調整器 (第42図3, 4)

3. 刃部加工、整形加工の際の傷跡と考えられる線状痕が下部部に集中して認められる。線状痕は長さ1~2mmほどで、ハの字様に二本が一对となって観察される。全体に被熱で赤化し、風化の度合いが強いが、石質は頁岩であろう。重さ54gを量る。

4. 3と同様の線状痕が器面全体に観察されるが、その長さは3に比較して長く2mmから器体全面に及ぶものまで観察される。また、線状痕の深さも浅く文字通り側に近い。こうした相違は器体自身の石質の差によるものか、あるいは被加工物の器種または加工部位の違いによるものかの何れかであろう。石質は建質頁岩で、46.0gを量る。

打製石斧素材製片 (第42図5)

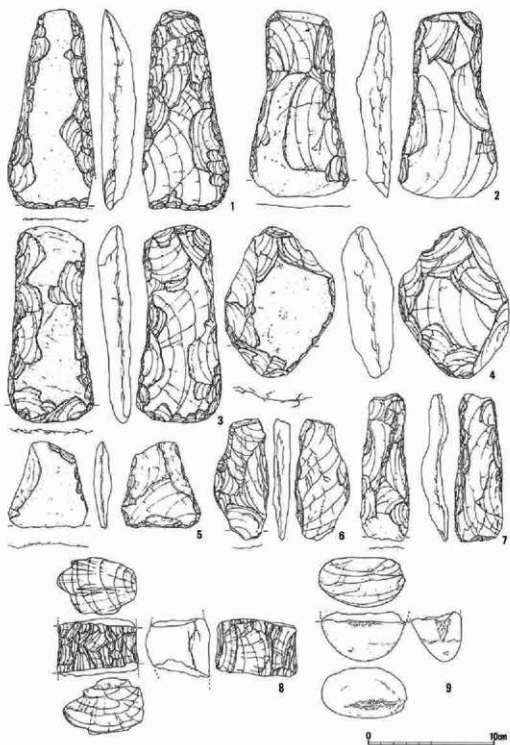
横長製片を素材とし、ほぼ全面に整形加工を施し、打製石斧に仕上げようとしている。しかし、製片打面部からの整形加工によって、抉れた状態で欠損したものである。欠損後の再調整と、両側縁の厚みを減じる整形加工が認められる。砂岩で、340gを量る。

砥石 (第42図6)

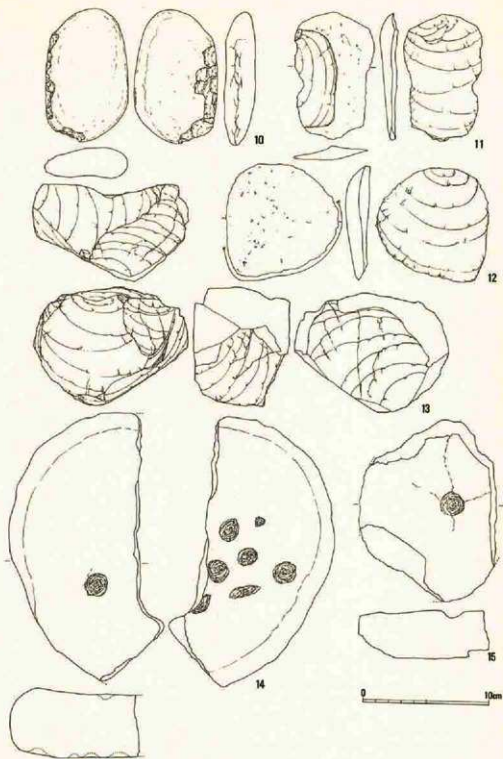
14住 (第39図19) と同器種で背面にも磨痕が認められる。砂岩で、69gを量る。

石質 器種	石質														小計	合計	重さ(両)
	砂岩	頁岩	黒曜石	花崗岩	緑泥片岩	片岩	凝灰岩	板角岩	安山岩	流紋岩	礫岩	珪岩	チャート	珪質頁岩			
打石	製弁 完欠 27 75	8 16		1 1		5 18				1				1	42	153	10,730.0
石	鏃 完欠		2 2												2 2	4	1.7
石	鏃 完欠														0	0	0
石	未製品 完欠														0	0	0
石	槍 完欠														0	0	0
鍬	器 完欠	1	1												2 1	3	2.3
播	器 完欠														0 0	0	0
彫	器 完欠														0 0	0	0
ピエス=	完欠		2												2	4	3.8
エスキュー	完欠		2												2		
磨製石斧	完欠														0	1	356.0
小形磨製石斧	完欠														1	0	1
磨製石斧	完欠	1													1	1	7.0
石	皿 完欠	8		4 34	1 10		1	7				3			5 63	68	45,984.5
凹み石	完欠			1 13	7										8 14	22	10,615.0
磨り石	完欠	1 5		2 5								1			4 10	14	1,090.0
砥石	完欠														0 0	0	0
甲き石	完欠	4 2	1				1								1 4	5 9	1,662.0
凡字形石	完欠	1													1 0	1	1,141.0
打製石斧	完欠	11 24	3 5			1									1 16	17	1,856.0
打製石斧	完欠	2					1	1							2 0	2	200.0
打製石斧	完欠	17 28	2 7	11 6				2 3							1 34	35	7,739.8
片	完欠	19 26	5 7	15 13				3 1							4 53	57	574.0
打製石斧	完欠	6	2					1							9	11	44.5
作出碎片	完欠	1	1												2		
残核	完欠	17		1				1				1			19	19	13,906.5
原材	完欠														0 0	0	0
炉石	完欠			1											0 1	1	7,680.0
合計		275	59	56	50	31	32	10	2	7	1	0	5	1	4	533	108,394.1

第3表 5号住居址出土石器一覽



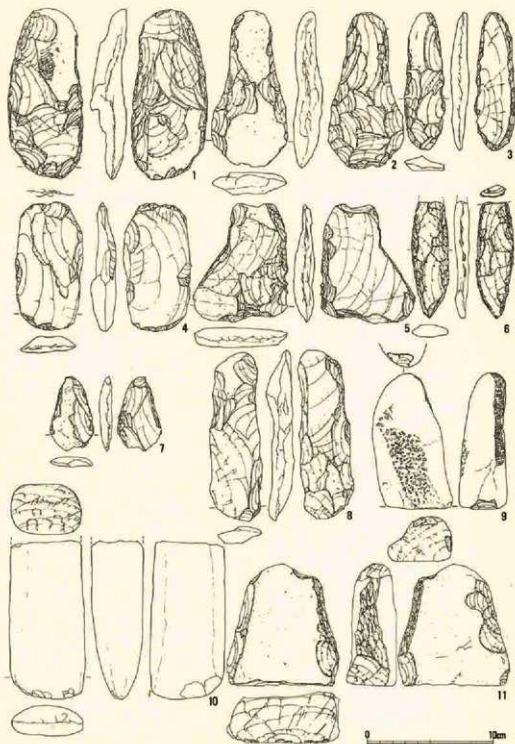
第36图 5号住居址土石器 (1/3)



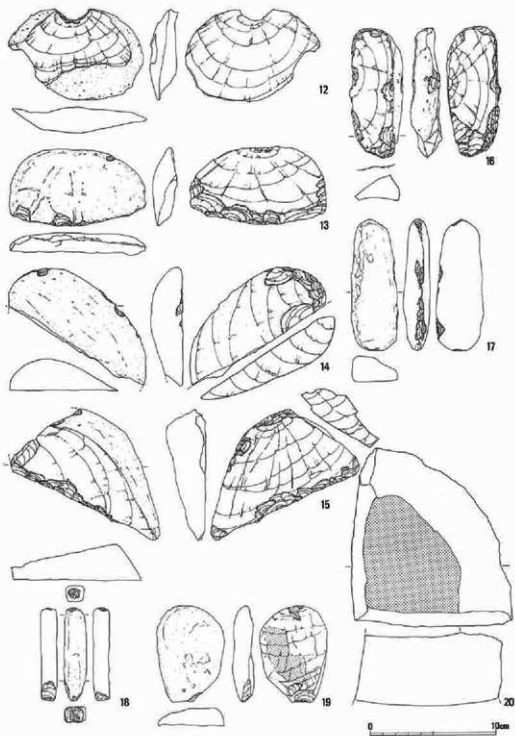
第37图 5号住居址出土石器(1/3)

石質 器種	石質		砂岩	頁岩	黒曜石	花崗岩	緑泥片岩	片岩	凝灰岩	礫岩	安山岩	流紋岩	礫岩	玢岩	チャート	珪質頁岩	小計	合計	重さ(kg)
	製	欠																	
打石	製	欠	32	10				13									57	241	14,192.0
			131	26		2		25									184		
石	織	欠			4			1							1		6	11	9.7
					5												5		
石	織	欠			4												4	4	5.3
																	0		
石	槍	欠			1												1	2	30.8
										1							1		
鍬	器	欠	2	1	1												5	6	54.0
					1												1		
掘	器	欠			2												6	6	343.3
															3	1	0		
																	0		
彫	器	欠		1													1	1	9.0
																	0		
																	4	4	3.9
					4												0		
																	0		
磨製石斧	製	欠															0	1	572.0
			1														1		
小磨製石斧	製	欠															0	0	0
																	0		
石	皿	欠	1														1	70	28,017.5
			5			33	19			4	5		2	1			69		
							2										1		
凹	み	石		2		1											3	6	2,024.0
																	3		
磨	り	石	5			3									1		9	24	7,329.0
			9			1		2	1	1					1		15		
紙	石	欠	1	1													2	2	1,019.0
																	0		
叩	き	石	9			1											11	17	2,624.0
			5													1	6		
凡	字	形	2														2	2	791.0
																	0		
打製石斧	片	欠	27	7		1		1									36	87	10,475.0
打製石斧	片	欠	39	4				1	2	4							51		
打製石斧	片	欠	2														2	2	990.0
																	0		
剥	片	欠	26	8	17			1		1					6		59	147	6,589.0
			56	12	11			2		5					1	1	88		
砕	片	欠	45	7	40			5									97	193	1,028.7
			46	12	30			2		4						2	96		
打製石斧	片	欠	29	4				1				1					35	47	146.3
作出砕片	片	欠	12														12		
																	0		
残	核	欠	14	2	1				1	3							23	23	17,362.0
																	0		
原	材	欠													2	1	3	4	1,565.0
															1		1		
柳	石	欠															0	5	17,057.0
			1			4											5		
合	計		500	97	121	46	21	54	3	22	7	1	2	3	18	10	905	111,817.5	

第4表 14号住居址出土石器一覧



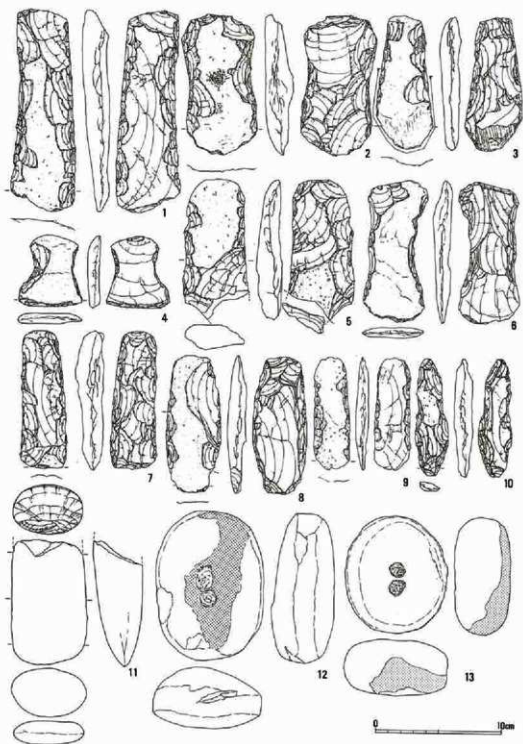
第38图 14号住居址出土石器 (1/3)



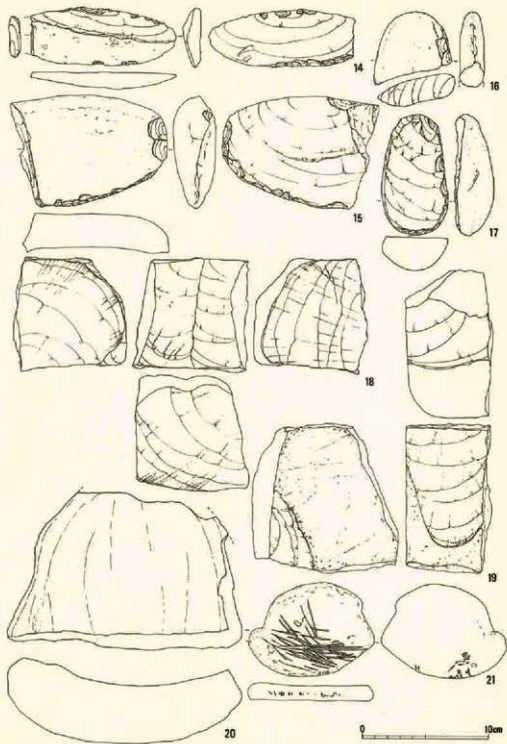
第39图 14号住居址出土石器 (1/3)

石質 器種	砂岩		頁岩	黒曜石	花崗岩	緑泥片岩	片岩	凝灰岩	燧石	安山岩	流紋岩	礫岩	珩岩	チャート	珪頁岩	小計	合計	重量(kg)
	完	欠	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完	完
打製石	30	16		2		13				1						61	133	10,579.0
製斧	43	15				11	1								1	72		
石 鏃	完	完	1													1	1	1.1
鏃	完	完														0		
石 鏃	完	完		2												2		
鏃	完	完		1												1	3	3.2
石 槍	完	完								1						1	1	53.0
槍	完	完														0		
鏃	完	完	1											1		2	2	4.7
鏃	完	完														0		
播 器	完	完	1	1												2	2	168.4
器	完	完														0		
彫 器	完	完		1												1	1	4.0
器	完	完														0		
ピエス・	完	完		4												4	4	3.7
ピエスキュー	完	完														0		
磨製石斧	完	完														0	0	0
形	完	完														0		
小磨製石斧	完	完														0	0	0
形	完	完														0		
石 皿	完	完	1		1											2	2	
皿	完	完	3		20	7	1					1	5		37	39	16,312.0	
凹み石	完	完														0	1	150.0
石	完	完					1									1		
磨り石	完	完	4		2											6	16	4,354.0
石	完	完	3		6					1						10		
砥 石	完	完						1			1		1			2	3	5,166.0
石	完	完														1		
叩き石	完	完	2													2	10	1,841.0
石	完	完	7				1									8		
凡字形器	完	完														0	0	0
石	完	完														0		
打製石斧	完	完	13	4												17	26	5,588.0
素材	完	完	7		1				1							9		
打製石斧	完	完	3													3		
素材	完	完	1													1	4	499.0
剥 片	完	完	12	4	13		1					1	1			32	75	3,790.5
片	完	完	18	9	9		1	1	1						3	43		
砂 片	完	完	24	5	25		2	2		1					2	61	122	541.6
片	完	完	26	8	23		1	1	1							61		
打製石斧	完	完	22	8			1									31	37	126.6
作出砂片	完	完	4	1						1						6		
残 核	完	完	5		1				1					3	1	11	11	6,381.0
核	完	完														0		
原 材	完	完														0	0	0
材	完	完														0		
伊 石	完	完														0	0	0
石	完	完														0		
合 計	229	70	82	31	9	32	7	4	3	3	3	1	7	8	5	491	55,446.8	

第5表 15号住居址出土石器一覧



第40图 15号住居址出土石器 (1/3)



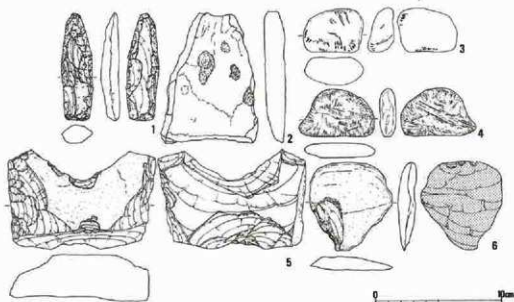
第41图 15号住居址出土石器 (1/3)

住居址		3号住	重さ(g)	4号住	重さ(g)	6号住	重さ(g)	12号住	重さ(g)	13号住	重さ(g)	16号住	重さ(g)
器種													
打石	製斧	27	4,350.0	3		12	2,350.0	8	2,350.0	3	1,850.0	15	2,450.0
	欠	66		2		17		27		22		33	
石	鐵									1			
	欠									8		2	
石	鐵製品									1			
	未製					1				2			
石	槍												
	欠	1											
錐	器											1	
	欠												
掃	器	1								2			
	欠												
彫	器											2	
	欠												
ピエス-	完	1				1				1			
エスキュー	欠												
磨製石斧	完									1		1	
	欠												
小磨製石斧	完									1			
	欠												
石	皿												
	欠	6				5		3		4		9	
凹	石	1			1,350.0					1			
	欠												
磨	石	1	5,750.0				1,250.0		10,850.0		5,650.0	3	3,550.0
	欠	7			1	1		1		5			
砥	石							1		2			
	欠												
叩	石			1				1		1		1	
	欠	3				1				3		1	
凡	字							1				2	
石	形器												
	欠												
調	整			1									
	器												
打製石斧	完	11		1				7		4		4	
	欠												
素	材	4		2		5		4		3		10	
	削片												
打製石斧	完											1	
	欠												
素	材											1	
	礫												
削	片	28		1		9		15		11		21	
	欠	24		9		8		22		34		14	
碎	片	22		4		7		7		35		13	
	欠	15		8		9		18		25		15	
打製石斧	完	6				1		4		5			
	欠	2								1			
作出碎片													
残	核	1				1				1		2	
	欠												
原	材												
	欠												
合	計	227	10,100.0	32	1,350.0	79	3,800.0	119	13,200.0	173	7,500.0	156	6,000.0

第6表 その他の遺構出土石器一覧

器種	石質		黒曜石	花崗岩	緑泥片岩	片岩	凝灰岩	凝灰岩	安山岩	流紋岩	石英	珸岩	チャート	珪質頁岩	小計	合計	重さ(g)
	製弁	製片															
打石	38	6			5	10									59	251	20,400.0
石	132	21				36	2							1	192		
石	完欠		7										2		9	11	
石	完欠		2												2	2	
石	完欠		1												1	2	
石	完欠		1												1	0	
石	完欠														0	0	
錐器	1	1	7												9	10	
錐器	完欠		1												1		
錐器	完欠		1										2	1	4	5	
錐器	完欠														1		
錐器	完欠														0	0	
ビス・	完欠		13												13	13	
ビス・	完欠														0		
磨製石斧	完欠						1								0	1	
小形石斧	完欠	1													1	1	
小形石斧	完欠														0		
石	完欠	1		4	3			1	3			1			13	66	
石	完欠	1		35	16		1								53		
凹み石	完欠														0	0	
凹み石	完欠														0	0	
磨り石	9			1					1						11	24	31,850.0
磨り石	3			9					1						13		
砥石	完欠	5													5	5	
砥石	完欠														0		
叩き石	完欠	3													3	5	
叩き石	完欠	1	1												2		
凡字形器	完欠	1													1	1	
凡字形器	完欠														0		
調整器	完欠		1											1	2	2	
調整器	完欠														0		
打製石斧	26	8				1	1						1		37	110	
素材剥片	完欠	54	12			7									73		
打製石斧	完欠														0	0	
素材礫	完欠														0	0	
剥片	31	22	25	1			1	1							81	202	
剥片	完欠	67	22	20		4	4	1					3		121		
碎片	4	6	38			4									52	100	
碎片	完欠	4	3	39		2									48		
打製石斧	11	2				2	1								16	18	
作出砕片	完欠		2												2		
残核	完欠	6	1	1			1				2				11	11	
残核	完欠														0		
原材	完欠														0	0	
原材	完欠														0	0	
合計	399	108	157	50	24	66	12	3	5	0	2	1	5	6	838	32,250.0	

第7表 遺構外出土石器一覧



第42図 遺構外出土石器 (1/3)

石 鏃 (第43図, 図版33)

住居址内外含めて、40余点の石鏃、石鏃未製品が出土している。その大半の石質が黒曜石であり、チャート、辻質頁岩と続く。その大きさもほぼ一定しているようである。ここでは側縁と基縁をそれぞれ分類して、その組み合わせを第44図とし、その番号は第43図と一致する。

側縁 第Ⅰ類 両側縁が心もち外側に向かって弧を描き尖頭部を形成する。

第Ⅱ類 両側縁が第Ⅰ類とは対照的に内側(個体)に向かって若干弧を描き尖頭部を形成する。

第Ⅲ類 両側縁がやや開き気味に直線状を成し、それをつなぐ形で刃縁も直線状を呈する。

基縁 a 器体に向かってやや内わんし、脚部が若干認められる。

b 器体に向かって内わんし、脚部が明確に作出される。

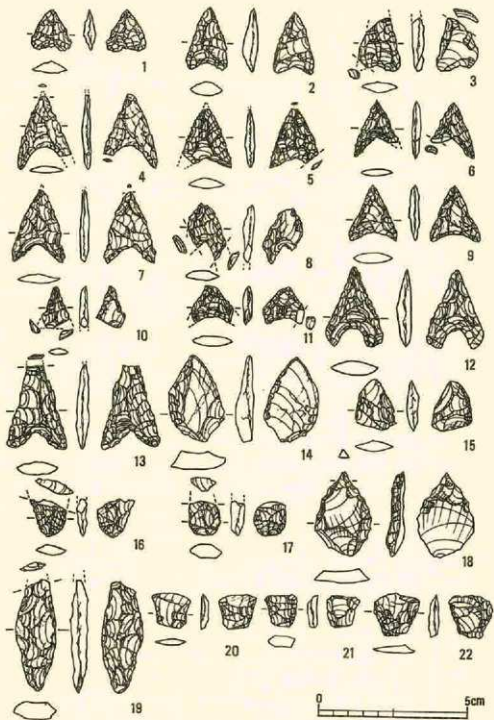
c 器体に向かってやや尖角状に抉入し、脚部が若干認められる。

d 器体に向かって尖角状に抉入し、脚部が明確に作出される。

e 外側に向かって心もち弧を描き、舌部を形成する。

f 器体に向かって若干弧を描き、舌部を形成する。

以上の側縁3類、基縁6類で、基縁a～dは凹基無茎、e、fは凸基有茎あるいは尖基、円基と大きく分類可能でもあろう。



第43圖 石 鏃 (4/5)

番号 (重さ) E	基縁	a	b	c	d	e	f			
	側縁	↔		↔	↗↖	↘↗	↘↗			
I		1 (0.5)	2 (0.8)	4 (0.8)	5 (0.7)	6 (0.4)	7 (0.8)	14 (3.3)	15 0.5	—
		3 (0.9)				8 (0.7)	16 (0.3)	17 (0.4)		
II		9 (0.8)	10 (0.3)	12 (1.9)	13 (2.0)	—	—	18 (2.5)	19 (3.2)	
		11 (0.3)								
III		20 (0.5)	21 (0.3)	22 (0.6)						

第44図 石鏝分類模式図

I a (1~3) 1は、他の2点に比較して、小振りかつ寸詰まりで、右脚部をつまみの様に作出しているのが特徴的である。1, 3は5号住居址、2は遺構外出土で、すべて黒曜石製である。

I b (4) 尖頭部、右脚部を欠損する。14号住居址出土で、石質は頁岩である。

I c (5) 両側縁を鋸歯状に仕上げる点が目を引く。遺構外出土で、黒曜石製である。

I d (6~8) 6は器体の中央やや下位にまで脚部を作出し、側縁の長さのほぼ半分と大きな割合を示している。7とともに14号住居址出土で、黒曜石製である。8は4号住居址出土で、石質は注質頁岩である。

II a (9~11) 10, 11はともに両脚部を欠損する。9は遺構外出土で石質はチャート、10は13号住居址、11は14号住居址出土で、何れも石質は黒曜石である。

II b (12, 13) やや大形の部類に属そう。12は脚部末端が器体正中線へ向う点で他の石鏝と異なる。14号住居址出土のチャート製。13は、遺構外出土で、石質はチャートである。

I e (14~17) 14は遺構外出土のチャート製で、15は遺構外、16は6号住居址、17は13号住居址出土で石質は15, 16, 17の何れも黒曜石である。

II f (19) 基縁右側縁に磨滅痕が認められる。14号住居址出土で、石質は片岩である。

III (20~22) 先土器時代の台形石器に似、素材の用い方も共通している。20は5号住居址、21, 22は14号住居址出土で、石質はすべて黒曜石である。

錐 器 (第45図, 図版33)

各種各様の剥片を素材として、その一端の両側縁に整形加工を施し錐部を作出するものである。この場合、いわゆるつまみ部を作出している錐は皆無である。素材となった剥片等を分類すると次の様になる。

第Ⅰ類 断面三角形の剥片 (4, 5, 8)

第Ⅱ類 打製石斧素材剥片 (9, 10, 11)

第Ⅲ類 打製石斧作出砕片 (1, 2)

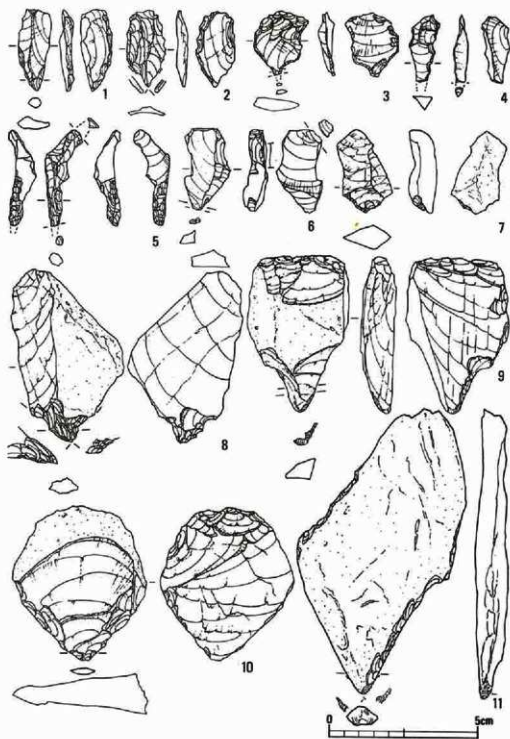
第Ⅳ類 剥片 (3, 6, 7)

第Ⅰ類 共通してその横断面が三角形を呈するものである。この種の剥片は、8を除くと、石核作業面側縁調整剥片としてしばしば見られるが、この時期の接合資料の貧弱さから、その形状をもって分類した。四類のなかでは唯一の錐器に直結する剥片であり、剥片剝離の段階で錐器の目的剥片としたものとも考えられよう。4は15号住居址出土の黒曜石製で、0.5gを量り、5は5号住居址出土の黒曜石製で、1.2gを量る。8は、遺構外出土のチャート製で、29.5gを量る。

第Ⅱ類 剥片の大きさや、一部側縁の整形加工が打製石斧と同様であることから、打製石斧素材剥片とした。当初は打製石斧を目的として、剥片を剝離し、整形加工を施していたものが途中で欠損もしくは、何らかの理由で錐器に目的を変換したものであろう。9は、中途の欠損例と考えられ、欠損面をそのまま残し、左側縁に整形加工を施し、錐部を作出している。錐部の使用痕としての回転磨減痕(図版39-4)が顕著である。14号住居址出土。砂岩で、24.3gを量る。10は、寸詰まりの横長剥片が素材であるが、両側縁は打製石斧の整形加工によって、裏面は石埋によって欠損し、錐器に作り変えられたものである。砂岩で、31.6gを量り、遺構外出土である。11は、正面二側縁の整形加工の後、裏面右側縁の整形加工によって、錐器としての刃部が尖頭状に仕上げられている。回転磨減痕が著しい(図版39-3・5)。頁岩で、52.3gを量り、14号住居址出土である。

第Ⅲ類 打製石斧製作時の整形加工を施した際に剝がされた砕片である。その砕片の特徴は長幅比1対2の横長砕片で、打面縁調整が見られ、その石質はすべて砂岩である。そうした砕片の側縁の尖った一端を錐部に設定し、剥片末端に整形加工を施している。1は、砂岩で1.1gを量り、5号住居址出土。2は、砂岩で3.0gを量る。14号住居址出土で、9, 11と同様の回転磨減痕が著しい。

第Ⅳ類 それぞれ高一性のない剥片を素材とし、その末端部を錐部としている。3, 6は黒曜石製、遺構外出土で、1.4g, 2.7gを量る。6の場合、表面右側縁上半部につまみ部の作出らしき整形痕が観察される。7は、背面全体に原礫面を残し、小礫を粗割り様に剝離し、その剥片末端に錐部を作出している。15号住居址出土のチャート製で、4.2gを量る。



第45圖 銅器 (4/5)

攝器 (第46図1~6, 図版34)

剝片の縁辺に急角度の刃部加工を施すものであり、大きさやその形態は一定していない。

1. 打面を欠損しているが、縦長剝片を素材としていよう。刃部加工は剝片末端に施され、刃縁角は89度を測る。珪質頁岩で、重さ5.6gを量り、遺構外出土である。

2. 他の攝器と異なって、素材に小角礫を用い、形態的には片刃礫器であるが機能を想定した場合、やはり攝器であろう。刃縁角は75度を測る。チャートで、17.3gを測り、14号住居址出土である。

3. 残核を素材として、その一縁辺に刃部加工を施している。裏面の刃部加工を施す際の主要剝離面としての単剝離打面に数個のパンチ痕が観察できる。刃縁角は83度を測る。黒曜石で、重さ8.4gを量り、15号住居址出土である。

4. 縦長剝片の右側縁に表裏面ともに刃部加工が剝離面に沿って施され、その刃縁角も40度と緩やかである。攝器というより、剝片の側縁の加工と刃縁角の緩やかさから、削器であろう。打面は線状を呈する。チャートで12.8gを量り、遺構外出土である。

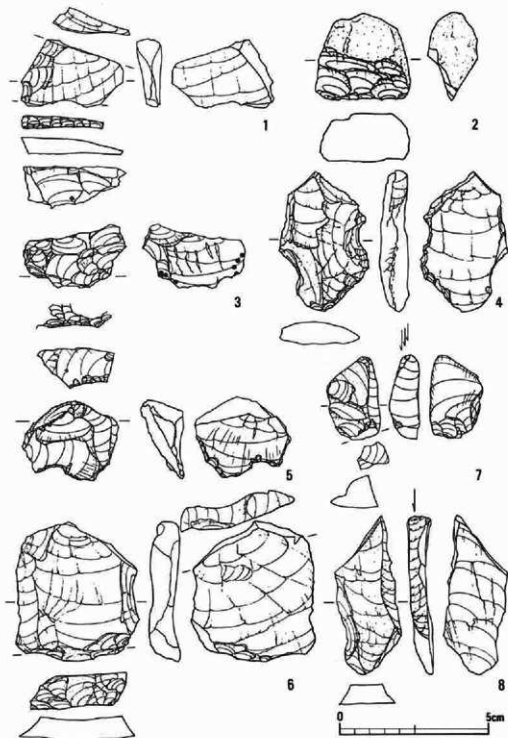
5. 単剝離打面で、剝離角108度を測る縦長剝片を素材としている。刃先は、4と同様に薄く、刃縁角42度を測り、挿入状に仕上げている。刃縁右側縁部に使用によると思われる擦痕が著しい。黒曜石で重さ7.3gを測り、14号住居址出土である。

6. 複剝離打面で、剝離角96度を測る寸詰まりの縦長剝片を素材としている。背面の剝離面から同様の縦長剝片が剝離されている。刃縁角は65度を測る。チャートで、23.8gを測り、遺構外出土である。

彫器 (第46図7・8, 図版34)

7. 複剝離打面で、剝離角85度を測る縦長剝片を素材としている。繰番剝離が著しい剝片末端を彫刀面作出打面とし、3条の種状剝離を施している。打面縁調整を割合と入念に施し、更に裏面打痕を除去している。彫刀縁と右側縁に刃こぼれが観察される。黒曜石で、重さ4.0gを測り、15号住居址出土である。

8. 縦長剝片を素材として、剝片末端を所ち折り、その折れ面を打面として、種状剝離を一条施している。刃縁角は44度を測り、刃縁には刃こぼれが著しい。なお、打面は線状を呈する。器体全面は被熱し、赤化する。石質は頁岩で、9.0gを量る。遺構外出土である。この時期においては、周辺遺跡の類例を知らないが、今後とも必ずや見出しされる器種である。



第46圖 擡器 (4/5)

小形磨製石斧（第47図1～4，図版34）

磨製石斧の中でも一際小形であり，軽量である。その平面形態は打製・磨製石斧と同一である。

1. 六面全体を面取りし，研磨している。したがって，上下左右に二重ずつ形作っている。形状からは寸詰りの小形磨製石斧に似ようが，刃縁を形成しない点において，基本的に他の小形磨製石斧と異なる。一種の護符の類と考えるべきかもしれない。15号住居址内出土の，緑泥片岩製で，重さ4.1gを量る。

2. 全面研磨で，両側面を形成している。研磨痕は表裏両側面にわたって縦横無尽に観察される。また，刃部には刃縁に直交した磨減痕が線状を呈して認められる。5号住居址と15号住居址の重複部分の出土の流紋岩製で，重さ8.7gを量る。

3. 表裏両側面を研磨するものの，裏面においては素材としての縦長切片時の主要剥離面を残し，起伏の高い部分だけが研磨されている。こうした点は，小形磨製石斧の製作工程の一面を知る手懸りとなろう。両側縁の蔽打整形もうかがうことができる。研磨では，とくに裏面刃部が著しい（図版39-2）。5号住居址出土の流紋岩製で，重さ16.0gを量る。

4. 全体が非常に丁寧に研磨され，表裏面と側面の角度が90度を測る位に定角である。刃部には2と同様刃縁にうねりをもって直交して線状を呈する磨痕が観察され刃縁の欠損後，再度研磨している。13号住居址出土で石質は流紋岩，重さ28.3gを量る。

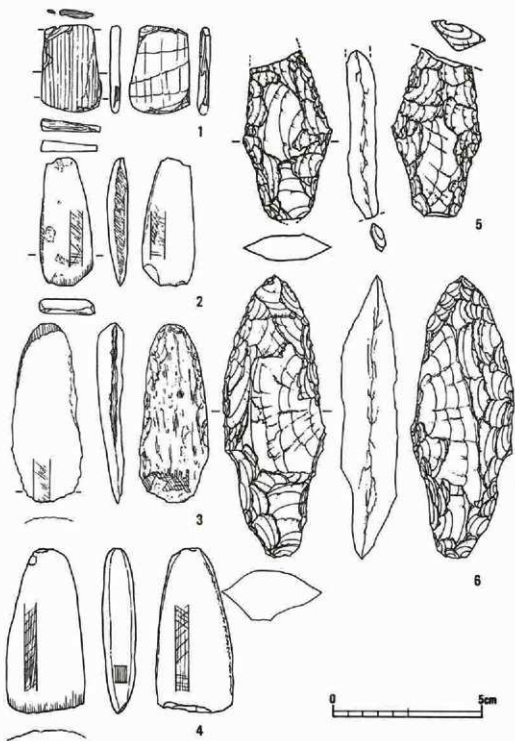
小形磨製石斧は，磨製石斧と同様出土数は極めて少なく，各住居址に数点見出されるだけである。そうした少数の出土ではあるもののその形態は非常に近似し，その使用の痕跡まで同一である。2，3，4ともにその基縁に研磨後の蔽打痕が観察されること，刃縁の正面観が2，3で弧を描くいわゆる丸ノミ状を呈することから，小形磨製石斧が横斧として，基縁に叩き石あるいはその他の打撃具をあてがって，手斧の様に使用したと想定されよう。

石槍（第47図5，6，図版34）

大きさの違いこそあれ，形態的にはほとんど同一であり，身の中央やや下位に最大幅をもち，先細りとなって，着柄部を形成している。石質も他の器種に見ない種の安山岩である。更に，両者とも，厚みのある横長切片を素材とし，整形加工も大きな調整剥離の後に，小さな調整剥離を施し，側縁角45度を測る点でも共通している。石質の選択，整形加工の施し方，素材の用い方，形態と石器の所持する属性をほとんど同じくしていることは，相当に様々の規制が働いていると考えざるを得ず，それは製作者が同一であっても変わりはないであろう。

5は，3号住居址出土で，18.3gを量り，先端は正面から，基礎は右側縁の加力によって折損し，差柄部がやや左傾する。

6は，15号住居址出土で，53.1gを量る。



第47图 小形磨製石斧・石槍 (4/5)

残核 (第48・49図, 図版35)

ここでいう残核は、石斧関係の器種以外の剥片石器の素材を生産した石核であり、生産し終えた残核である。

1. やや厚みのある扁平礫を原材としている。真正な剥片剥離を行っておらず、大きく二分している様である。いわゆる粗割りと考えられる。平坦な原礫打面の左側縁に、小剥離痕が認められるが、その意図は定かでない。石質は珪質頁岩で、重さ174gを量り、15号住居址出土である。

2. 舟底形に似る、90度打面転位残核である。打面は舟の甲板にあたる部分の単剥離打面もしくは目的とした剥片を剥がした剥離面を単剥離打面あるいは複剥離打面としている。甲板にあたる打面に看取される数枚の剥離面は打面調整とも考えられようが、打面調整という工程が残核に規則性をもって認められないこと、その他の剥離面と大きさ、形状に大差のないことから否定的である。その意味で石核作業面を三面所持する残核といえる。黒曜石製で、重さ53.1gを量り、15号住居址出土である。

3. 原礫打面、単剥離打面とする、90度打面転位残核である。打面調整、打面縁調整は認められない。原材はそれほど大きくない角礫を用いていることが、打面、裏面に残る原礫面から察することができる。主として、寸詰まりの横長剥片を剥離している。黒曜石製で、重さ7.1gを量り、14号住居址出土である。

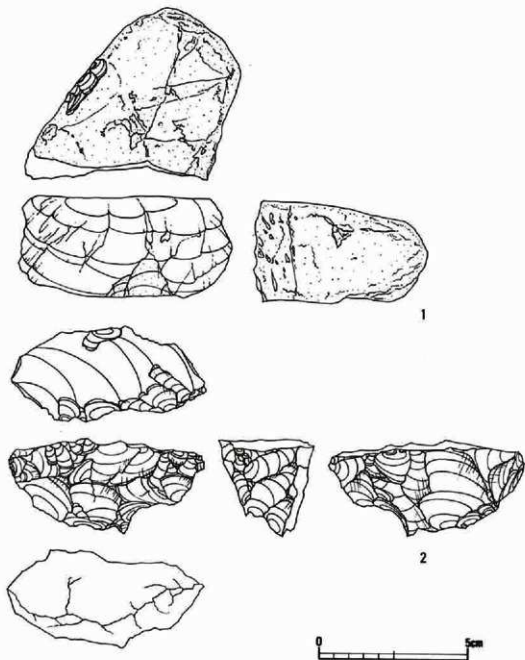
4. 原礫面を残さず、原材は同一母岩の出土量からも、かなり大形の黒曜石の塊であったと想定される。3点の接合資料は、aが残核、bが剥片で、3号集石で出土し、cは残核で、3号集石付近のグリッド出土である(第51図)。

打面は単剥離打面で、打面調整、打面縁調整はほとんど施されない。よって、剥片剥離後の打面はひさし状に抉れた状態になっている。

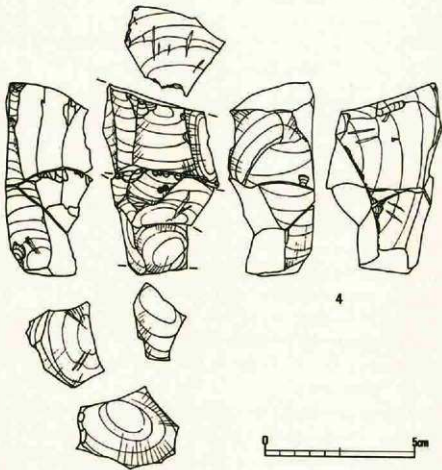
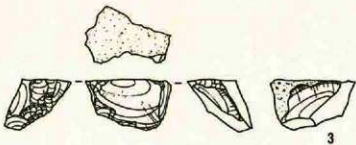
用意された石核素材は、割合に大きく分厚い剥片であったことは、裏面の一枚の大きな主要剥離面より明らかである。

剥片剥離は、打面を90度転位しながら行っており、主体的には、縦長剥片を剥がしているようである。そうした真正な縦長剥片は黒曜石の剥片中に僅少であり、断ち折り等の行為によって石炭等の素材剥片に供されたと考える。そして、剥片剥離の途中で何らかの加力によって、気泡を起点として三分している。

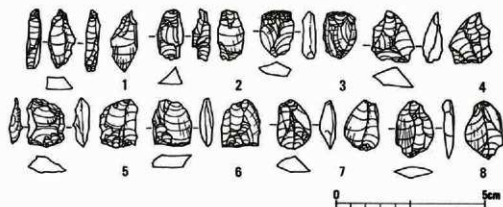
bの剥片の縁片には破損後に施された掻器の刃部加工に類似した調整痕が認められる。またパンチ痕が、a、bに観察され、aの打面部の抉ぐれの径と同径(2mm)である点は、打撃具の端部の直径を示唆するものであろう。



第48图 残核 (4/5)



第49图 残核 (4/5)



第50図 ピエス=エスキーユ (4/5)

ピエス=エスキーユ (第50図)

ピエス=エスキーユが、楔形石器であったり、縦断面をもつ石器であったりとするものの、その名称は定位置を得ている。数量的には少ないがその形態は特徴的である。(1)表裏面にネガティブな剝離面を持つ。(2)ひとつの剝離面は上下両縁に打面を持ち、器面の全体をおおふ。(3)上下両縁に微細に剝離痕を持ち、ときに潰れ度が認められる。(4)縦断面は紡錘形を呈す。以上の器種認定の要素を踏まえたうえで次のように、平面形態で分類を行った。

第Ⅰ類 上下両縁が先細り、長副比2対1の紡錘形を呈す(1, 2)。

第Ⅱ類 上下両縁が先細るか、直線状で、三角形を呈す(3, 4)。

第Ⅲ類 上下両縁ともに直線状で、四辺形を呈す(5, 6)。

第Ⅳ類 上下両縁が先細り、第Ⅰ類に比較し幅のある紡錘形を呈す(7, 8)。

第Ⅰ類は縦断面が四辺形を呈する点が他類と異なるが、その他の点で共通する。側縁部はあたかも桶状剝離を施したように見える。遺構外出土で1は0.7g、2は0.6gを量る。石質は図示したものすべてが黒曜石である。

第Ⅱ類から第Ⅳ類までは、既述のように平面形態だけの相違である。上下両端の微細な剝離痕の数量によって、その平面形態が左右されるようである。すなわち、その数の少ないものは先細りとなり、多いものは直線状を呈する。そうすると第Ⅲ類が最終形態と考えてよさそうである。3から8の順に0.9g、1.0g、0.9g、1.0g、0.9g、0.8gを量り、遺構外の出土である。

その大きさ、重さ等実に平均化し、現形が目的とした形態であることは間違いない。そこでまず、残骸の場合を考えてみると、器体の表裏面ともに縦長剝片を得た剝離痕が観察されるが、その剝片が何らかの器種の素材に供されたとは到底考えられまい。そうすると、微細な剝離が石鏃整形加工の剝離痕に似ることから、大きさ、縦断面の形状と考え合わせ、石鏃素材の一種とも考えられよう。よって、ピエス=エスキーユは今後とも課題の多い器種の一つといえよう。

接合資料 (第52~55図, 図版35)

1. 掻器 14号住居址内出土の掻器2点の接合である。素材となる剥片は両者ともに長幅比1対1である。打面は何れも単剝離打面で、打面縁調整は施されず、その際の特徴としての打面がひさし状に抉れる状態を示している。背面剝離面より、90度打面転位石核より剝離されたことが想定される。剥片はb, aの順に剝離角120度, 111度で剝離され、打面の高さも順次減少している。

剝離後各剥片の末端部に刃部加工が施され、刃部角はaが92度, bが88度と急峻である。石質はチャートで、aが21g, bが61gを量る。なお、aの左側縁は折損する。

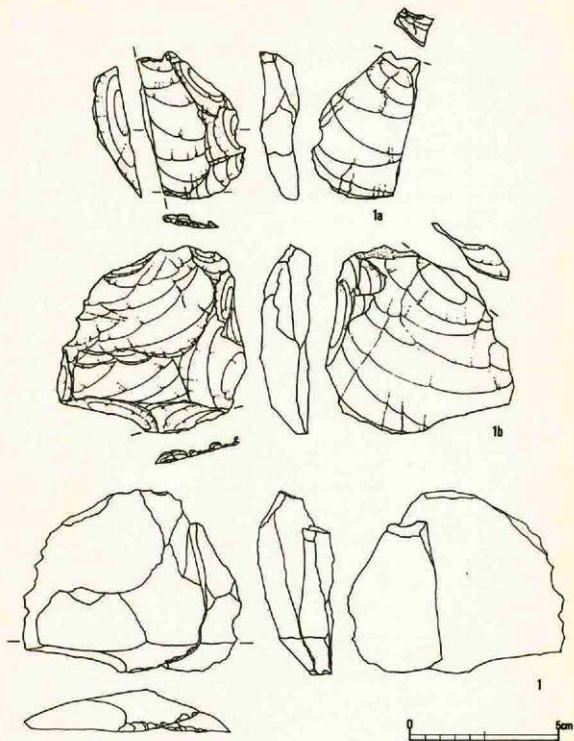
2. 磨り石 14号住居址内出土のほぼ半割した状態の欠損した磨り石が接合して完形となった例である。欠損面は右側面の叩きによるものであろう。表裏面ともに擦られており、敲打痕は周縁部と、表面中央に集中して観察される。兩個体とも被熱しているが、欠損後炉内出土のbが更に被熱し赤化している。使用欠損後に片方が炉内に捨てられたと考えるとよからう。石質は砂岩で、接合状態の重さが630gを量る。

3. 叩き石 破片2点の接合で、aが4号集石出土、bが5号住居址出土で、その接合距離は13mを測る(第51図)。両破片ともに被熱しているが、その度合は4号集石出土の方が断然と強く、時間幅は不明なものの、5号住居址→4号集石という前後関係は否めない。

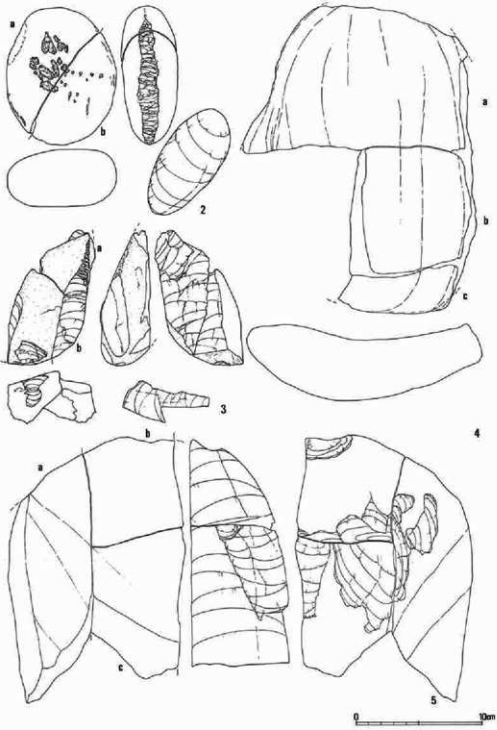
原形の叩き石は砲弾形を呈すると思われる。接合状態では、右側縁と下端に敲打痕が顕著で、表面全体に磨滅痕と、裏面下端に線状の傷跡が観察できる。石質は頁岩で、接合して272gを量る。

4. 石皿 欠損した3点の接合で、aが15号住居址内、bが3号集石内、cが2号集石内それぞれの出土である。a, b, cの何れも被熱し、その度合は強い方からc, b, aの順となる。aは欠損後の被熱は認められない。b, cともに欠損後被熱していることが欠損面の赤化より明らかであるが、b, cが3号集石内で破損したことは、cの破片の表裏(接合)面の被熱度が同じ点から否定できる。よって、15号住居址内で破損三分した後、各集石で被熱したと考えられよう。原材は接合状態から、扁平な長円形を呈しよう。花崗岩で、重さ3,200gを量る。

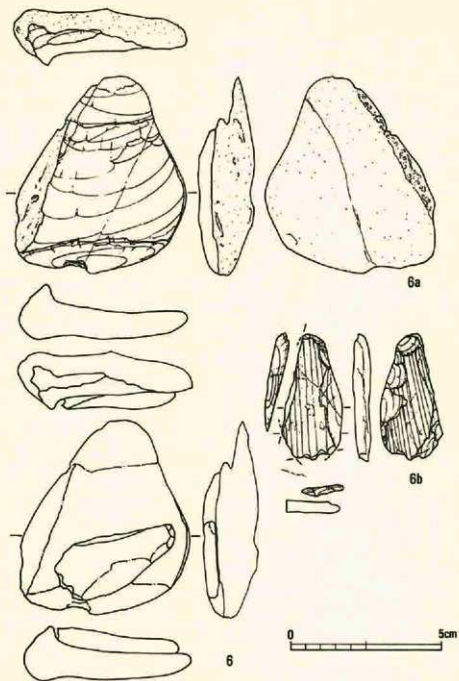
5. 石皿 欠損した3点の接合で、何れも14号住居址内出土である。接合状態で、表裏面ともに擦られており、とくに表面は、石理が隆起して現われてくる程である。断面でもそれは顕著である。3点とも被熱後欠損し、その度合は等しく観察できる。欠損はあくまでも使用による破損であろうが、裏面の欠損面からの調整剝離痕を考えると、目的をもった分割とも考えられ、何らかの器種への転用を試みたとも想定される。石質が凝灰角礫岩であることを考えると、石斧、とくに磨製石斧の製作を意図するものであったらうか。aが1,470g, bが720g, cが1,210gをそれぞれ量る。



第52图 石器接合图 (2/3)



第53图 磨石・石血接合图 (1/3)



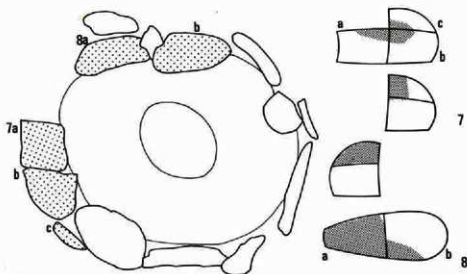
第54图 磨製石斧接合图 (4/5)

6. 小形磨製石斧 残核に小形磨製石斧の接合したものである。接合状態から原材を想定すると、扁平な片岩の三角礫であろう。小形磨製石斧は、背面に原礫面を残して、剝片を素材に仕上げている。第47図3と同様の製作工程を知ることができる。剝離した剝片の最も分厚い部位を残して、打面側とその反対の横長剝片末端に整形加工を施し、その後に、表裏ともに研磨している。刃縁と、左側縁は欠損する。残核下端に剝離痕が一枚認められるが、同様の小形磨製石斧素材剝片を剝離しようとしたものかどうかは定かでない。14号住居址グリッド内出土で、aが56g、bが5gを量る。

7. 炉石 (第54図) 5号住居址の炉石の接合である。完形時には、石皿として用いられたのか同一面上に磨り跡が観察され、図一面で被熱している(ドットは被熱面)。欠損して、aが離れた後b、cで別の熱を受け、更にcのみが向きを変えて被熱している。すなわち、炉石として住居址内に設定し、石皿→(割裂)→炉石→(割裂)→炉石として、割裂の度にその向き、配置を変えたことがうかがい知れる。石質は花崗岩で、全体の重さは8,858gを量る。

8. 炉石 7と同じく5号住居址炉石の偏石として用いられたものである。a、bともに石皿面、被熱面を完形時に同じくしている。しかし、割裂後bを炉内に対して180度回転させたらしく、被熱の度合がaと異なる面をもつ。花崗岩で、全体の重さが19,025gを量る。

(砂田)



第55図 炉石接合図

3. 土製品

土 偶 (第56図1, 図版39)

5号住居址出土。小形省略形土偶で上半身を欠失する。胴部より臀部にかけてハート形に広がり安定性がある。現高3cm, 胸部厚1cm, 脚部厚1.7cmを測る。腹部には小さな突起が認められる。正, 背面及び背面より側面にかけて細沈線により文様が表出される。色調は明褐色を呈する。

耳 椀 (第56図2, 図版39)

5号住居址出土。高さ1.8cm, 直径1.2cm, 両端がやや膨みをもち, 中央部に孔径3mmの穴が貫通している。

不明土製品 (第56図3, 図版39)

ミニチュア土器の口縁部片とも考えられる。焼成前に器表面から内面に向って穿かれた孔が2孔認められる。孔径3mm。器厚は1cmを測るが, 内面は剥落している。

ミニチュア土器 (第56図4~11, 図版39)

4. 5号住居址出土。口径6cm, 現高4.5cmを測り, 底部を欠失し, 全周の1/4程度が現存する。口縁部には沈線による弧線文が表出され, 沈線で画された胴部には条線文が施文される。

5. 口径5.5cm, 現高4cmを測り, 1/4程度の現存である。口縁部が内彎する。焼成良好で, 内面は横方向の研磨が加えられ, 赤色顔料が塗彩されている。

6. 14号住居址出土。口径5cm, 現高2.6cm。器面上部には指頭圧痕が看取される。

7. 口径6cm, 現高3.3cm。全周の1/4程度が現存する。器面には「輪積み」成形成が観察されるが, 内面は平滑に整形されている。

8. 5号住居址出土の底部片。底径2.8cm。器面には指頭による凹凸がみられ, 「手握ね」成形成かもしれない。

9. 底径3.8cm, 現高1.7cm。胎土粗く, 砂粒が目立つ。地文に条線文が施文される。

10. 14号住居址出土。底径3.3cm, 現高2.3cm。貼付け隆帯と沈線による蛇行懸垂文が1本ずつ描かれている。内面及び底面には整形時の擦痕が顕著に看取される。

11. 底径2.6cm, 現高3.2cm。底部は「手握ね」, 上半は「輪積み」成形成されたと思われる。器面には指頭圧痕が認められる。

器 台 (第56図12~14, 図版39)

12. 脚底径12cm, 現高3.3cmで, 現存部に穴が1箇所見られる。穴の回りを一本の沈線がめぐっている。脚部は肥厚する。

13. 14号住居址出土。現高4.5cm, 最大径9cm。現存部に円形の穴を2箇所もつ。下端は剝落し磨減している。器面には指頭圧痕及び横なで整形痕がみられる。

14. 5号住居址出土の脚部小破片。現高2.5cm, 現存部上端に穴が認められる。穴と脚端と

の間には、太い沈線文が2本施文される。

台付土器 (第56図15~17, 図版39)

15. 6号住居址出土。現高4.0cmを測り、脚部を欠失する。文様は、縦文を地文とし、2本単位の沈線による懸垂文が施文される。

16. 17は台付土器の脚部破片である。円形の穴が1箇所づつみられる。16は14号住居址出土。

粘土塊 (第56図19, 図版39)

14号住居址出土の焼成された粘土塊である。最大径6.1cm, 最小径4.7cm, 重量9.5gを測る。ちょうど一握り分の大きさである。明瞭な指頭痕はみられないが、全面に凹凸が認められる。また、2箇所ほど瓦状土具と思われる圧痕がみられる。胎土には砂粒を多く含み、焼成は良くない。

土 罎 (第57図1, 図版40)

1点のみの出土である。打欠いた土器片の長軸方向に挿入が認められる。計測値は、表に示した。

土製円板 (第57図2~24, 第58図, 図版40)

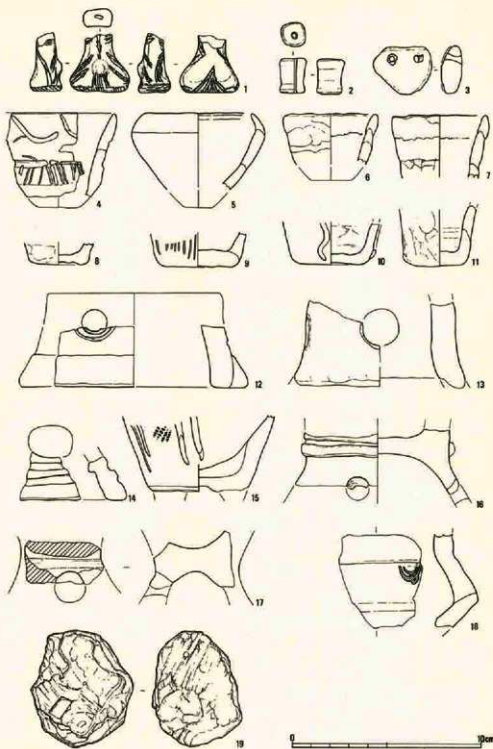
土器片の周縁を細く打ち欠き円形あるいは楕円形にしたもの、さらにその周縁を擦って仕上げられているものである。45点が出土し、住居址出土31点、遺構外出土14点である。計測値は第8表に示した。周縁の擦痕については、全周を擦ってあるもの(a)、部分的に擦ってあるもの(b)、打ち欠きだけのもの(c)に分けた。a-17個、b-17個、c-10個である。また、「擦れ」の状態も磨耗に近いものから僅かなものまで差異がある。径は3cm前後、重量は15g前後のものが多い。

(広 瀬)

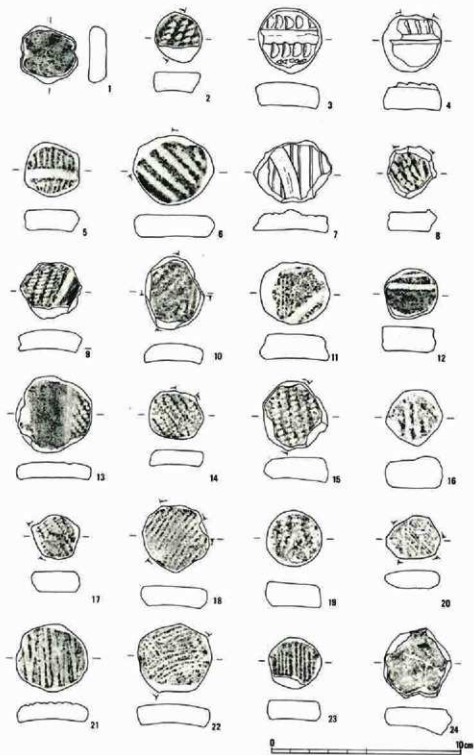
土器圧痕 (図版41)

2. 15号住居址出土。接合面に沿い断面長方形を呈する小形工具によって刻みが施される。
3. 4号住居址出土。a, cは中空の竹管様工具によるものだが、bの圧痕原体は不明。
4. 5号住居址出土。径0.2cm程度の混和物による圧痕を見る。積極的判断材料を欠くが、植物種子によるものと推定される。
5. 14号住居址出土。小破片のため全体の形状は不明である。屈曲部に二重半円状のスタンブ文を赤色顔料で押捺する。痕跡的に2cm程度の間隔をもち、横位に連続施文されていることがうかがえる。内面にも赤色顔料の付着を認める(第56図18)。

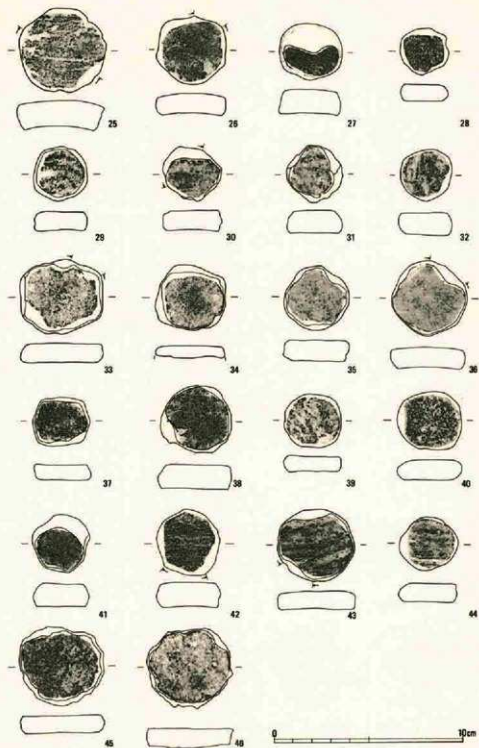
(石 川)



第56图 土製品 (1/2)



第57圖 土製円板 (1/2)



第58図 土製円板 (1/2)

番号	出土地点	重量(g)	最大径(cm)	擦痕	備考	番号	出土地点	重量(g)	最大径(cm)	擦痕	備考
1	遺構外	9.7	3.2	—	土 錘	24	遺構外	19.0	3.8	b	無文口縁部
2	15号住	7.1	2.6	b	勝板	25	5号住	33.9	4.5	b	無 文
3	3号住	14.9	3.4	a	*	26	6号住	18.9	3.5	b	*
4	14号住	13.4	3.3	b	*	27	6号住	15.1	3.3	a	*
5	15号住	11.8	3.1	c	*	28	6号住	7.1	2.6	b	*
6	遺構外	19.7	4.2	b	*	29	14号住	9.6	2.9	a	*
7	14号住	14.7	4.0	c	加曾利E	30	14号住	10.1	3.0	d	*
8	遺構外	7.7	2.7	b	*	31	14号住	10.6	2.9	b	*
9	14号住	10.5	3.3	b	*	32	14号住	10.5	2.8	a	*
10	5号住	33.9	4.5	b	*	33	14号住	19.9	4.5	b	*
11	5号住	19.0	3.6	a	*	34	14号住	10.5	3.8	a	*
12	6号住	12.0	2.8	a	*	35	14号住	16.2	3.5	e	*
13	14号住	15.7	4.1	a	*	36	14号住	20.9	4.0	b	*
14	3号住	7.9	2.9	b	縄 文	37	遺構外	9.0	2.9	a	*
15	6号住	18.8	3.6	b	*	38	遺構外	23.0	3.7	b	*
16	13号住	13.5	2.9	a	*	39	遺構外	9.9	3.0	a	*
17	14号住	7.1	2.5	b	*	40	遺構外	12.3	3.3	a	*
18	15号住	14.5	3.6	b	*	41	遺構外	13.3	2.9	a	*
19	15号住	13.4	2.8	a	*	42	遺構外	17.0	3.5	b	*
20	4号住	7.0	2.8	b	糸 線	43	遺構外	19.8	4.0	b	*
21	5号住	15.8	3.8	a	*	44	遺構外	10.1	3.0	a	*
22	遺構外	19.4	3.9	b	*	45	遺構外	22.9	4.5	b	*
23	遺構外	9.3	2.7	a	*	46	15号住	22.3	4.5	b	無文底部

第8表 土錘土製円盤，計測表

第5章 まとめ

第1節 恋ヶ窪遺跡の集落構造について

恋ヶ窪遺跡は現在その大半が宅地と化し、遺跡全容を解明するための効果的で広範囲にわたる調査は望めそうもない状況となってきた。こうした状況のもとで、昭和56年12月末までに15箇所が調査会により調査されている。また、調査会設立以前にも小規模な調査が何回か実施されている。恋ヶ窪遺跡の調査はいずれも限られた狭い範囲の調査であり、地点も遺跡全体にわたっている訳ではないが、一応の成果を得ている。そこで、今日までの調査成果をとりまとめ、恋ヶ窪遺跡の集落構造について概らかでもせまってみたいと思う。

まず、各調査地点における状況を概観していく(第59図)。なお、図中の数字は調査会による調査回数を示し、それ以外は調査会設立以前の調査地点を指す。

今回報告の第10次調査地及び隣接する第1次、第5次調査地では、17軒の住居址がまとめて検出され、土壌、集石は比較的少ない。住居址群は台地縁辺から30m程内側に入った地点にあり、台地縁辺部では少ない傾向がうかがえそうである。なお、この地点と一部重複した西側が昭和39年に松井、藤岡両氏が中心となり実施した調査地及び國學院久我山高校が実施した調査地域である。いずれの地点でも数軒の住居址が検出されている。また、東側の西武線よりの地点でも住居址が検出されている⁴¹。これらの事から、第1次・第5次・第10次調査地で検出された住居址群の東側及び西側への広がりが想定される。第1次調査地の南西傾斜斜面では、後藤守一氏により数石住居址が検出されており、現在も凹地となっている。また、東側の西武線の切り通しでも数石住居址が確認されたとのことである⁴²。

第12次調査地は、第10次調査地の北側隣接地であるが、10次調査地の遺構検出状況とは趣を異にしている。すなわち、第10次調査地では住居址が検出遺構の中心であったものが、第12次調査地では3軒の住居址も検出されたが、集石や大小の土塊及び多くのピット群にとって覆われているのである。詳細は現在整理中であるが、土壌の中には底面近くより2個の硬玉型大珠を出土したものもあり、土壌層と考えられるものもある。また、屋外埋蔵も3基が近接して検出されている。集石は6基が検出されている。第10次調査地では北側に寄って3基の集石が検出されており、第12次調査の北東城の第4次調査地でも1基の集石が検出されていることを合わせて考えてみると、この地域に10基以上の集石がまとめて構築されていることとなり興味ある状況である。

第4次調査地では、4基の土塊と1基の集石が検出されたが、住居址は存在しない。第12次調査地と類似した遺構の検出状況である。

以上が恋ヶ窪遺跡の南域から中央域にかけての状況である。次いで遺跡の北域に目を向ける。

第14次調査地は、第12次調査地の北方30～60mに位置する。1,300㎡程の加地に3割弱の確認調査を実施したところ18軒の住居址が確認され、敷地全体では30軒以上の住居址が存在するものと推測される。また、住居址と共に土塊、ピット群も多数確認されている。なお、第14次調査地の北西部に位置する第7次調査地でも3軒の住居址が検出されており、第14次調査地からの集落の広がりが想定される。

一方、第7次調査地の北側地域では遺構、遺物は極めて稀薄となっている。第13次調査地では集石1基と土塊数基のみで、遺物量も極めて少ない。第8次調査地では更にこの傾向が顕著となり、土塊が2基検出されたものの遺物はほとんど出土していない。これらの地域は、恋ヶ窪遺跡の北限を示すものであろう。

遺跡西域では、一部重複するが第6次調査と第15次調査が行われている。

第6次調査は南北100mのトレンチと、それに直行する40mと30mのトレンチを設立した。遺構、遺物は稀薄である。南北トレンチの北側で住居址1軒、土塊1基が検出されたが遺物は少なく、遺構外ではほとんど遺物は出土しない。南側の東西トレンチでは遺物集中箇所が1箇所検出されている。

なお、第6次調査では中世のものと思われる地下式墳が1基検出されている。また第13次、第14次調査地でも、縄文時代遺構確認面より上部で溝状遺構や土塊が検出されており、中世恋ヶ窪宿との関わりが考えられるかもしれない。

第15次調査地は第6次調査地の南側と一部重複する調査地である。住居址2軒と「Tピット」と呼称される土塊が6基検出されている。また、ソフトローム層中からナイフ形石器、槍先形尖頭器等をもつ先土器時代ユニットが2箇所検出され、恋ヶ窪遺跡が先土器時代から人々の生活の舞台となっていたことが明らかとなった。ちなみに、恋ヶ窪遺跡の北西側が先土器時代の石器群や礫群を検出した熊ノ郷遺跡であり、熊ノ郷遺跡と谷を隔んだ関分寺市 No.37遺跡でも先土器時代の石器や礫群が検出されている。

第15次調査地の南側付近が塩野半十郎氏が調査し、吉田格氏が「銅鐸」紙上に報告した「漣弧土器」等30個体余りを出土した住居址が検出された地点とのことである。

次いで恋ヶ窪遺跡の集落構造を考えるうえで重要な位置を占める西武国分寺線の東側に広がる日立中央研究所構内遺跡（羽根沢遺跡）の状況を概述しておく。

日立中央研究所構内遺跡は、今日までに数回の調査が実施されたのみでその状況はほとんど不明である。台地南東隅付近で扇塚式期の住居址と中期末葉と思われる敷石住居址が検出されている。

以上が恋ヶ窪遺跡及び隣接する日立中央研究所構内遺跡における調査概要である。これだけ

の調査資料で遺跡全体の集落構造を述べるには無理が多いが、現時点での成果として二、三の指摘をしてみたい。

まず、恋ヶ窪遺跡の集落範囲については、第1次調査地から第6次、第15次調査地を通り、第7次、第15次調査地の北側を結ぶラインの内側が想定されよう（第59図スクリーントーン部内側）。住居址はこの範囲内にまとまって検出され、外側では土壌等の遺構が散在する程度で遺構・遺物は稀薄となっている。この範囲内でも遺構の在り方にはバラエティーが認められ、比較的外側に位置する第1次・第10次・第14次調査地のように住居址が密集して存在する地域と、そのやや内側に位置する第4次、第12次調査地のように土壌、集石等の遺構が集中する地域とがある。このことから集落中央部に墓域等の空間があり、その外側に居住域が広がるといった占地状態が想定されるかもしれない。なお、集落中央部に遺構の認められない中央広場の空間が存在するか否かは現在までの調査では明らかでない。

この集落の広がりには恋ヶ窪遺構内では完結せず、集落東半部は日立中央研究所構内遺跡と呼称される西武国分寺線の東側にまで広がるものである。その規模は東西250～300m、南北200m程であろう。なお、恋ヶ窪遺跡東側には、恋ヶ窪遺跡と同規模程度の集落が台地中央部の小谷をはさんで対峙していたものと考えられ、前述の日立中央研究所構内遺跡調査地はこの集落に属するものであろう。恋ヶ窪遺跡、日立中央研究所構内遺跡は本来同一の遺跡として把握されるものである。

次いで恋ヶ窪遺跡の消長と集落構築時期について考えてみたい。恋ヶ窪遺跡に初めて人々の生活の足跡が残されたのは先土器時代後半である。地理的環境等からみて今後該期の遺構、遺物が更に検出されるものと思われる。恋ヶ窪遺跡の主体は縄文時代であり、今日までに検出された遺構は若干の時期不詳を除き、すべて中期に属するものである。中期以外では早期の遺物が過去に採集されており、後期前半の須ノ内式土器片も若干検出されているが、後期後半以降は生活の痕跡が全く認められない。恋ヶ窪遺跡のような縄文中期の集落遺跡が後期に至ると断絶するという状況は、武蔵野台地・南関東等の該期の遺跡でもよく認められる傾向である。生活環境の変化によるものであろうか。なお、国分寺市内では、縄文後期後半以降、弥生時代、古墳時代の遺跡は現在のところ確認されていない。

恋ヶ窪遺跡で検出された住居址を時期別にみると勝坂式期6軒、加曾利E式第Ⅰ～第Ⅱ段階6軒、同第Ⅲ段階3軒、同第Ⅳ段階4軒、同第Ⅴ段階7軒、同第Ⅵ、第Ⅶ段階0軒、中期時期不詳20軒である。このうち、第14次調査地が確認調査のみで時期決定に問題が残るが、各期の住居址の在り方にやや偏在性が認められる。まず、勝坂式期の住居址は勝坂Ⅰ式は存在せず、Ⅱ式、Ⅲ式のみである。但し、勝坂Ⅰ式後半の土器も若干出さしているため今後検出されるのかもしれない。加曾利E式期では第Ⅰ段階に属する住居址は非常に少なく、第Ⅳ、第Ⅴ段階の住居址が多数を占める。特に「連弧文土器」を主体とする第Ⅳ段階の住居址は資料的にもま

とまったものである。中期終末の第Ⅴ、第Ⅵ段階の住居址は現在検出されておらず、該期の遺物も少ない。但し、過去に検出された台地南縁斜面の敷石住居址や日立中央研究所構内遺跡の敷石住居址等は、中期終末から後期初頭の時期のものと思われ、集落の最も外縁部に該期の住居址が構築されているのかもしれない。こうした各期における集落占地の移動等については今後の課題としたい。

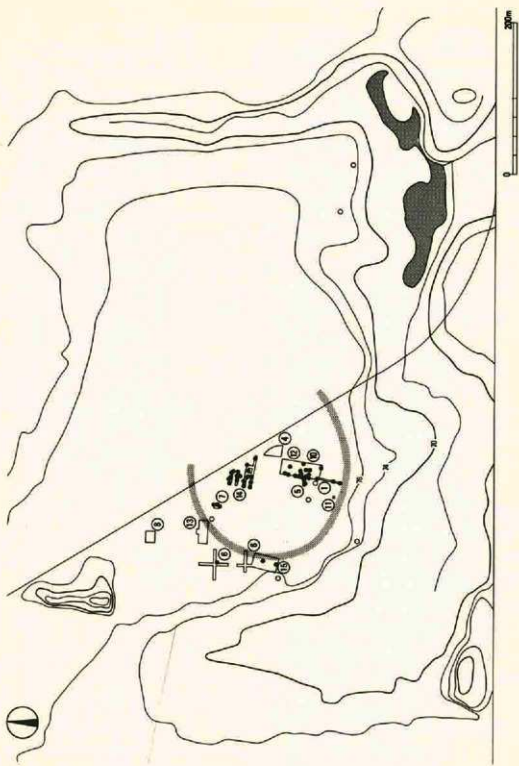
今後、恋ヶ窪遺跡での遺構・遺物の詳細な検討と共に、周辺の日立中央研究所構内遺跡、多喜窪遺跡との関係、更に野川流域遺跡群における恋ヶ窪遺跡の在り方といった点も検討しなければならぬと考える。

(広 瀬)

註

*1 松井新一氏御教示による。国立高校による調査で、勝坂式期の住居址が確認されたとの事である。

*2 星野亮勝、佐藤敏也、松井新一、藤岡徳助氏御教示による。



第59図 志ヶ窪遺跡遺構配置図 (1/5000)

第2節 出土土器について

勝坂式土器、阿玉台式土器に関して

今回の調査では集石遺構、遺構外から勝坂式土器、阿玉台式土器が比較的まとまって出土した。ここでは各々の類例を指摘するとともに、若干の説明と検討を加えたい。なお、記述は編年順とした。

勝坂式土器（第28図1・3・5・6，第29図8・9）

第29図8，矩形に文様区画するという特徴を有する。類似型式（type：以下同様）は本遺跡第5次調査出土土器（「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」第12図7），後田原遺跡1住（戸沢ほか，1970），大石遺跡21住（樋口ほか，1976）にみられるが，矩形区画文が全周せず途切れる点や指頭圧痕文が施文される点，陸帯上に刺突文が表出されない点等が相違する。また，矩形区画文と指頭圧痕文が同一個体上に表出される例としては大石遺跡3住例がある。なお，本土器の胴欠失部には矩形区画文でなく，抽象文が表出されていた可能性もある。第26図9は無文の口縁部が大きく外反する形式（form：以下同様）を呈する。類例として後田原遺跡2住，中溝遺跡1住（山本ほか，1974），栗山遺跡B地点（土井ほか，1975）例等が挙げられる。但し，本例の三角押文はやや崩れており，いわゆる“手抜き的手法”（小林，1966）がみられることより，後田原遺跡例よりやや新しいと思われる。この2個体（8・9）はともに勝坂Ⅰ式末葉ないし同Ⅱ式初頭に位置付けられよう。

第28図5，特異な形式の時期認定は良好な伴出関係が得られない場合困難が伴うが，文様表出に三角押文が使用されているものの，小波状文を三角押文でなく沈線で表出している点等から，それ程古い時期にはさかのぼらないと思われる。第28図6は口縁部の文様モチーフが特徴的で，あまり類例をみかけないが，胴部に一部窺われる文様モチーフ，表出技法は西関東地方では普遍的にみられ，勝坂Ⅱ式の一つのメルクマルとなっている。第28図5・6を比較すると，5の方が表出技法等においてやや古い感じを与えるが，双方伴出していることより共に勝坂Ⅱ式として扱えられよう。第28図3は指頭圧痕文を表出している点阿玉台式を相起させるが，阿玉台式土器中には本例のような形式や文様構成を有する例がないこと，胎土に金雲母を含まないこと等を考慮すると，阿玉台式の成形技法のみ模倣し製作した勝坂式土器といえよう。類似型式は大石遺跡12住でもみられる。

第28図1，いわゆる嵌帯区画土器であり，甲信地方では蕨内式の代表的な一型式である。また，西関東地方でも多摩ニュータウンNo.46遺跡8住（安孫子，1979），貫井南遺跡6住（安孫子，1974），番の上遺跡S B 1（服部，1972），大和田遺跡J 2住（大川ほか，1974）例のように普遍的にみられ，安定した型式である。なお，この3号住居址のセットはすべて型式が異なる。

阿玉台式土器 (第29図2・3, 図版25)

本遺跡での阿玉台式土器は、主体を占める勝坂式土器に客体的に伴出し、しかもそれらは何れも小片である。

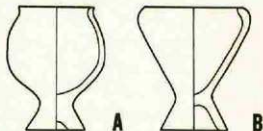
第29図2及び図版25左上は扇状把手を有し、その文様構成等から阿玉台Ⅰb式(西村, 1972等)として扱えられよう。西上遺跡B₂地点(和田, 1975), 阿玉台貝塚(西村, 1970), 三郎作貝塚(西村, 1971)等より同型式が出土している。

第29図3は山形把手を有し、区画内には二列の角押文が表出されており、阿玉台Ⅱ式に比定されよう。子と清水貝塚111住(関根, 1978)に類似型式がみられる。

台付土器について

3号集石遺構から一個体出土している(第25図5)。カップ形・トロフィー形と称されるこの土器を集成してみると、以下の如く二形式に分類できる。

A形式: 胴前半部付近で膨らみ、そこに最大径があり球状を呈する(第60図A)。



第60図 台付土器の形式(form)

新道遺跡1住(松沢, 1958), 井戸尻遺跡3住(藤森, 1965), 居沢尾根遺跡6住(樋口ほか, 1981), 藤内遺跡2住上層(藤森, 1965), 西上遺跡B₁・B₄トレンチ(和田, 1975), 三鷹五中遺跡(川崎・早川, 1966), 坂東山遺跡16住(谷井・宮崎, 1971), 恋ヶ窪遺跡3号集石(第25図5)等に類例がみられる。

B形式: 口縁部付近に最大径を有し、胴部は膨らみをみずにやや直線的に窄まる(第60図B)。

中原遺跡1住(藤森・武藤, 1963), 荒神山遺跡93住(岡田・宮沢ほか, 1975), 茅野和田遺跡東7住(宮坂・藤森, 1970), 曾利遺跡7住(藤森, 1965)例等があげられる。

現在のところ、A形式のほうが多数存在しているようである。

この台付土器は「新道期に確立し、井戸尻期で最も発達した」(藤森, 1965)という指摘がなされている。上記例では、新道期は新道遺跡、西上遺跡、藤内期は中原遺跡、茅野和田遺跡、三鷹五中遺跡、恋ヶ窪遺跡、井戸尻期は井戸尻遺跡、荒神山遺跡、曾利・加曾利E期は藤内遺跡、曾利遺跡・居沢尾根遺跡・坂東山遺跡となり、新道期から井戸尻期を経て、曾利期(曾利V式)まで存続している。今後、類例が増すことで変遷過程もより明確にされるであろう。

以上、台付土器について形式分類を主体に簡単に触れたが、今後は変遷過程、分布等についても検討を加えたい。なお、用途に関しては、「特殊な供献具」（藤森、1965等）であろうという見解が主体的であり、集石遺構から出土している本例も、台付土器の用途を物語る一例と言える。（山崎）

中期後半の土器を中心として

今回報告のうち、中期後半の土器を中心として住居址別に若干言及を行いたい。

15号住居址

加曾利E式第Ⅱ段階の比較的良好な資料が出土した。一部5号住居址に切られているため、完全ではないが、第Ⅱ段階の組成が窺われる。本住居址で目立つのは、同一型式（type：以下同様）がまとまって出土したという点である（第21図1～3）。これらはモチーフばかりではなく、表出技法、胎土等も非常に類似している。この型式は加曾利E式の主流をなす型式ではないが、第Ⅱ段階に普遍的に見られる。bの祖型は勝坂式木葉と重複する時期から認められ（貫井遺跡1住²、中山谷遺跡2住³、東原遺跡A-10住）、第Ⅰ段階を経て（岩の上遺跡23住、花影遺跡2住、吹上貝塚3住）、第Ⅱ段階の本例に至る流れが指摘できよう。なお、本住居址からは曾利Ⅰ式の所謂大渦巻把手付土器と呼ばれる型式の把手片が出土している（7）。このような共伴例として二宮遺跡1住があるが、一方第Ⅱ段階と曾利Ⅱ式が共伴する例もある。これは加曾利E式と曾利式の段階が各々消長を一にしないことに由来しよう。

6号住居址

1次調査の際、加曾利E式第Ⅲ段階の良好な資料が出土したが、今調査で資料の追加を見た。第22図1、口縁部文様帯の渦巻文が隆起し、側方を向く特徴を有する。類例は潮見台遺跡に存在するが、あまり多くない。しかし、渦巻文表出部が隆起する例は平山橋遺跡4住、堂ヶ谷戸遺跡2住等に散見され、第Ⅲ段階を形成する一型式として良からう。2は、本遺跡15住の1～3と同型式であり、本住居址出土の他の土器に比して一段階古い。これは出土状態（柱穴内より出土）に由来するものであろうか。

14号住居址

散漫な出土状態を示し、（第3章第2節参照）、小片が多く、完形ないし完形に近い土器は出土していない。時期的には加曾利E式第Ⅳ段階の土器を主体とするものの、ややばらつきが見られる（第26図7や9等）。そして、特筆事項として、本住居址より4住で炉に転用された土器の下半部が出土し、4住の炉体土器と接合したことが挙げられる。これは4住を構築し居住した集団が、土器を炉に転用する際不要となる部位を欠損させて近くの竈（14住）に投棄したという行為が読みとれる。このことから14住より4住の方が新しいという指摘ができる。な

お、この土器の胴上半部については類例を見ないが、胴下半部の左上方に渦巻文が表出される
口門状の区画は、下伊弉草文第Ⅱ段階⁴⁶の土器に類似例が見られる。

5号住居址

本住居址は覆土一括、床面直上、埋葬といった特徴ある出土状態を示す。そこで、出土状態別に個々の土器、土器群について検討を加えてみたい。

a 埋 葬 (第25図18)

形式(form:以下同様)は曾利式の一形式であるが、口縁部があまり外傾しないという特徴を有する。口縁部文様は半軟竹管状工具による細い沈線にて所謂重弧文を表出しているが、表出技法が半肉形状でない点、頸部括れ部のカーブが緩い点⁴⁸等から曾利Ⅲ式として扱えられよう。

b 床面直上出土土器 (第24図16・17)

2個体出土している。ともに口縁部文様帯の渦巻文が突出し上方を向くという特徴を有す。16は、下伊弉草文第Ⅲ段階⁴⁶の土器に、文様モチーフ、形式ともに共通性が多く、非常に良く類似している。また、西、南関東地方において、口縁部文様帯+胴部弧線文の土器は当麻遺跡22住、瀬見台遺跡11住(胴部は弧線文ではないが)、尾崎遺跡6号土坑、下北原遺跡、栗積台遺跡、宮添遺跡、山田遺跡⁴⁷で出土しているが、本例が形式、モチーフ等において最も伊弉草文土器の影響は看取できない。

c 覆土一括出土土器 (第23・24図1～3・6・7・12・13)

連弧文土器 (1～3)

これら3個体は各々型式が異なる。そこで形式、弧線文、地文について各々比較してみると、形式:胴部の括れが明瞭である(1)。胴部の括れが弱い(2)。胴部の括れが弱く目立たず、部分的に褶曲が見られる(3)。

弧線文:連弧文土器に表出される最も普遍的な弧線文の連続(1)。3本単位の弧線文のうち一番上位の弧線文の両端が内折し区画状を呈す(2)。波状を呈す(3)。

地文:条線文(1)。節の細かい縞糸文(2)。節の粗い縞糸文(3)。

という具合に悉く相違する。従来これらの個体差は時間差と考えられる傾向が強かったが、この出土状態からすると一時期のパラエティー、型式差として扱えられよう。

曾利式土器 (12・13)

12. 口縁部に斜行沈線が表出される土器であり、西、南関東地方で所謂重弧文土器とともにこの時期に普遍的に見られ、東、北関東地方まで分布を見る型式である。但し、分布の中心地域から遠ざかるほど文様の崩れや“手抜き”が目立ち、東、北関東地方の例には殆どそれが認

められる。西関東地方においてもそれが認められたり、在地化の窺われる個体も多いが、本例はしっかりとした施文がなされている。曾利Ⅲ式として扱えられよう。

13. 口縁部が無文を呈し、口唇部内側に粘土帯を貼付け厚層するという特徴が見られる。これは神奈川考古10号の曾利式編年表の91、94の系統であろうか。12と同様曾利Ⅲ式として扱えられよう。

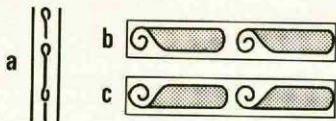
連弧文土器、曾利式土器以外の土器（6・7）

6. 口縁部文様帯の渦巻文が突出し上方を向く。胴部のモチーフを区画する懸垂文（第61図a）は唐草文土器にしばしば見られる。この懸垂文等から雰囲気的に唐草文土器を想起させるが、この形式は唐草文土器には見られず、むしろ加曾利E式的である。加えて本例と同様なモチーフは唐草文土器中には認められない点等より、唐草文土器としては扱えられない。なお、本例及び17の口縁部に見られる“渦巻つなぎ”で渦巻部が突出する類型は、現在のところ谷戸遺跡2住、堂ヶ谷戸遺跡2住と少なく、神奈川県や山梨県方面では現在類例を知らない。類似類型として区画文+突出渦巻文という例が存在する（平山橋遺跡4住：第Ⅲ段階）が、胴部モチーフが異なる。前者はほぼ十字状区画文に限定され⁸⁾、後者は直線懸垂文と蛇行懸垂文の交互表出ないし地文のみである。これらから、第Ⅳ段階に見られる“渦巻つなぎ”で渦巻部の突出するモチーフは、第Ⅲ段階例を遡り、第Ⅱ段階の新座遺跡5住で顕著に出土している型式に系統を求められるかもしれない。

7. 胴部に所謂“十字状区画”が表出されている土器である。口縁部が直立するキャリパー形の形式は、野田遺跡8住出土の43や44の系統を引くものと思われる。口縁部の文様モチーフは加曾利E式の範疇であるが、第61図bのように渦巻が上から巻込む例が一般的であり、本例のように下から巻込む例（第61図c）は少ない。胴部の十字状区画文は、多摩地方や神奈川県方面では第Ⅳ段階にしばしば見られる。類例を列挙すると平山橋遺跡5住、三鷹五中遺跡8住、谷戸遺跡2住、当麻遺跡7住、復戸第1遺跡1住から出土している。これらは大まかに以下のように三つに型式分類ができる。①口縁部渦巻つなぎ+胴部十字状区画、②口縁部加曾利E式範疇+胴部十字状区画、③口縁部文様帯なく全面に十字状区画表出。また、甲信方面では曾利Ⅱ式～Ⅲ式にかけて、①と口縁部曾利式範疇+胴部十字状区画の二型式が認められ、長崎元広氏はこの十字状区画の出自を唐草文系第2段階に求めている（神奈川考古第11号、p.49）。

以上、出土状態別に個々の土器、土器群について概説してきた。本住居址出土土器は筆者が「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」で指摘した、加曾利E式が連弧文土器に置換され曾利Ⅲ式が共存するという第Ⅳ段階の特徴、様相が非常に良く表われており、同段階の内容を充実させた。また、本住居址からは伊那谷の唐草文土器の影響が窺えられる土器が出土しており、今後連弧文土器の成立等に示唆を与える資料となろう。

最後に出土状態について若干言及したい。前述のように本住居址の出土状態はいわゆる吹上



第61図 文様模式図

パターン(小林, 1965)を呈する。そして、ここでaとした土器は住居構築時ないし居住時の土器であり、bは住居廃絶時の土器、cは住居廃絶後土壌の一次堆積を見た後投棄された土器と解釈される⁹⁾。そして、出土状態からはa→b→cという時間的流れが指摘できる。そこで出土状態別の土器の比較検討をしてみると(但し、a～c各々に共通した型式が存在しないため、いわば相対的な比較にしかならないが)、aとcの曾利式は前述の如くともに曾利Ⅲ式として扱えられ、明確な時間差は認められない。bの口縁部モチーフとcの一個体(6)の口縁部モチーフに共通性がみられる。これらより、本住居址ではa、b、c各々の間には積極的に時間差は認められず、出土状態からはa→b→cの時間の流れが認められるものの、土器からみるとその時間幅は一段階内であり、短いと指摘できる。(秋山)

註

- * 1 鉢形土器に脚台部がついた台付鉢(居沢尾根遺跡6住、大ノ原遺跡10住例等)とは区別される。
- * 2 秋山他 1978
- * 3 岡崎他 1975
- * 4 米田 1980による。
- * 5 米田 1978, 神奈川考古第11号P.48
- * 6 * 4と同じ
- * 7 神奈川考古10号(鈴木・山本・戸田1980)による
- * 8 胴部モチーフのみに限れば神奈川県、山梨県にも同様なモチーフは存在する。しかし、それらの個体口縁部モチーフは、山梨県例の場合渦巻つなぎなれど渦巻の突出は見られず、神奈川県例も異なる。
- * 9 小林氏が(小林 1965)で吹上パターン擬唱以米このように解釈されてきたが、山本氏は(山本 1978)で疑義を述べている。

註(第3節)

- * 1 打製石斧の製作工程の中に、被熱という行為を挿入すると、原材料→(被熱)→(分割)→(石核)→(素材制片)→打製石斧となり、全部で16工程を想定することができよう。
- * 2 なお今次調査ではいわゆる分割形の検出は皆無であった。

第3節 打製石斧について

該期において打製石斧が石器組成の中心を占めるのは周知の事である。因みに、全石器に対する打製石斧の割合は5号住居址が約28.7%、14号住居址が約26.6%、15号住居址が約27.0%を占め、遺構外においても約29.5%と、ほぼ30%を占める。この割合は、剥片、砕片を除いた決定器種だけに絞ると、60%近くの高率に及ぶのである。

打製石斧の出土量の多さが何に起因するかは、縄文時代中期の生産活動を考えるうえでまこと重要な問題である。狩猟、生産用具としての石鏃、石槍等の出土量の僅少さは、住居内あるいは住居周辺での使用状況の僅少さであろうし、逆に打製石斧の使用範囲が住居内、住居周辺に専らであったと想定されよう。さらに、石器という器種の中での打製石斧の占める割合は確かに多いが、他の材質の器種、木器あるいは骨器という器種を考えた場合果してどうであろうか。あるいはまた、打製石斧すべてが生活用具に供された訳ではなく、ほかに何らかの意味合いを所持していたとも考えられるが、これらはいずれも全く想像の域を出ず、可能性としか言いようがなからう。

ここでは、打製石斧の製作から使用を接合資料等を通して復原し、また彼ら縄文人が目指した打製石斧の形態を抽出した。

打製石斧素材剥片剥離工程（第62・63図、第9表）

1. 各住居址で見た残核と同様、打製石斧素材剥片を剥離した、90度打面転位残核である。原礫面を残しておらず、原材の形状は定かでない。残核は円錐形を呈し、剥片剥離面を半剥離打面として、横長剥片、縦長剥片を剥離している。打点部分は何れも抉れており、亀裂を生じて、ヒビ割れる打点部分も観察できる。5号住居址出土の砂岩製で、494gを量る。

2. 14号住居址グリッド出土の打製石斧素材剥片（A）と、残核（B）の接合資料である。接合状態から原材は円礫を用いていると思われる。

まず素材剥片の剥離あるいは分割したものであり、接合面が石理面であることから後者の公算が強い。その意味では、A、Bは異個体ということになる。Aの裏面には一縁線にのみ調整痕が観察されるが、素材の変形には致っていない。つぎにBにおいて、原礫面と、石理面を打面として剥片を剥離しているが、丁度打面を180度転位していることになる。得られた剥片は、おそらく背面に原礫面を残す、打製石斧素材剥片となり、何れも分厚い縦長剥片である。石質は砂岩で、Aが620g、Bが554gを量る。

3. 5号住居址内出土の残核（A）、打製石斧素材剥片（B）（C）の計5点の接合資料である。原材は接合状態からかなり大形の長楕円形を呈する礫と考えられる。

原材の時点で表面において、分割もしくは大形の剥片を剥離し、そのあと再度分割し、Bは異個体の剥片として、一縁辺に整形加工が施されるが、その厚さや形状から放棄されたと考え

られる。A, CはBを分割後被熱している。そしてさらに、AとCは分割され、Aはそのままであるが、Cの方は分割された未知の石核より横長の打製石斧素材剥片として剥がされ、そして少なくとも四つに破損したものと考えられる。石質は砂岩で、Aの残核が2,760g、B, Cの素材剥片がそれぞれ520g、660gを量る。

4. 合計28点の同一母岩が認められ(図版36)、15号住居址出土の打製石斧(第40図2)とも母岩を一にする。ここでは、残核と打製石斧素材剥片の接合資料を提示する。石質は頁岩である。

原材は、ほかの同一母岩をも考え合わせると大形の円礫を用いていよう。ついで、原材を数個に分割し、打製石斧素材剥片の剝離に移るのである。

まず、A, Bの二個体に分割。個体Aは分割された礫を石核とし、素材剥片として剝離された横長剥片である(分割面を裏面とした)。次いで、整形加工として剥片bを剝離したのであるが、余りにも大きすぎたきらいがある。さらに素材剥片aの裏面に整形加工を施すものの、結局はそのまま放棄されたと考えられよう。重さでもaは153g、bは230gを量り、打製石斧作出砕片としては、過重な大きさと見えよう。

個体Bは、bをそのまま石核として、素材剥片aを剝離し、その素材剥片の稜上に整形加工と覚しき調整剝離が施される。しかしながらこの剥片のいびつな形状から、打製石斧素材剥片とするには、いささか無理もあり、その意図だけは汲みとれる資料である。aは105g、bは360gを量る。

5. 1~4とは異なり、14号住居址内出土の打製石斧素材礫aと、5号住居址グリッド内出土の素材礫の整形剥片bの接合資料である。接合状態から原材は直方体の角礫で、ほぼ半割している。bを剝離後、ネガティブなaの裏面を打面として、整形のためと思われる調整剝離を施している。原材の段階で打製石斧に近い形状の礫を選択していることが推察される。なお両個体とも被熱し、その度合はaの方が強い。石質は片岩で、aが416g、bが170gを量る。

さて、以上の接合資料等から、原礫より打製石斧に至る工程を表すと次のようになり、

原礫→(分割)→(石核)→(打製石斧素材剥片)→打製石斧

括弧内の各段階を経る場合、経ない場合を考えると、その組み合わせによって8通りの工程が考えられる。

すなわち、1:各段階すべてを踏む工程、2:分割段階を省く工程、3:石核段階を省く工程、4:素材剥片段階を省く工程、5:分割段階だけを経る工程、6:石核段階だけを経る工程、7:素材剥片段階だけを経る工程、8:原礫をそのまま打製石斧に仕上げる工程である。なかでも、1, 2, 3, 7が打製石斧の素材剥片を先ず得るといふ主体的な工程である。また、5, 8は原礫が打製石斧の素材礫となる主体的な工程である*1。

さて打製石斧素材剥片が、あくまでも打製石斧の素材となりうる剥片であり、原材から打製

石斧に至る工程の中でも、主たる位置を占めるものであった。そこで打製石斧素材剥片の属性を製品としての打製石斧を引き合いに出しつつ、打製石斧の「素材」であるが由縁を検討してみたい。

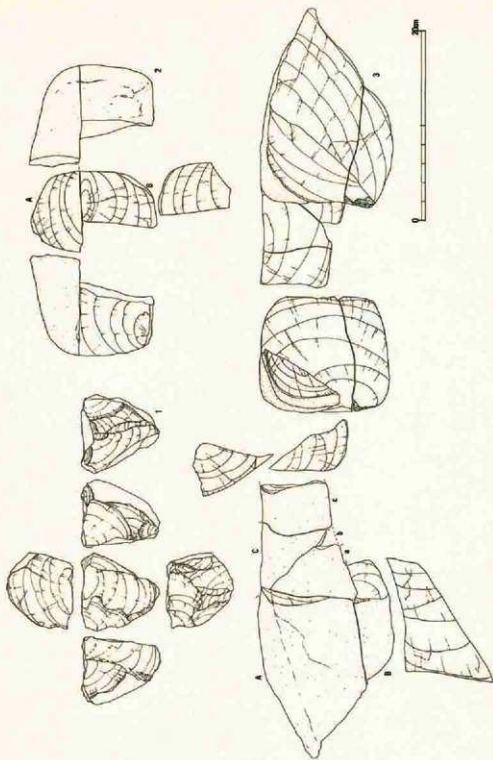
先ず、長幅関係（第64図中）である。ここでは縦軸を幅、横軸を長さとしてある。各住居址とも、若干のばらつきは認められるものの、長幅比1対1を中心として、量的に横長剥片が凌駕すると見て取れよう。第9表は、打製石斧の主要剥離面から、素材となった剥片の形状を知ろうというものである。すなわち、打製石斧を正面に置いた場合、横位からの打撃方向が全体の70%前後の高率を占めるのである。このことは、打製石斧の素材の大半が横長剥片であり、幅としての長軸を縦位に置き換えて打製石斧に整形していることがわかり、打製石斧素材剥片の必然性が理解されるのである。

次に、重量の分布（第64図下）を見ると、量的には、打製石斧と同様素材剥片も80g前後にピークが見られるが、それ以上の重さの素材剥片の割合は、打製石斧に比較して高率である。この点は整形加工によって、ある程度大形の素材剥片も、目的とする大きさの打製石斧に度更されたことを物語るものであろう。以上、打製石斧素材剥片の「素材」面を看取した。

さらに打製石斧の主要剥離面がその原材の石理とどういった関係にあるか（第9表）を見ると、各住居址を通じて約70%が石理に沿って素材剥片段階で剥離していることが理解され、石理を読むことの重要性を示すものであろう。

	方 向	5 住		14 住		15 住	
		%	(コ)	%	(コ)	%	(コ)
主要剥離面	上 H-HA-A	11.9	18	19.3	46	15.4	22
	下 D-DE-E	17.2	26	11.8	28	5.6	8
	横 AB-B-BC-C-CD EF-F-FG-G-GH	70.9	107	69.0	164	79.0	113
石 理	a-e	48.6	53	24.2	52	30.4	34
	b-c-d-f-g	51.4	56	75.8	163	69.6	78

第9表 打製石斧の主要剥離と石理

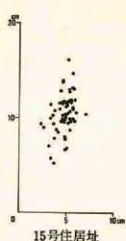


第62圖 石體接合圖 (1/4)

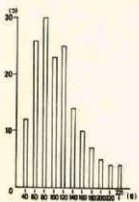
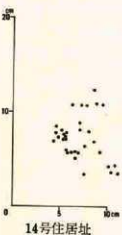
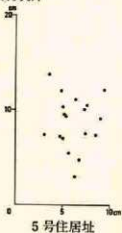


第63图 石器接合图 (1/3)

完形品



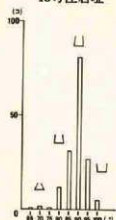
素材剥片



完形品の重量と個体数



素材剥片の重量と個体数

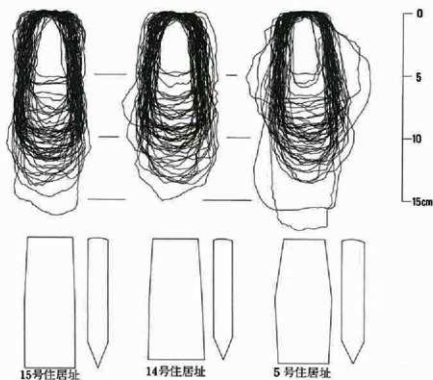


完形品の側刃角と個体数

第64図 打製石斧計測グラフ

形態 (第65図)

完形の打製石斧の正面輪郭線を5・14・15号各住居址別に、基縁、正中線をそろえて重ねたのが第65図上部の図である。さらに、それら3住居の完形打製石斧の大きさの平均値(長さ、基部幅、胴部幅、刃部幅、厚さ、刃先角)を基に作図したのが下部の模式図である。輪郭線の最も多く重なる部分が平均値に近いことはいまもなかろう。長さ、あるいは幅において突出した形態も看取されるが、それ以外の大半が一定枠の大きさにあり前後して落ち着くようである。因みに、各住居址別に完形の打製石斧の長さ、幅、厚さ、側刃角(刃縁と側縁のなす角度)、重さの平均値は、5号住居址が、10.4cm、5.2cm、1.8cm、85.9度、117.7g、14号住居址が、9.7cm、4.9cm、1.5cm、84.7度、87.3g、15号住居址が、10.5cm、4.7cm、1.6cm、86.8度、100.5gとなり、3住居址とも非常に近似した値をとる。また、64図上・中の長さとの相関グラフから、その比率が2対1の線上に集中する点をも考え合わせると、その大きさが、65図の模式図として代表されよう。そして、3住居址の完形の打製石斧の側刃角についてであるが、64図下で見えるように、80度を越え、95度未満に集中し、ほぼ直角を目ざしたことが理解され、そうでないのは9点にすぎず、この辺がいわゆる、短冊形と楕円形²⁾の分かれ目となる。そこで第65図に戻るなら、輪郭線が無々と重複して表われてくる大きさが、窓ヶ窪遺跡における打製石斧のかたちである。



第65図 打製石斧形態模式図

使用過程 (第66図, 図版36)

完形の打製石斧もさることながら、欠損した打製石斧からも得る情報は様々のものがあろう。ここでは、とくに欠損面の観察ならびに、打製石斧の接合資料を通して、その使用状況を想定し、何らかの指標を得るものである。まず接合資料(第66図・図版36)を見てみよう。

1. 遺構外のグリッド出土で、非常に薄い頁岩の偏平礫を素材とし、重さは241gを量る。胴部のはぼ中央を斜断して、下位(裏面)からの加力によって折損している。
2. 14号住居址のグリッド内出土で、砂岩の横長剝片を素材とし、全体に若干被熱している。重さは153gを量り、刃部を斜断し、下位からの加力によって折損している。刃部欠損のまま全体を想定すると、現接合状態より刃部が円く、長さがやや短く考えられたが、実際、不自然に伸びる結果となった。
3. 5号住居址南西隅(第51図)の出土で、珪質頁岩の横長剝片を素材とし、重さは126gを量る。胴部中央を横断して、上位(正面)からの加力によって折損している。欠損後基部の方は欠損面上端に整形加工を施し、新たな打製石斧として再生し、今度は再生した側を基部とし、欠損前の基部を刃部としているようである。なお、全面とくに、両側縁(ドット)の磨耗痕が著しく観察できる。

以上1～3の打製石斧は接合して完形に復した例である。

4. 15号住居址のグリッド内出土で、頁岩の横長剝片を素材とし、重さは134gを量る。胴部のはぼ中央で横断して下位からの加力によって折損している。なお、刃部の欠損は右位からの加力によるものである。また、原礫面だけに被熱による赤化とススの付着が認められることから、原材の段階で熱を受け、素材剝片として剝離され、打製石斧に整形されたのである。
5. 5号住居址内出土で、頁岩の横長剝片を素材とし、重さは90gを量る。刃部に近い部位で斜断して、下位からの加力によって折損している。さらに、それに続く下位の欠損面も下位からの加力によるものである。4と同様、原材時に被熱していることが観察される。
6. 14号住居址、15号住居址グリッド内出土で、珪質頁岩の縦長剝片を素材とし、重さは47gを量る。現接合状態では、裏面右側縁の調整痕が打製石斧の整形加工痕と同種である点、全体の形状等から、当初は打製石斧の製作を意図したものであろう。さらに、bが上位からの加力によって割れた後も、a、cで打製石斧と同様の機能を果たしたことが、両側縁の磨耗痕の観察から想定されう。結局はその刃部にあたる部位が横断して、下位からの加力によって折損するのである。また、最初に割れたbは、打製石斧の整形加工痕を伸ばす様に、剝片末端の両側縁に、刃部加工を施し、雑器として再生するのである。この雑器は14号住居址内グリッド、ほかの二点は15号住居址グリッド内出土である。
7. 14号住居址内出土で、砂岩の横長剝片を素材とし、重さは71gを量る。胴部のはぼ中央を横断して、下位からの加力によって折損し、刃部欠損面も同じく下位からの加力による。4、

5と同様に原材段階で被熱している。

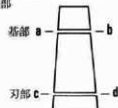
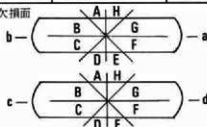
以上、4～7は接合して刃部欠損の打製石斧となった例である。

8. 3号住居址のグリッド内出土で、砂岩の偏平礫を素材とし、重さは47gを量る。胴部のほぼ中央を横断し、下位からの加力によって折損し、基部、刃部両側とも下位からの加力によって欠損している。全体に相当被熱し、赤化と焼けによる剝落が認められる。

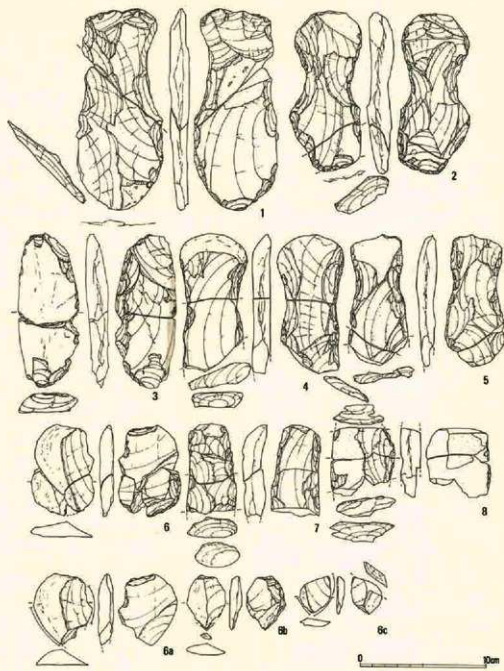
次に、各住居址別に欠損した打製石斧の現存部位を、基部、基部欠損、基部・刃部欠損、刃部欠損、刃部と順にその数をみてみよう。5号住居址が、18点、15点、29点、23点、26点で、14号住居址が、20点、41点、56点、26点、41点、15号住居址が、11点、27点、18点、16点、13点である。これらからは、特にある部位が量的に多いという点是指摘することはできない。

そして、第10表から、各住居址とも基部、刃部の差違なく、欠損方向が上位あるいは下位からの加力によるものがそれぞれ30%から60%近くに及び、上位、下位の合計では、80%から90%と実に高率なのである。対して横位からの加力は、整形加工の中断による折損、使用中によるねじれによる折損と考えられる。こうした点から、打製石斧は対象物にあたるに及んで、側縁部を天地に設定したのではなく、あくまでも正面、裏面を天地に設定したのであろう。しかし、実用に際しては、表裏の区別はほとんどなかったと考えられる。さらに、着柄に関しては、柄の持ち手部と打製石斧の装着部がどんな位置関係を持つかが、打製石斧の長軸が柄の長軸方向と平行し、延長する形で緊縛されたのであろう。(砂田)

欠損部	欠損方向	5 住		14 住		15 住	
		%	(コ)	%	(コ)	%	(コ)
基部	上 A-BGHHHA	41.4	29	34.8	48	44.8	26
	下 CD-DEE-EF	45.7	32	46.4	64	34.5	20
	横 B-BCCFFGG	12.9	9	18.8	26	20.7	12
刃部	上 A-BGHHHA	31.4	22	40.2	41	33.3	15
	下 CD-DEE-EF	58.6	41	52.0	53	48.9	22
	横 B-BCCFFGG	10.0	7	7.8	8	17.8	8

欠損部		欠損面	
-----	---	-----	---

第10表 打製石斧の欠損面



第66圖 打製石斧接合資料 (1/3)

引用参考文献

- 青沼博之・樋口昇一 1981「居沢尾根遺跡」『長野県中央道報告書一原村その4ー』 長野県教育委員会
- 赤堀英三 1929「石器研究の一方法」 人類学雑誌44-3
- 秋山道生・斎藤基生ほか 1978「貫井」 小金井市文化財調査報告書5
- 安孫子昭二ほか 1969「No.46遺跡」 多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ
- 安孫子昭二・可见通宏ほか 1971「平尾遺跡調査報告Ⅰ」 南多摩郡平尾遺跡調査会
- 安孫子昭二・佐藤攻・小田静夫 1974「貫井南」 小金井市貫井南遺跡調査報告
- 安孫子昭二・芹澤廣衛・大谷猛ほか 1978「文京区動坂遺跡」 動坂貝塚調査会
- 安孫子昭二 1979「1978年の考古学の動向一縄文時代(東日本)」 考古学ジャーナル165
- 安孫子昭二・秋山道生・中西亮 1980「東京・埼玉における縄文中期後半土器の編年試案」 神奈川考古10
- 安藤洋一・中村喜代重 1975「Stone-retoucher と思われる硬と類似した傷のある土器片」 考古学ジャーナル107
- 石井寛 1977「縄文時代における集団移動と地域組織」『調査研究集録2』 港北ニュータウン埋蔵文化財調査団
- 石川和明 1968「調布市深大寺町東原遺跡調査報告」 多摩考古9
- 伊藤富治夫ほか 1976「前原遺跡」 前原遺跡調査会
- 伊藤富治夫ほか 1980「貫井南遺跡」 小金井市貫井南遺跡調査会
- 大川清・戸田有二・大門直樹 1974「大和田遺跡第四次発掘調査概報」 立川市教育委員会
- 岡崎寛樹ほか 1975「中山谷遺跡」 中山谷遺跡調査会
- 岡田正彦・伴信夫ほか 1974「荒神山遺跡」『長野県中央道報告書一諏訪市内その1・その2、諏訪郡富士見町内その1ー』 長野県教育委員会
- 岡田正彦・宮沢恒三ほか 1975「荒神山遺跡」『長野県中央道報告書一諏訪市その3ー』 長野県教育委員会
- 岡本孝之・鈴木次郎ほか 1977「尾崎遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告13
- 小田静夫・高林均・岡崎寛樹他 1974「平山橋遺跡」
- 神奈川考古同人会 1978「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案」 神奈川考古4
- 神奈川考古同人会 1981「シンボシウム縄文時代中期後半の諸問題」 神奈川考古11
- 可见通宏ほか 1969「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅴ」
- 神村達 1973「増野新切遺跡」『長野県中央道報告書一下伊那郡高森町地区その2』 長野県教育委員会
- 川井正一 1980「赤松遺跡」 電ヶ崎ニュータウン埋蔵文化財調査報告4
- 川崎義雄・早川泉 1966「東京都三鷹市第五中学校校庭内遺跡調査報告」 考古学雑誌52-2
- 紀野自由ほか 1978「二宮遺跡」 秋川市埋蔵文化財調査報告書5
- 木村剛朗 1970「縄文時代石器における機能上の実験(1)」 考古学ジャーナル43
- 木村剛朗 1970「縄文時代石器における機能上の実験(2)」 考古学ジャーナル50
- 木村剛朗 1971「縄文時代石器における機能上の実験(3)」 考古学ジャーナル54
- 木村剛朗 1972「実験よりみた巖石とその用途(1)」 考古学ジャーナル74
- 木村剛朗 1972「実験よりみた巖石とその用途(2)」 考古学ジャーナル75
- 們田遺跡調査会 1975「們田第Ⅲ遺跡の調査」 們田遺跡群1975年度調査概報
- 們田遺跡調査会 1978「們田遺跡群」們田遺跡群1978年度調査概報
- 久保常晴・関波彦 1971「潮見台」
- 栗原文蔵 1959「吹上貝塚」
- 栗原文蔵・野間徳秋・今泉泰之 1973「岩の上・埴子山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書1
- 恋ヶ窪遺跡調査会 1979「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅰ」
- 恋ヶ窪遺跡調査会 1980「恋ヶ窪遺跡調査報告Ⅱ」
- 國學院大学久我山高等学校考古学部 1963「西田町谷戸第二遺跡第一次調査報告書」 久我山考古学小報2

- 小林公明 1977「縄文中期八ヶ岳南麓における農具としての打製石斧」 信濃29-4
- 小林進雄 1965「米島貝塚」 埼玉県庄和町教育委員会
- 小林進雄ほか 1966「多摩ニュータウン遺跡調査報告Ⅱ」 多摩ニュータウン遺跡調査会
- 小林進雄 1974「縄文世界における土器の廃棄について」 国史学93
- 小林秀夫ほか 1981「利ノ木山西遺跡」『長野県中央道報告書—茅野市・原村その3—茅野市その4・富士見町その3—』 長野県教育委員会
- 小林康男 1974「縄文時代生産活動の在り方①」 信濃26-12
- 小林康男 1975「縄文時代生産活動の在り方②」 信濃27-2
- 小林康男 1975「縄文時代生産活動の在り方③」 信濃27-4
- 小林康男 1975「縄文時代生産活動の在り方④」 信濃25-5
- 小林康男 1975「縄文時代の石器研究史①」 信濃25-7
- 小林康男 1975「縄文時代の石器研究史②」 信濃25-10
- 斉藤基生 1978「貫井」 貫井遺跡発掘調査報告
- 坂野芳一 1965「新庄」
- 坂井清彦・菊池徹・十兼敏武 1975「堂ヶ谷戸遺跡」 世田谷区史料第8集
- 佐倉剛 1979「出山遺跡」 三鷹市埋蔵文化財調査報告 第4集
- 佐原真 1977「石斧論—換斧から脱斧へ—」 考古論集
- 白石浩之 1970「C石器」 日野吹上
- 白石浩之・山本輝久ほか 1977「当麻遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告12
- 末木健ほか 1975「山梨県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書」
- 末木健 1975b「縄文時代中期の土器廃棄について」 史談5
- 末木健 1977「縄文時代中期の土器廃棄の再検討」 考古学ジャーナル133
- 末木健 1978「伊豆谷中部縄文中期後半の土器群とその性格」 信濃30-4
- 鈴木保彦ほか 1978「下北原遺跡」 神奈川県埋蔵文化財調査報告14
- 鈴木保彦・戸田哲也 1980「神奈川県における縄文時代中期後半土器編年試案 第2版」 神奈川考古10
- 隈昭志 1960「石器材料の石質からみた需給圖」 考古学研究7-1
- 関根孝夫ほか 1978「子と清水貝塚」 遺物図版編7 松戸市教育委員会
- 高林均・岡崎光樹 1981「武蔵国分寺岡遺跡の調査」
- 竹花和晴 1979「羽根沢台遺跡調査報告書」 三鷹市遺跡調査会
- 田中英司 1977「縄文時代における割片石器の製作について」 埼玉考古 第16号
- 谷井彪ほか 1974「花影遺跡の発掘調査」 埼玉県遺跡発掘調査報告書5
- 谷井彪 1977「勝坂式土器の文様構造について」 埼玉考古16
- 谷井彪 1977「勝坂式土器の産源と性格についての若干の考察」 信濃29-4・6
- 谷井彪 1979「縄文土器の単位とその意味」(時・空) 古代文化2・3
- 谷井彪 1981「勝坂式土器」『縄文文化の研究4, 縄文土器Ⅱ』 雄山閣
- 塚田光 1964「群馬県・新巻遺跡の中期縄文土器」 下総考古7
- 土井義夫・横山悦枝・肥田博ほか 1975「栗山」 小金井市文化財調査報告書4
- 東北大学文学部考古学研究会 1979「聖山」 考古学資料 別冊2
- 戸沢光則 1970「後田原遺跡」 岡谷市教育委員会
- 戸田哲也・榎原正 1978「新巻遺跡」
- 土肥孝 1975「針ヶ谷北通遺跡発掘調査報告書」 埼玉県遺跡調査会報告26
- 土肥孝 1981「阿玉台」a式以前の土器—五領ヶ台式と阿玉台式の間— 土曜考古4
- 長崎元広・齋藤幸雄・平出一治・島田哲男・末木健・米田明訓・奈良泰史 1980「山梨・長野における縄文時代中期後半の土器編年」 神奈川考古10
- 中島宏 1977「金堀沢遺跡」 入間市金堀沢遺跡調査会

- 中村金司 1981「埼玉県における阿玉台式土器研究の現状」 土曜考古3
- 西村正衛 1954「千葉県香取郡小見川町白井雷貝塚第2・3次調査」『早稲田大学教育学部学術研究第3号』
- 西村正衛 1969「千葉県小見川町木之内明神貝塚」 学術研究18
- 西村正衛 1970「千葉県小見川町阿玉台貝塚」 学術研究19
- 西村正衛 1971「千葉県佐原市三郎作貝塚」 学術研究20
- 西村正衛 1972a「千葉県香取郡向油田貝塚出土の土器」 学術研究21
- 1972b「阿玉台式土器編年研究の概要—利根川下流域を中心として—」 早稲田大学大学院文学研究科紀要18
- 服部敬史 1972「岳の上遺跡」
- 樋口昇一ほか 1976「大石遺跡」『長野県中央道報告書—茅野市・原村その1 富士見町その2—』長野県教育委員会
- 樋口昇一ほか 1980「船雲社（小田井）遺跡」『長野県中央道報告書—岡谷市その4—』長野県教育委員会
- 肥田潤博 1973「平代B」 小金井市文化財調査報告2
- 藤森榮一・武藤雄六 1963「中期縄文土器の貯蔵形態について—銅付有孔土器の意義—」 考古学手帖20
- 藤森榮一ほか 1965「井戸尻」
- 松井新一・藤岡啓助 1965「窓ヶ丘遺跡発掘調査概報」 多摩考古7
- 松浦喜一郎ほか 1971「多摩」
- 宮坂英弼・藤森榮一 1970「茅野和田遺跡」茅野市教育委員会
- 三鷹市遺跡調査会 1979「三鷹市第五中学校遺跡発掘調査報告書—図版編—」 三鷹市埋蔵文化財調査報告1
- 松沢亜生 1958「長野県諏訪郡新道の中期縄文土器」 考古学手帖1
- 宮崎朝雄 1977「塚木山古墳群」 埼玉県遺跡発掘調査報告書10
- 八木光則 1976「縄文中期集落の素描」 長野県考古学会誌25・26
- 八木光則 1976「いわゆる「特殊磨石」について」 信濃28—4
- 山村貴輝 1976「三鷹市第五中学校遺跡」
- 山本寿々雄ほか 1974「中瀬遺跡」 都留市教育委員会
- 山本厚久 1976「縄文中期における住居址内—招魂存土器群の性格」 神奈川考古3
- 横山悦枝・新藤康夫 1975「中山谷遺跡」 小金井市文化財調査報告書1
- 吉田格 1967「東京都国分寺町志ヶ窪窪欠住居址の土器に就て」 銅鐸12
- 米田明訓 1978「曾利式土器編年の基礎的把握」 長野県考古学会誌30
- 米田明訓 1980「南信天竜川沿岸における縄文時代中期後半の土器編年」 甲斐考古17—1

あ と が き

昭和54年度以来、2冊の調査報告書が恋ヶ窪遺跡調査会の手によって上梓されてきているが、そのいずれもの「あとがき」に、本会が行っている調査は、いわゆるこま切れ調査の典型であることを述べてきた。調査がそのような「かたち」でしか行うことのできない基本的ないくつかの原因があり、しかも、その原因はすぐれて社会的な問題に根ざしていると考えられるので、市レベルの対応では、到底解決のつくような生やさしい事情にはないのである。

いわゆるこま切れ調査の是非はさておき、そのような調査の方法でも、理論的には遺跡の全体像を復原し、考察し、記述することが可能である。しかしながら、そのためには長年月にわたる整理、記録、保存の作業が一貫して続行できる施設と組織の存在が前提の条件にならなければならないであろう。少くとも調査会の専有できる施設と人員との現況では、担当者に変更があると、それは直ちに資料整理や記録、研究の進行を鈍化させると同時に、折角獲得した情報が、本質的なものから遠ざかっていくことを阻止できない。問題に対する意欲や、条件によってよりよく発揮できもする一方で、意外なほど萎縮してしまひもする人ひとりの能力に関係しており、「慣れ」であるとか「義務感」などに期待できるのは、全体としてのごく限られた一部に過ぎないと断言できるであろう。

この報告書は、本調査会として実施した調査のうち、第10次に当る分の成果である。検出された資料には、恋ヶ窪遺跡が関分寺崖線に臨んで存在した遺跡の中でも、有数の内容を保有していたことを示す事象も含まれる。だが、昭和56年度に16次に達している調査以降、果してどれだけのメスを遺跡に加え得る余地が残されているだろうか。月を追ひ日を追って調査可能な場所は喪失されつつあるのである。

現在、そしてこれからの調査会を一恋ヶ窪遺跡の調査を取りまく各種の条件は、われわれの期待する方向とは逆に、いよいよ不満足な色彩を強めていくだろう。そして極端ない方だけでも、恋ヶ窪遺跡自体が埋蔵文化財として蘇生する手段は、もはやあり得ないと卒直に意識した方が、むしろ自然だと思われる。そしてこれからわれわれの手によって、結果的には切りきざんできた遺跡の身体を、基礎医学に例えば、どのように培養し、観察実験の成果をまとめ、そして一方では解剖標本としていかに残していくかが、全智を傾けて取りくまなければならない問題となってきてしまった。遺憾この上もないことである。

なお末筆ながら、文化財担当の課長として、本会の事業と深いかわり合いのあった山下実氏突然の逝去に対し、心から哀悼の意を表させて頂きたいと思う。

昭和57年3月

永 峯 光 一

恋ヶ窪遺跡調査会（組織）

会 長	奥 津 精 二	国分寺市教育委員会教育長
副 会 長	星 野 亮 勝	国分寺市文化財保護審議会委員長
理 事	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
	坂 詰 秀 一	東京都文化財保護審議会委員
	吉 田 格	国分寺市文化財保護審議会委員
	江 崎 昭 彦	東京都教育庁文化課埋蔵文化財係長
	坂 本 喜 市	国分寺市社会教育委員会副議長
	藤 岡 恭 助	国分寺市文化財保護委員会副委員長
	大 坂 喜 七	国分寺市教育委員会教育次長
監 事	山 田 弘	国分寺市教育委員会社会教育課長
事務局長	安 田 暉	国分寺市教育委員会文化財課長
事務局員	小 林 文 治	国分寺市教育委員会文化財課庶務係長
	鈴 木 晃	国分寺市教育委員会文化財課員

調 査 団

団 長	永 峯 光 一	東京都文化財保護審議会委員
顧 問	滝 口 宏	東京都文化財保護審議会委員
参 与	吉 田 格	国分寺市文化財保護審議会委員
調 査 員	広 瀬 昭 弘	国分寺市教育委員会文化財課員
	秋 山 道 生	(1980.10 退出)
	砂 田 佳 弘	
	実 川 順 一	

(昭和57年3月現在)

追 悼

園分寺市文化財課長山下実氏は、昭和56年
2月急逝されました。ここに歸んでご冥福を
お祈りいたします。



故 山 下 実 文化財課長

(昭和54年10月)

山下実文化財課長略年譜

昭和10年12月4日、新潟県高田市南本町3丁目にて出生

23年4月 高田市城隍中学校入学。

26年3月 同校卒業。

26年4月 新潟県立能生水産高等学校入学。

29年3月 同校卒業。

29年4月 東貿易株式会社船員課勤務。

34年4月 東京都北多摩郡国分寺町役場税務課勤務。

39年11月 市制施行。

40年4月 総務部庶務課庶務係長を命ぜられる。

45年4月 教育委員会へ出向。

教育委員会事務局指導室係長を命ぜられる。

46年7月 教育委員会事務局庶務課庶務係長を命ぜられる。

49年4月 教育委員会事務局社会教育課長を命ぜられる。

49年5月 武蔵国分寺関連府中街道遺跡調査会理事および事務局長を委嘱さる。

49年9月 武蔵国分寺遺跡調査会事務局局長補佐を委嘱さる。

49年10月 リオン構内遺跡調査会事務局局長を委嘱さる。

50年6月 教育委員会事務局文化財担当主幹を命ぜられる。

52年12月 恋ヶ窪遺跡調査会事務局局長を委嘱さる。

53年4月 教育委員会事務局文化財課長（初代）を命ぜられる。

東京都社会教育課長会文化財部会長（初代）を勤める。

54年6月 府中病院内遺跡調査会理事を委嘱さる。

55年11月 武蔵国分寺関連（府中市計画道路1・2・1号線の2）遺跡調査会理事を委嘱さる。

56年2月12日未明、心不全のため逝去。享年45歳。

著者目録抄

単行本

武蔵国分寺遺跡調査会年報1974武蔵国分寺跡
(河口宏編著の分担執筆)

武蔵国分寺遺跡調査会
国分寺市教育委員会

昭和54年3月

報告

武蔵国分寺跡公有化の歩みと史跡整備について

文化財の保護 12

昭和55年3月

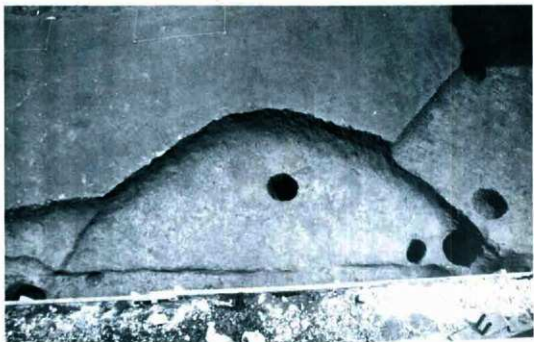
圖 版



遺跡付近 航空写真



遺跡近景 (中央線より)



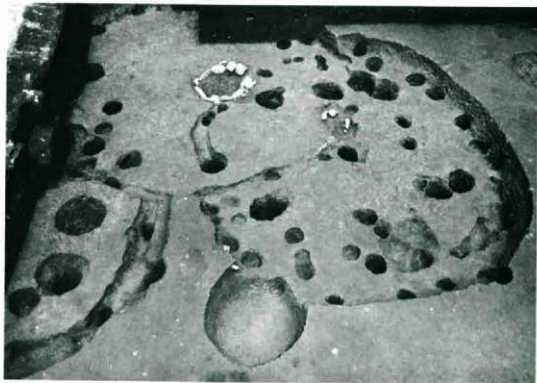
3号住居址



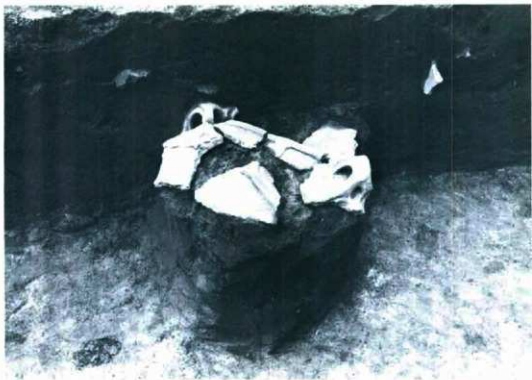
13号住居址



5号·6号·15号住居址、22号土城



5号·6号·15号住居址、22号土城



15号住居址出土状态



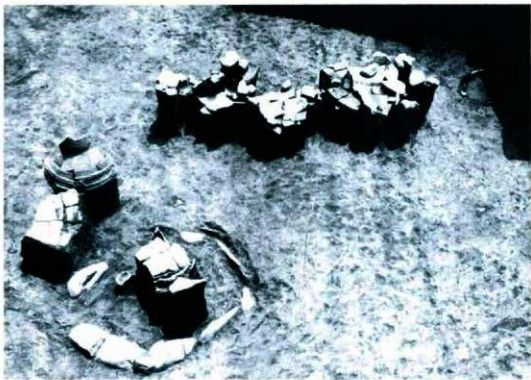
15号住居址出土状态



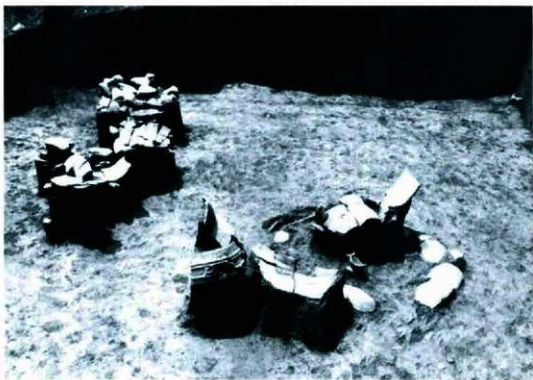
6号住居址出土状态



6号住居址出土状态



5号住居址出土狀態



5号住居址出土狀態



5号住居址出土狀態



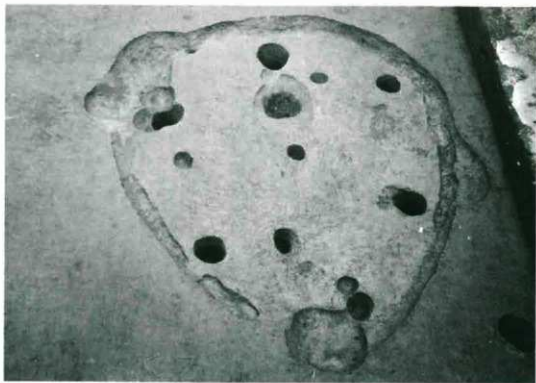
5号住居址出土狀態（第1次調査）



5号住居址埋甕



5号住居址炉



14号住居址、21号·23号·24号土城



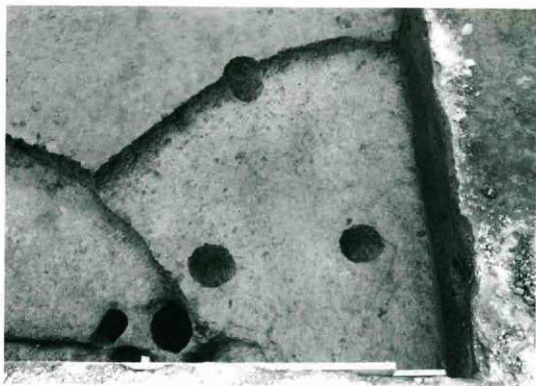
14号住居址出土状态



14号住居址出土状态



14号住居址炉



16号住居址



22号土壙出土状態



2号集石



2号集石(土城)



3号集石



3号集石(土坑)



4号集石



(5、2)区出土状态



発掘風景



発掘風景



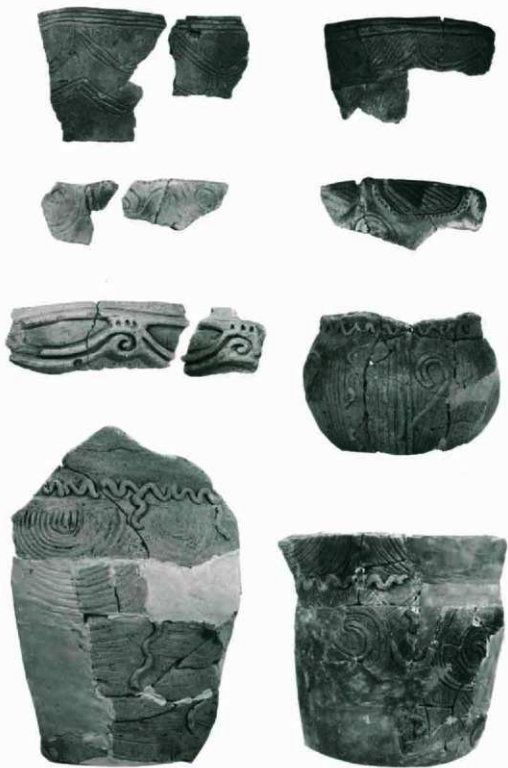
15号住居址出土土器



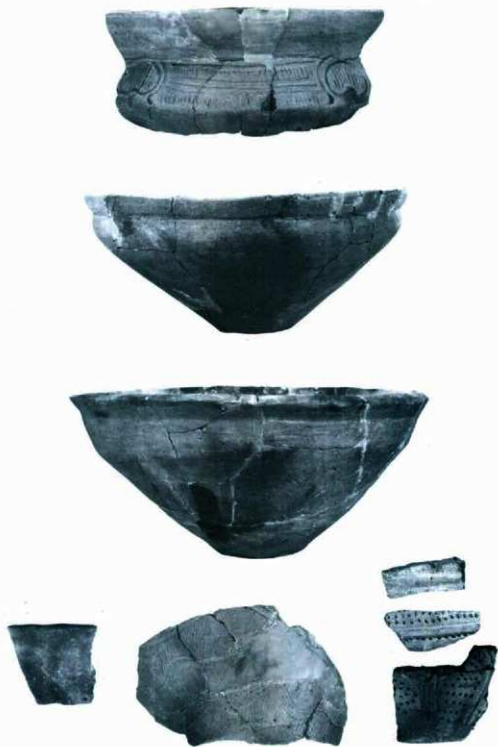
5号住居址出土土器



5号住居址出土土器



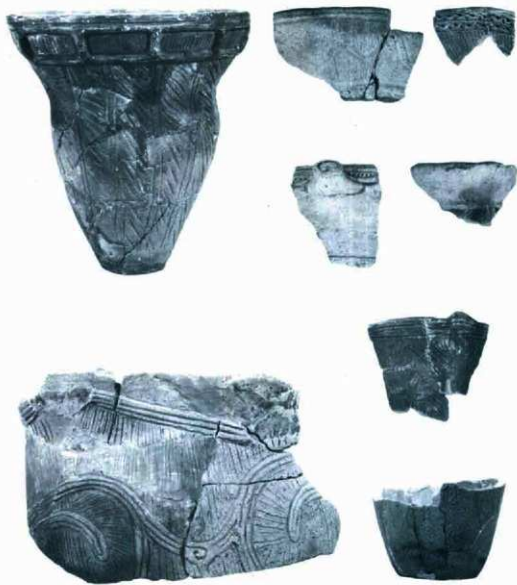
5号住居址出土土器



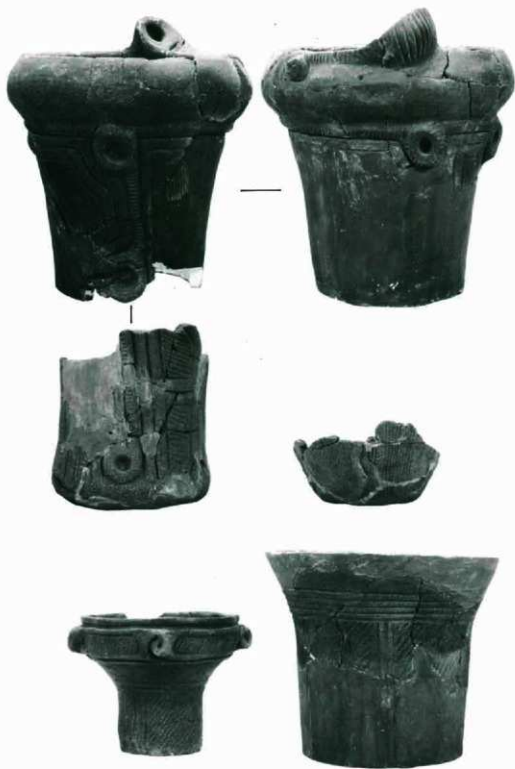
5号住居址出土土器



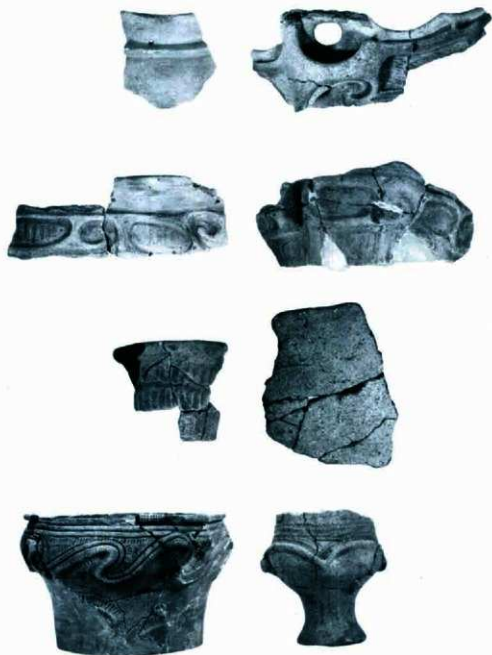
14号住居址出土土器



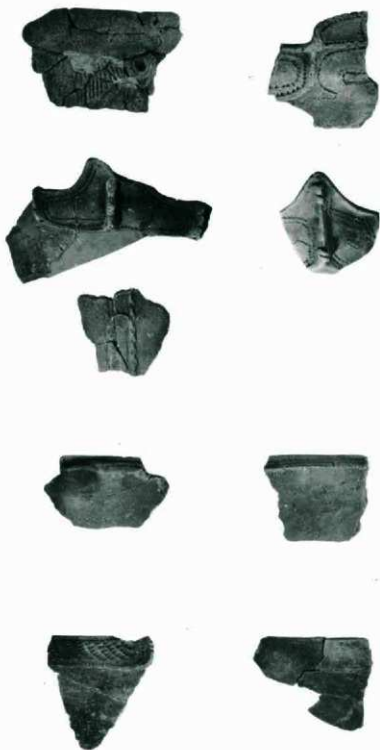
14号住居址出土土器



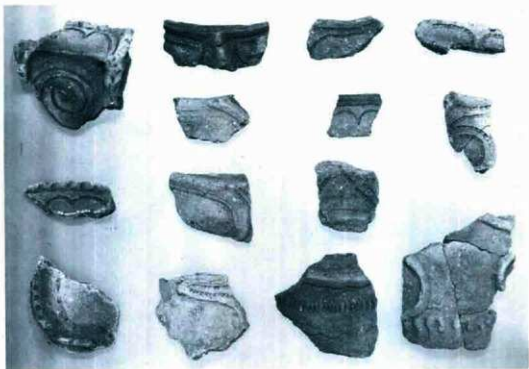
3号·13号·6号住居址出土土器



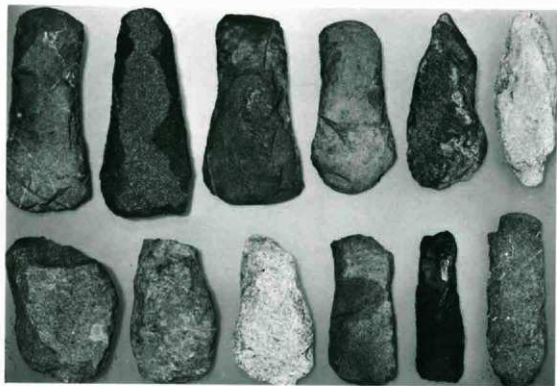
6号住居址、22号土城、2号·3号集石出土土器



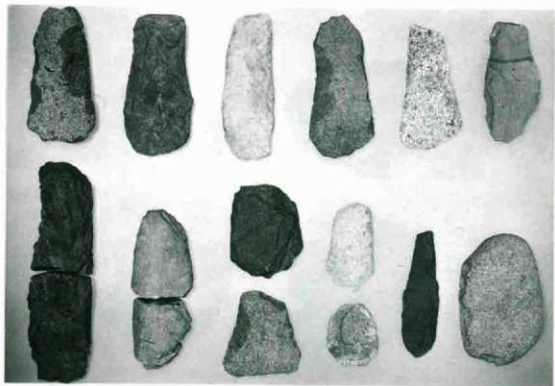
遺構外出土土器



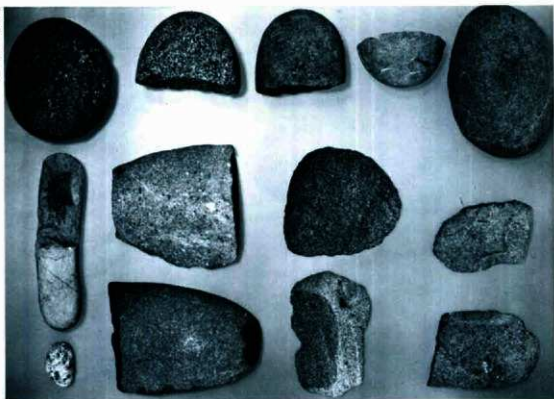
遺構外出土土器



5号住居址出土打製石斧



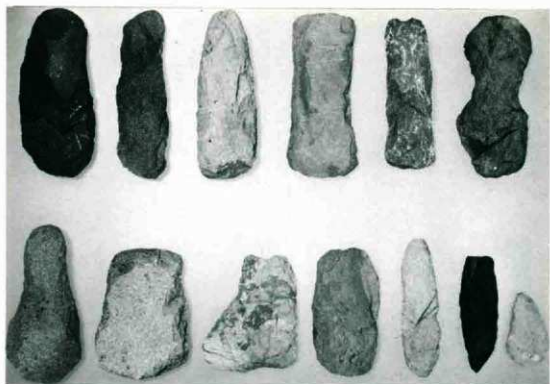
5号住居址出土打製石斧・打製石斧素材礫



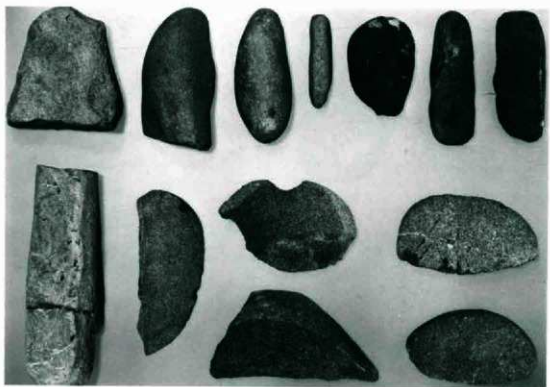
5号住居址出土磨石・叩き石・打製石斧素材剥片, 礫



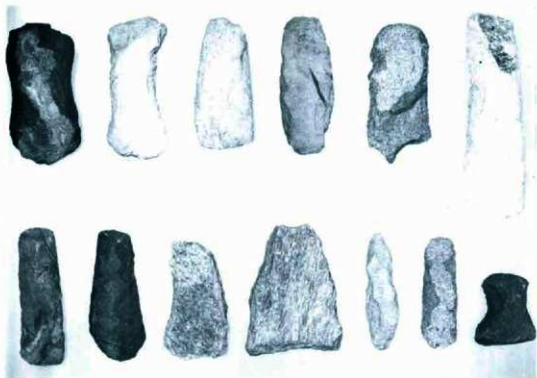
5号住居址出土残核・石皿



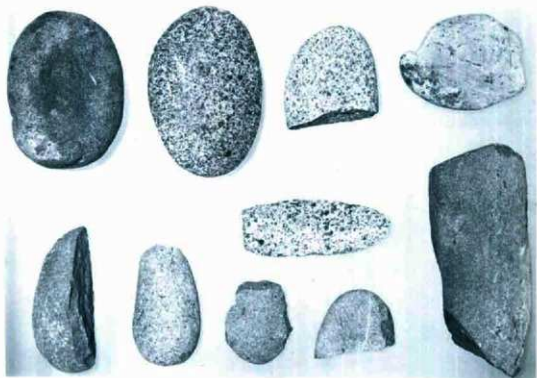
14号住居址出土打製石斧



14号住居址出土凡字形石器・叩き石・砥石・打製石斧素材制片, 礫



15号住居址出土打製石斧



15号住居址出土磨り石・調整器・叩き石・打製石斧素材制片、礫



14号住居址出土石皿

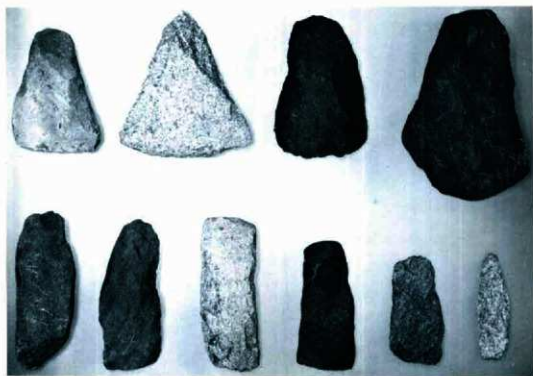
15号住居址出土石皿・残核



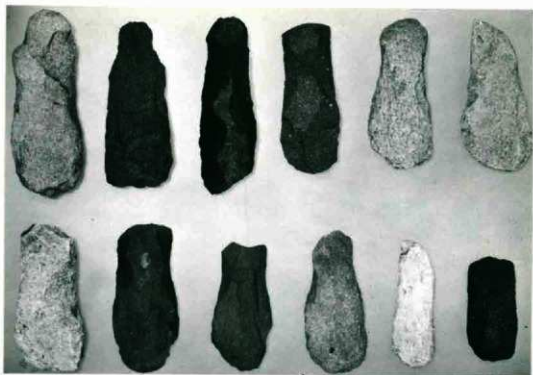
遺構外出土凡字形石器・打製石斧・打製石斧素材剥片



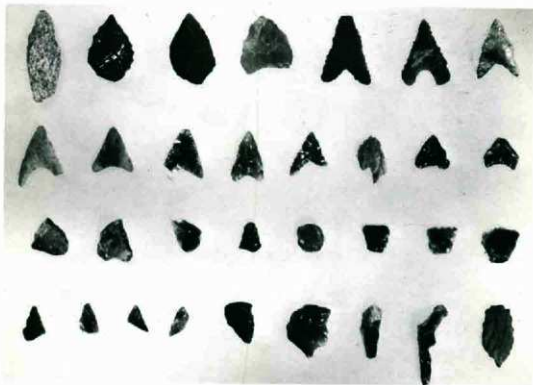
遺構外出土打製石斧・調整器・磨り石



遺構外出土打製石斧



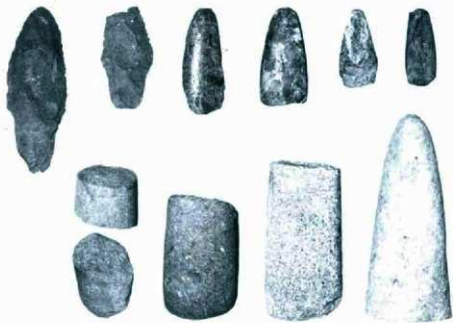
遺構外出土打製石斧



石鏃・鏃器



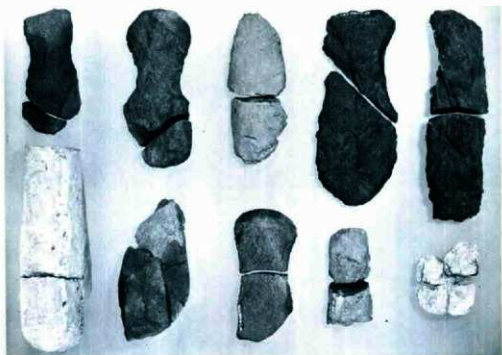
鈍器・搔器・削器



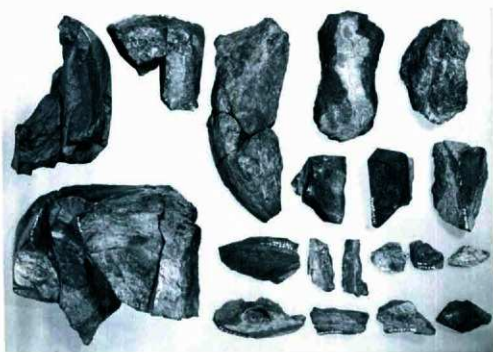
石槍・小形磨製石斧・磨製石斧



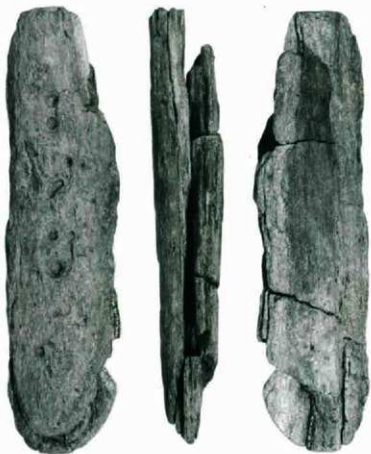
残核・搗器・錐器・小形磨製石斧・石皿・磨り石接合資料



打製石斧・打製石斧素材礫・叩き石接合資料



母岩別資料例



残核・素材剥片・凹石接合資料



1



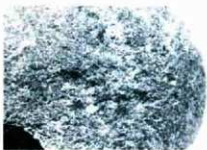
2



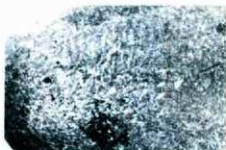
3



4



5



6



7



8

打製石斧・叩き石・砥石・調整器使用痕



1



2



3

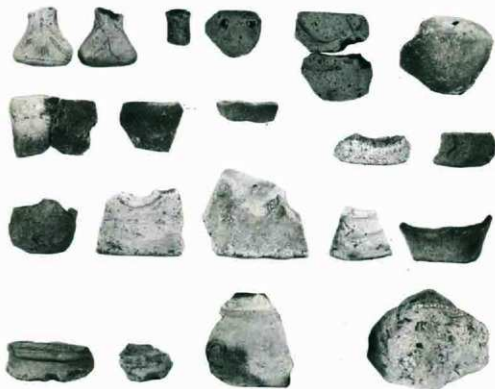


4

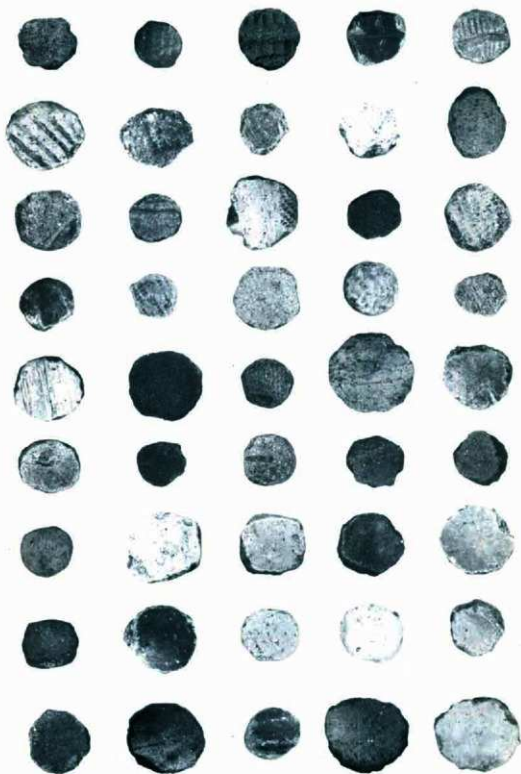


5

残核打面・小形磨製石斧刃部研磨痕・錐器刃部使用痕



土偶・耳栓・ミニチュア土器他



土製円板



1



2



3



3 a



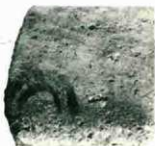
3 b



3 c



4



5

土器圧痕他

恋ヶ窪遺跡調査報告 Ⅲ

発行日 1982年3月

編著 恋ヶ窪遺跡調査団

◎ 団長 永峯 光 一

発行 恋ヶ窪遺跡調査会

東京都国分寺市教育委員会

印刷 統計印刷工業株式会社

令和4年(2022)3月2日 デジタル版作成
底本はB5版。